

337.1

1.56



* 0027214000 *

0027214-000

337.1-156ウ

貨幣信用及びインフレーション
の理論

猪俣津南雄・著

同友社

昭和23

ADH

33.11.28

337.1
I.56



猪俣津南雄著

貨幣
信用及び
インフレーションの理論

同友社版





序文にかへて

私は、本書の刊行に際しては、序文さへ落着いて書けないほどあはたゞしい思ひをせねばならなかつた。本書に筆を執り始めたのは今年の五月中旬で、それからかなり日は経つてゐるのだが、その間に私の仕事は幾度も中断を餘儀なくされた。警察にながく留置されたこと、それから母を喪つたこと、それやこれやで餘りよくない健康が更に悪化したこと、等。そのために、仕事は一向に捗らないのに、出版者と約束の期日は夙くに過ぎてしまひ、つひに退つ引ならなくなつて、甚だ粗末な原稿を版に上げせることになつたのだ。

さういふわけで、私は、本書が推敲不足であるのを大變讀者にすまなく思ふ。これは、私の習慣からすれば、もう一二度は書き直すべき筈のものである。せめて、校正だけでも見たいと思つたが、それさへも出来なかつた。——それらの點をこゝに讀者にお詫びしておく。

昭和八年十月

猪俣津南雄

目次

第一篇 貨幣及び信用

第一章 商品 價値	三
第一節 商品の使用價値と價値	三
第二節 労働の二重性	一三
第三節 價値形態、その發展及び貨幣の本質	二四
(一) 單純な價値形態	二六
(二) 擴大された價値形態	四一
(三) 一般的な價値形態	四五
(四) 貨幣形態	五三
第四節 商品經濟の一般的特徴づけ	五四
第二章 交換過程、その發展及び貨幣の必然性	五五

第三章 貨幣とその諸機能

第一節 價値の尺度

第二節 流通手段

(一) 諸商品の形態變化

(二) 貨幣の流通

(三) 鑄貨、價値表章

第三節 貨幣

(一) 貨幣の蓄藏

(二) 支拂手段

(三) 世界貨幣

第四章 貨幣の資本化と資本主義生産

第一節 貨幣の資本への轉化

第二節 資本主義生産

(一) 剩餘價値の生産

(二) 利潤及び利潤率

(三) 資本主義生産の歴史的傾向

(四) 恐慌と景氣循環

第五章 信用制度

第一節 信用制度の發展

(一) 商業信用

(二) 資本の貸附

(三) 銀行及び銀行信用

(四) 信用貨幣、銀行券

第二節 擬制資本

第三節 貨幣資本の蓄積

第四節 景氣變動と貨幣流通と利子率

第五節 信用制度と獨占

第二篇 インフレーション

第一章 紙幣インフレーション 二九

 第一節 紙幣流通の法則 二九

 第二節 紙幣インフレーション 三二

 第三節 紙幣本位は可能か? 三三

第二章 銀行券の紙幣化 三三

 第一節 銀行券と「信用インフレーション」 三三

 第二節 銀行券の紙幣への轉化 三五

第三章 爲替相場の法則 三六

 第一節 世界貨幣と兩替相場 三六

 第二節 爲替相場の本質 三六

 第三節 正貨現送點の法則 三七

第四章 爲替低落とインフレーション 三八

 第一節 紙幣インフレーションによる爲替低落 三八

 第二節 對外正貨支拂停止による爲替低落 三九

 第三節 爲替低落による物價騰貴と通貨膨脹(一) 三九

 第四節 爲替低落による物價騰貴と通貨膨脹(二) 四〇

 第五節 紙幣インフレーションへの發展 四〇

 第六節 結び——二つの貨幣現象の内部的關聯 四一

第五章 若干の批判及び反批判 四二

 第一節 先づ反批判から 四二

 第二節 プルチョア的一見解の批判 四三

第六章 信用インフレーション 四四

出版者跋 四四

第一篇 貨幣及び信用



第一章 商品 價 値

第一節 商品の使用價值と價值

誰をもの日常經驗が教へる通り、今日の吾々は貨幣なしには一日も過せない。このことは、吾々の現實の生活が、貨幣と引換へでなければ手に入れられぬ諸多の商品と如何に深く結びついてゐるかを示す。實際、吾々が生存し生活するに缺くべからざる諸々の財貨は、今や商品として生産されてゐる。商品生産は、この資本主義社會における生産の一般的形態をなしてゐる。そしてこの資本主義社會においては、商品の生産こそは人類社會の再生産を條件づけてゐる基本的事實である。

だが、吾々が自己の生命及び種屬を維持するために消費する諸財貨は、本來的・自然的に商品であつたのではない。歴史の示す通り、商品生産が支配的現象となつたのは、極めて近代のことであつて、過去の諸社會においては、商品生産が全然行はれないか、たかゞ附隨的現象に過ぎなかつた。されば、商品生産は、また資本主義社會を他の歴史的諸社會と區別づけるところの本質的條件でもあ

かやうに、資本主義社會は、商品生産が生産の一般的形態をなす社會であるが、しかもその商品生産たるや、單純な商品生産ではなく、資本主義的生産様式による商品生産である。資本主義にあつては、労働の生産物のみならず、労働力そのものまでが商品の形態をとる。歴史上、商品生産が或る程度まで發展することは、資本そのものゝ發生する前提であつた。單純な商品生産は、資本主義的生産の必然的な歴史的な前提條件である。

商品生産のないところには貨幣もない。貨幣は一定の條件の下に資本に轉化されるが、その貨幣は元來商品の轉化したものである。されば、貨幣を理解せんとする吾々はまづ商品の分析から始めねばならぬ。

資本家社會の富は、「老大な商品集合體」として吾々の前に現れてゐる。マルクスは、このブルジョア社會の最も單純な經濟的細胞としての商品の分析を、資本主義の理論的分析の出發點とした。それは、單純な商品生産が資本主義的生産の歴史的な前提であるからでもあつた。それ吾々は、マルクスに従つて、商品の分析を進めよう。

商品は、先づ、何等かの意味で吾々の欲望を充たす外界の對象であり、物である。商品のかゝる有用性は商品を使用價值たらしめる。使用價值は、その商品體の自然的諸屬性によつて制約され、商品

體そのものゝ使用または利用によつてのみ實現される。この使用價值は、富の社會的形態がどうであらうと、常に富の物材的内容を形成するのだが、労働生産物が商品といふ形態をとるところの社會形態にあつては、使用價值は交換價值なるものゝ擔ひ手として現れてくる。

交換價值は先づ、一種類の使用價值——例へば靴——が、他種の使用價值——例へば靴下——と交換される量的比率として現れる。例へば一足の靴が二打の靴下と交換されるといふ風に。

かうした場合をたゞ一つだけ取り上げて見ると、二つの物の交換の比率は、時と所によつて絶えず變化するから、それは『何ほどか偶然的なもの』、『純粹に相對的なもの』をあらはすに過ぎないかのやうにも思はれる。

だが、一足の靴は、一定の時所において、二打の靴下と交換されるばかりでなく、他の多くの商品とも種々の割合で交換される。例へば、一足の靴は、更に二十五斤の砂糖、二脚の椅子、十瓶の片腦油、等々と交換される。従つて、これらの種々の數量の砂糖、椅子、片腦油、等々はすべてみな同じ一足の靴の交換價值である。さうだとすれば、二十五斤の砂糖、二脚の椅子、十瓶の片腦油、等々は、互に相等しい大きさの交換價值であり、相互に取換へられ得るものである。そこで、二つの事が明かになる。(一) 同じ一商品(例へば靴)の種々なる交換價值(即ち種々量の砂糖、椅子、片腦油、等々)は、何等かの等一なものゝを表現してゐる。(二) かうして交換價值なるものは、それ自身とは區

別し得るところの或る内容の表現様式であり、現象形態であるに過ぎない。

更に、右の例解に即して言へば、二十五斤の砂糖と二脚の椅子は、同じ一足の靴の交換価値だから、交換価値としては互に相等しく、相互に取換へられ得るものである。言ひ換へれば、椅子と砂糖とは、椅子一脚に對して砂糖十二斤半といふ比率において互に等しいものとして交換される。従つて、この交換比率は、一つの方程式 $X = 12.5Y$ の意味をもつて示すことが出来る。これは一例に過ぎないが、それと同じやうに、どんな商品の交換比率でも、 X 脚の A 商品 = Y 脚の B 商品 とすふ方程式で示し得ることも明かだ。

右の如き方程式においては、物としては全く相異なる一脚の椅子と十二斤半の砂糖とが、互に等しいとされてをり、同等視されてゐる。およそ二つ又は二つ以上の物が互に等しいとされ得るためには、それらのうちに何等かの共通物がなければならぬ。だから右の方程式は、一脚の椅子と十二斤半の砂糖とのうちに或る共通物が存在し、それが同じ大きさのものであることを示してゐる。従つて、この二つの物は、それ自身椅子でもなければ砂糖でもないところの或る第三者に等しいものであり、それらのおの／＼は、交換価値である限り、かやうな第三者に約元し得るものでなければならぬ。

この共通なものは何か？ それは、商品の「幾何學的な物理學的な化學的な乃至その他の自然的な屬性」ではあり得ない。何故なら、商品のこれらの有形的性質は、それが商品を有用物たらしめ、使

用物たらしめ、使用価値たらしめる限りにおいてのみ考慮に入るものである。然るに、商品の交換価値においては使用価値は全く度外視され、使用価値の相異は少しも考慮に入らない。これは、吾々の抽象ではなくて、市場における現實の事態である。商品の「値打」が、即ち交換価値が問題にされ、その大小が比較されてゐる限り、片腦油も醬油も、バイブルもウイスキーも、その使用価値の相異、質の相異は無視されて、例へば一瓶の片腦油の「値打」は二瓶の醬油に等しいし、一冊のバイブルの「値打」は一杯のウイスキーに等しいのだ。『諸商品の交換諸關係の内部にあつては、一つの使用価値は、それが適當の比率において存在すれば、他の如何なる使用価値とも全く同様に妥當する』。

『使用価値としては、諸商品は何よりも先づ異なる質であるが、交換価値としては、諸商品はたゞ異なる量でありうるに過ぎず、それ故に使用価値の一分子をも含まない』(河上譯「資本論」第一卷上、六三頁—長谷部譯、第一卷第一分冊一七七頁)。

こゝにすでに商品の矛盾が見出される。商品は先づ、二つの對立物——使用価値と交換価値——の統一として現れる。商品の使用価値と交換価値とは、相互に制約し合ふにも拘らず、使用価値は交換価値を排除するし、交換価値は使用価値を排除する。使用価値としての商品は異質のものであり、交換価値としての商品は同質のものである。

吾々は、交換価値として表現されるところの、諸商品に内在する共通のもの——即ちたゞ量的差異

があるだけで質的には等一なもの——を求めたが、それは使用価値としての商品の屬性、物としての商品の自然的屬性のうちにはないし、またあり得ない。然るに商品から、かゝる屬性を取り去るとき、そこに残るのは労働の生産物としての社會的屬性のみである。

そこで、その労働だが、——椅子は指物労働の、砂糖は製糖労働の生産物である。指物労働、製糖労働、等々は、使用価値としての椅子や砂糖をつくり出す労働として、それ／＼異なる具體的形態を持ち、質を異にする労働である。従つて、かゝる労働は、吾々の求める共通物ではあり得ない。即ち商品の交換価値によつて表現されるところの同質のもの、等一のものではあり得ない。

ところで、交換価値としての商品にあつては、その使用価値は全く度外視され、抽象されてゐる。従つて、商品たる物の有形的な諸成分や諸形態も度外視され、抽象されてゐる。吾々はいま、交換価値としての商品——椅子、砂糖、等々——を、労働の生産物として考察するのだが、それに際して諸商品の種々なる使用価値及び有形的な諸屬性は既にすべて度外視され、抽象されてゐるのだとすれば、それと同時にまた諸商品を生産する諸労働の種々なる具體的形態や有形的性質も度外視され、抽象されてゐなくてはならぬ。問題の椅子、砂糖等々は、この場合もはや指物労働、製糖労働等々の、具體的労働の生産物ではなくなつてゐる。これら諸々の労働はすでに、お互に少しも異なるところなき、全く一樣同質なる人間労働に還元されてゐる。即ち、抽象的な人間労働に還元されてゐる。

『さて吾々は労働諸生産物のこの残り物を観察して見よう。それらには、同一の幻のやうな對象性、無差別な人間の労働の、即ちその支出の形式を顧慮せざる人間の労働力の支出の單なる膠結物のほか、何物も残つてゐない。これらの物は、それらの生産に人間の労働力が支出せられ、人間の労働がそれらに蓄積せられてゐるといふことを表示するばかりである。これらの物は、それらに共通な、かかる社會的實體の結晶として、價值——商品價值である』(同上、六四—五頁||長谷部譯、一七九頁)。

抽象的人間労働は、諸々の労働生産物——それらが交換価値としての商品である限りにおいての——に共通なる一の社會的實體である。價值又は商品價值は、かゝる社會的實體である抽象的人間労働が物に對象化されたものに外ならぬ。かくして、『商品の交換比率又はその交換価値で自己を表現するところの、かの共通なものは、商品の價值なのである』(同上)。

マルクスは先づ、現象の表面に浮かび出してゐる商品の矛盾から出發した。商品は使用価値であると同時に交換価値であり、二つの對立物の統一である。使用価値としての商品の性質の方は一目瞭然だが、交換価値の方はさうでない。何故に使用価値としての商品が、同時にまた『使用価値の一分子をも含まない』ところの交換価値であるかが問題となるばかりでなく、交換価値にあつては、自然的屬性の點では全然比較され得ないものが同等視されるのは何故か？この同等性の背後には何があり、交換価値は何をあらはすか？といふことが問題となる。マルクスはこの問題を追究して次のことを

明かにした。即ち、商品の交換關係の基礎は労働であること、この労働は具體的労働ではなくて抽象的労働であり、しかも對象化された労働即ち物的形態をとる労働であることを明かにした。かくしてマルクスは、交換價値の背後にひそむ價値を發見した。

これによつて、商品の使用價値と交換價値との間の矛盾は今や、使用價値と價値との間の矛盾として吾々の前に現れてくる。この矛盾は、商品の自然的屬性と、商品の歴史的に條件づけられた社會的性質との間の矛盾である。商品は、使用價値としては、富の社會的形態の如何を問はず、常に富の物的内容をなすものとして現れる。しかし、同時に他方では商品は、諸々の労働生産物に共通な一の社會的實體の結晶として、價値として、即ち特殊の歴史的社會にのみ特有な、富の社會的形態として現れる。こゝに商品の二重性があり、矛盾がある。

以上によつて商品價値の質的規定は明かにされたが、しかしまだ量的規定の問題が残つてゐる。各商品は、一定の時所において一定の割合で交換されるが、他の時所においては異なる割合で交換される。また一定の時所においても、一脚の椅子は例へば十二斤半の砂糖と交換されるのに、一瓶の片腦油は二斤半の砂糖としか交換されぬ。一口に言へば、各商品の交換價値には大小の差異があり、且つその大きさは變動する。交換價値は價値を表現するものだから、交換價値の量的差異や變動は、價値の量的差異や變動をあらはすことは明かだが、價値それ自體の大きさは如何にして定まるか？

この問題に對する解答を手短かに言へば、價値の大きさは、『價値を形成する實體』たる労働の分量によつて定まり、そしてその労働の分量は、労働の時間的繼續によつて量られる(註一)。

(註一)『運動の量的定在は時間であるから、労働の量的定在は労働時間である。労働の質が一定してゐると假定すれば、労働自體の繼續時間の差異が、労働に可能なる唯一の差異である。……労働時間は、労働の形態や内容や個性やに無關係であるところの、労働の生ける定在である。それは、量的であると同時にその內在的尺度を有するところの、労働の生ける定在である。……總ての商品は、交換價値としては、凝結せる労働時間の一定分量たるにすぎぬ』(河上譯「經濟學批判」八二—三頁||緒俣譯、彰考書院版七頁)。

もつと嚴密に言へば、價値の大きさは、一定の商品、一定の使用價値を生産するために社會的に必要なる労働の量(労働時間)によつて規定される。これについてマルクスは書いてゐる。

『商品世界の價値の總和で自らを表示してゐる社會の總労働力は、無數の個人的諸労働力から成り立つてはゐるが、それはこの場合一個同一な人間の労働力として妥當する。これらの個人的諸労働力はどれでも、それが社會的平均労働力の性質を持ち、且つかゝる社會的な平均労働力として作用し、従つてまた一の商品の生産のためにも、平均的に必要な、または社會的に必要な労働時間だけを要する限り、他のものと同様な人間労働力である。社會的に必要な労働時間とは、その時その時の社會的に正常的な生産諸條件と、労働の熟練および強度の社會的平均程度とをもつて、何等かの使用價値を生

産するに必要な労働時間のことである』(河上譯「資本論」第一卷六七頁||長谷部譯、第一卷第一分冊一八〇頁)。

『社會的に必要な労働』なる範疇は、抽象的労働の範疇から派生する。前者は、後者のうちに含まれ、後者の一層進んだ規定である。抽象的労働は、労働を單に質的にのみ一様な一般的人間労働として特徴づけるが、社會的に必要な労働は、労働を量的に特徴づける。

價値の大きさを、その動態において觀察すれば、一單位の商品の價値は、それに對象化されたる社會的に必要な労働の量の増減に正比例して増減する。そして、商品に對象化された労働の量は、労働の生産力の水準に反比例して増減する。労働の生産力の水準が高まれば、一單位の商品に對象化される労働の量は少くなり、反對の場合には多くなる。即ち、『一商品の價値の大きさは、そのうちに對象化されてゐる労働の、分量に正比例し、生産性に逆比例して、變動する』(同上 四七頁||長谷部譯、一八四頁)。

第二節 労働の二重性

商品が商品であるためには、それが使用價値であるといふことが前提になつてゐるが、しかし或る物が使用價値であるからといつて、直ちにそれが商品になるとは限らない。例へば空氣とか、處女地

とか、自然の草地、野生の林木、等々の如きがそれであつて、或る物が商品になるには、先づ第一に、その使用價値が、労働によつて媒介されてゐなければならぬ。然し、労働によつて媒介されてゐるといふことだけで、直ちにそれが商品になるのではない。自分自身の欲望を満足させるために生産されたものは、使用價値ではあるが、商品ではない。だから、商品を生産するには、他人のための使用價値、すなはち社會的使用價値を生産しなければならぬ。言ひ換へれば、一つの社會的分業が行はれてゐなければならぬ。社會的分業は、商品生産の存立條件である。しかしながら、それとは逆に、商品生産が社會的分業の存立條件になつてゐるわけではない。例へば古い共同體では、社會的分業は行はれてゐたが、その生産物は商品にはならなかつた。

また、商品が商品たるためには、生産者の生産物が、個人的生産物として交換されなければならぬ。されば、獨立的な、そして相互に無關係な、私的労働の生産物のみが、互に商品として對立する。かくて、使用價値をつくる限りでの労働は、すべての社會的形態から獨立な、人類の一生存條件であるが、價値に結果する限りでの労働は、歴史的に特殊な商品生産社會にのみ特有な範疇である。

使用價値の形成者としての労働は、質的に規定された存在、例へば指物労働、製糖労働、織物労働、建築労働等等であり、それは、必ず、使用價値そのものと、従つて労働そのものゝ有用な効果と、關連してのみ觀察される。かゝる使用價値形成者としての有用労働は、自然的物材の諸形態を變

化せしめることによつて、これを人間にとつて合目的なものたらしめる。労働は、物材的富の父であり、自然はその母である。

だが、價值に結果する限りでの労働はどうか？

吾々は、前の假定に立返つてみよう。

1足の靴 = 2打の靴下

一足の靴は、一足の靴下の二十四倍の價值を持つてゐる。價值としてみれば、一足の靴と、二打の靴下とは、『相等しい實體・相等しい本質から成る物であり、相等しき種類の労働の客觀的な表現である』。

しかしながら人間は、一方では使用價值の形成者としての労働を、他方では價值に結果するものとしての労働をといふ風に、二重に労働をするわけではない。有用労働は労働の形態および目的において規定された存在であるし、またかゝるものとしてしか労働は現實的には存在し得ないのだけれども、その形態や目的が抽象されるとき、後に残るのは、人間の頭腦・筋肉・神經等々の生産的支出——即ち生理的意味における單なる人間労働にほかならぬ。例へば、同一個人が或時は裁縫をやり、或時は機械をやつたりするとすれば——そして實際さういふ社會状態もあるのだが——、『それは恰も、現代の裁縫師の今日作つた上衣と翌日作つたズボンとが同一な個人的労働の單なる變化を前提するのと

全く同じやうに』、同一個人の労働の變形にすぎない。又現代の資本主義社會では、『労働需要の方向の變化するにつれて、人間の労働の一定部分がかはる』、あるひは裁縫労働の形態で、あるひは織物労働の形態で供給されてゐる。労働のかゝる形態變化は、摩擦なしには行はれ得ないであらうが、しかしそれは行はれざるを得ない』のだ。そしてこの場合には、單なる人間の労働力が、或る場合には裁縫労働の形態で、或る場合には織物労働の形態で、支出されてゐるといふ事實が、明瞭に看取されるだらう。

尤も、『人間の労働力がいろ／＼な形態で支出されるためには、人間の労働力そのものが或る程度まで發展してゐなければならぬ』。資本主義社會は、まさに、労働力の支出のかゝる形態轉換を可能且つ不可避ならしめることによつて、一方では商品の價值規定をより明瞭にし（註二）、他方では吾々の未來社會を暗示する（同上註）のであるが、種々なる有用労働が尙ほ明白に諸個人の特種固定的な機能となつてゐる單純商品生産社會においても、すでに、質を異にする有用労働の單純なる人間労働への還元は、一の社會的過程として、交換過程を通じて、實現されてゐるのである。『この還元は、抽象ではあるが、社會的生產過程において日々行はれる抽象である』（『經濟學批判』河上譯、一一頁—猪俣譯、八頁）。

（註二）マルクスは「經濟學批判序説」の中で次のやうに書いてゐる。

「労働は一の全く簡單なる範疇である。この一般性における——労働一般としての——その表象もまた、極めて古いものである。それにも拘らず、経済學上この簡單性において理解されたる『労働』は、この簡單なる捨象物を創り出せる諸關係と同様、一の近代的範疇である。例へばモネタール・システムは、富をばなほ全く客觀的に貨幣の姿をした物體として定立した。工業主義、または商業主義は、富の源泉をば對象物から主體の活動——商業的及び工業的労働——に置き換へたのであるが、これはモネタール・システムの立場に對して一大進歩であつた。しかし、それでも、尙ほ、この活動それ自體は、たゞ貨幣を儲けるとは限定性においてのみ理解されてゐた。この主義に對して、重農主義は「更に一進歩を遂げたのであつて」それは労働の一定の形態——農業——をば、富を創造する労働として定立し、客體それ自體をば、もはや貨幣の假裝においてではなく、生産物一般として、労働の一般的産物として理解した。だが、この生産物は、活動の限定性に相應して、たゞ單に、自然によつて規定されたる生産物にすぎなかつた。農業が生産する、土地が最も優れて生産する（と彼等は考へた）。アダム・スミスは、富を創造する活動のすべての規定性を拋棄し、工業労働でも商業労働でもなく、その何れたるを問はず、労働一般を（定立したのであるが）、これは彼の驚くべき進歩であつた。富を創造する活動の捨象的な一般性ととも、今や吾々は更に、富をして規定される對象物の一般性を・生産物一般を・すなはち技でもまた労働一般——しかし對象化されたる過去の労働としての労働一般——を、得たのである。この推移が如何に困難であり大なるものであつたかは、アダム・スミス自身ですら時々重農主義に復歸したのを見ても明らかである。ところで、以上の如くにして發見されたもの

は、人間が——如何なる社會形態におけるを問はず、生産者として出現するところの、最も簡單な最も古き關係に對する抽象的表現にすぎない、と思はれるかも知れない。これは一方面から見れば正しいが、他の方面から見れば正しくない。

労働の一定種類に對する無關心は、そこでは何れの種類の労働も最早すべてを支配するものとなつてゐないところの、現實的な種々なる種類の労働の、極めて發展せる一個の總體性を前提する。かくて最も普遍的なる捨象物は、一般にはたゞ、最も豊富な具體的發展——そこでは一つのものが多いものに共通のやうに現はれる——においてのみ成立する。さうなつたならば、特殊なる形態でのみ考へられることが已まる。他方において労働一般といふこの捨象物は諸労働の具體的な總體性の結果としてのみ始めて生ずる。一定の労働に對する無關心は、個人が容易に一の労働から他の労働に移り行くところの、そして労働の一定種類が個人にとつて偶然であり従つて無關心なものであるところの、社會形態に適應する。かゝる場合には、労働はたゞに範疇においてのみならず、又現實においても富一般を創造する手段となつてをり、それは規定として個人に結合し、或る特殊性に成長することをやめる（河上譯、「經濟學批判」四九—五一頁—猪俣譯、二六七—九頁。傍點筆者）。

「自然發生的な生産發展を伴ふ凡ゆる社會においては——今日の社會もかゝる社會なのだ——生産者が生産手段を支配するのではなくて、生産手段が生産者を支配する。かゝる社會においては、生産のあらゆる新たな槓杆は、必然的に、生産者を生産手段の下に隷屬させる手段に轉化する。殊に、大工業の導入までに最

も有力だった生産の槓杆については——すなはち分業については、かうしたことが言へる。都市と田園との分離でふ最初の大規模な分業は、たちまち 田園人口には數千年に亘る愚昧化を宣告し、都會人には各自の手工業への各人の隷屬を宣告したのである。そしてそれは、一方の精神的發展の基礎と、他方の肉體的發展の基礎とを破壊した。農民は土地を、都會人はその手工業を領有したとするならば、それと同様に、土地は農民を、手工業は手工業者を領有したのである。労働が分割されることによつて、人間もまた分割される。たゞ一つの活動の完成のためにその他一切の肉體的及び精神的能力が犠牲に供される。かゝる人間の萎縮は工場の手工業においてその最高の發展を遂げるところの、分業と同じ程度で増大する。工場の手工業は手工業をその個々の部分的作業に分解し、その各々を労働者に生涯の職業として指定し、そして彼を一生に亘り、一定の部分的機能と一定の道具とに縛りつける。『それ〔工場の手工業〕は、生産的衝動と素質との一切を抑壓して労働者の細部の熟練を温室的に増進することにより、彼を一の畸形人とする……』(マルクス)……〔然るに〕『機械經營は、工場の手工業の場合のやうに、同一機能に同一労働者を絶えず同化せしめることにより、諸々の労働者群を種々の機械に固定的に配分するといふ必要を、止揚する。工場全運動は労働者から始まるのではなくて、機械から始まるのであるから、労働過程を中斷することなしに、絶えざる人間の交替を行ふことができる。……最後に、機械での作業は若い時にすぐ習得されるので、労働者てふ一特殊階級を専ら機械労働者に仕込む必要もまた無くなる』。ところが機械の資本主義的な利用の仕方、化石化する特殊性をもつた舊來の分業をば、それが技術的に不用となつたにも拘らず尙も持続せねばならぬのであ

るが、機械そのものはこの時代錯誤に叛逆する。大工業の技術的基礎は革命的である。『それ(大工業)は、機械・化學的操作・およびその他の方法によつて、たえず、生産の技術的基礎とともに、労働者の機能および労働過程の社會的結合を變革する。かくしてそれはまた、たえず、社會の内部における分業を革命し、またたえず、多量の資本および労働者を一生産部門から他の生産部門に移動させる。それゆゑに大工業の性質は、労働の變化・機能の流動・労働者の全面的な可能性・を制約する……すでに述べたやうに、この絶對的な矛盾は……労働者階級の不斷の犠牲や、労働力の無制限な浪費や、社會的無政府制から生ずる荒廢や、となつて現はれてゐる。これは消極的方面である。しかるに労働の變化は、今やまったく、壓倒的な自然法則として、従つて到る處で障礙物と衝突する自然法則の盲目的に破壊的な作用をもつて遂行されるとすれば、大工業は、その破壊そのものによつて次ぎのこと——すなはち、労働の變化、従つてまた労働者のできるかぎりの多面性を一般的社會的な生産法則として承認すること、および、この法則の正常的な實現に諸事情を適合させること、を一の死活問題たらしめる。すなはち大工業は、資本の變轉する搾取欲望のために豫備軍として保持された、使用されうる尨大な困窮せる労働大衆に置き換へるに、變轉する労働需要に對しての人間の絶對的な使用可能性を以てすること、換言すれば、一の社會的な部分的機能の擔任者たるにすぎぬ部分的個人に置き換へるに、その人にとつては種々なる機能が互に取りかへられ得る諸々の活動方法となるやうな、全體的に發達した個人を以てすること——かうしたことを死活問題たらしめるのである』。(マルクス)〔「反デューリング論」長谷部譯二一〇—二一六頁〕。〔だが〕「社會は全生産手段を、社會的計畫的に利用す

るため之が主人公となることにより、従来のやうに人間自身自身の生産手段の奴隷となることを根絶する。社会は、もちろん、各個人が解放されるのでなければ、みづから解放することは出来ない。だから、舊來の生産の仕方は根本的に變革されねばならぬ。そして殊に舊來の分業は消滅せねばならぬ。その代りに一つの生産組織が——すなはちそこでは、一方では如何なる個人も、人間生存の自然條件たる生産的労働における自分の割當を他人に轉嫁することができず、他方では生産的労働が、各個人に對してその肉體的並びに精神的な全能力をあらゆる方面に發育させ且つ活動させる機會を與へることにより、人間を奴隷化する手段から人間を解放する手段となるやうな、かくして生産的労働が一つの重荷から一の快樂となるやうな、一の生産組織が——現はれねばならぬ」(同上二一—三四頁)。

社会が、交換過程を通じて、有用労働を單なる人間労働に還元するとすれば、交換は更に競争の過程を通じて、個々人の労働を、社会的にその商品の生産に必要な労働にまで轉化すると同時に、また異種の商品の生産に要する労働力の支出を、單純なる、簡單なる平均労働に通約してしまふ。そこで複雑なる労働は、もはや、簡單なる労働の幾倍かされたものにすぎなくなる。この通約化は、商品生産の發展、資本主義生産の發展と共にますます完成せられたものになつてゆく。蓋し、人間の機械への隷屬又は極端なる分業によつて労働が平等化されてゆくこと、及び、單純労働が産業の樞軸になつてゆくこと、これらの事情が、この約元を容易ならしめるからである(註三)。この簡單な平均労働

は、一定の社会においては、與へられたものであるが、しかし、國々により、特に文化の發展の差異により、それ／＼その性質を異にすることは言ふまでもない。

(註三)「哲學の貧困」(淺野・木下譯「岩波文庫」版七二頁参照)。

かくて、使用價值を生産するものとしての労働即ち有用労働にあつては、「如何なる労働を如何なる仕方」で行ふかといふことが問題だが、價值を形成するものとしての労働——即ち單なる人間労働にあつては、たゞ「如何に多く」といふこと、即ち労働の繼續時間だけが問題である。商品に含まれてゐる労働は、使用價值に關しては、たゞ質的にのみ意義を持つが、價值の大きさに關しては、それはすでに人間労働といふより以外の質を持たないものに還元されてしまつてゐるので、たゞ量的にのみ意義を持つ」(河上譯「資本論」第一卷、八二頁||長谷部譯、第一卷第一分冊、一九三頁)。

そこで、先づ、労働の生産力が一定してゐる限り、ヨリ多量の一の使用價值は、ヨリ少量の使用價值よりも、ヨリ多くの價值であり、使用價值即ち物材的富の分量の増加と共に、價值もまた大となる。例へば、二足の靴の價值の大きさは、まさしく一足の靴のその二倍であるといふ風に。だが、しかし、それは労働の生産力が一定してゐる場合に限られる。労働の生産力が變化すれば、生産される物材的富の分量は増加しても、それにつれて價值の大きさも増大するとは限らない。即ち、以前に

一足の靴をつくつた労働と同一量の労働をもつて今や二足の靴がつけられるやうになつたとしても、この生産物の価値は二倍にはならないで、以前と同じ大きさである。更に、以前に靴一足をつくるに要した労働よりも、ヨリ少量の労働をもつて、靴二足がつけられるやうになつたとすれば、物材の富は増大しても、価値の大きさは却つて減少する。

『かゝる對立的運動は、労働の二者鬭争的性質から生じる。生産力なるものは、言ふまでもなく、必ず有用的な具體的な労働の生産力であり、そして事實上は、與へられた時間内における合目的な生産的な活動の作用程度を規定するにすぎない。それゆゑ有用な労働は、その生産力の増加あるひは減少に正比例して、より豊富な、あるひはより貧弱な、生産物の源泉となる。これに反し生産力の變動は、価値で表示されてゐる労働それ自體とは全く無關係である。生産力は労働の具體的な、有用な、形態に屬してゐるのだから、言ふまでもなくこれは、労働の具體的な、有用な、形態が抽象されるや否や、もはや労働には關係しえない。だから同一の労働は、その生産力が如何やうに變動しようとも、同一の時間内には常に同一の大きさの価値を生み出す。しかし同一の労働は、同一の時間内に、異なる分量の使用価値を——生産力が増加すればヨリ多くの分量を、生産力が減少すればヨリ少き分量を提供する。かくて労働の多産性を、従つてまた労働によつて生産される使用価値の分量を、増加するところの生産力の變動は、——もしそれが増加された總量の生産に必要な労働時間の合計を短縮

するならば——同時に、かく増加された總量の大きさを減少せしめる。逆の場合は正にまた逆である』

(河上譯「資本論」第一卷、八三—四頁||長谷部譯、一九五—六頁)。

マルクスは、『労働の二重性』を究明した「資本論」第一章第二節を、次の言葉で結んでゐる。

『あらゆる労働は、一方では、生理的意味における人間の労働力の支出であり、且つ同様な人間の労働または捨象的な人間の労働といふかゝる屬性において、それらは商品価値を形成する。あらゆる労働は、また他方では、特殊な・目的の一定した・形態における人間の労働力の支出であり、且つ具體的な・有用な・労働といふかゝる屬性においては、それらは使用価値を生産する』(同上八五頁)。

そこで、抽象的労働に關するマルクスの研究を要約すれば、(一)抽象的労働は、生理的意味における人間労働力の支出であり、さうしたものと同一様な人間労働、もしくは労働一般である。(二)抽象的労働は、あらゆる種類の労働、及びあらゆる個人の労働の同質性をあらはすが、なほその上にまたそれらの諸個人の種々なる労働の、全社會労働への還元をあらはすもので、かゝる社會的性質の労働としての抽象的労働は、商品に對象化されて価値を形成する。(三)右の如く、あらゆる種類の労働がその生理的・一般的基礎へと還元され、その支出の形態には無關係な單なる労働力の支出へと還元されること、及びすべての諸個人の個々の労働がその社會的基礎へと還元され、全社會的労働の同質的な諸部分へと還元されることが、商品の社會的生產過程——それは交換過程をも含む——によつて容

觀的に成し遂げられる。(四)かくて、抽象的労働は、一の社會的範疇であるばかりでなく、また歴史的範疇である。即ちそれは、特定の歴史的に制約された社會的諸條件、及び特に一定した社會形態の下における労働力の支出である。

マルクスは、労働の二重性に關する彼の研究を非常に重要視した。——『私の著書『資本論』の最良の部分、開卷第一章の第二節に於て、労働の二重的な性質が強調されてゐる。……労働の二重性に關するこの理解の上に、諸事實の全理解がかゝつてゐる』(一八六七年八月二十四日附のエンゲルスへの手紙)。

第三節 價值形態、その發展及び貨幣の本質

以上において、吾々は價值の實體とその大きさを規定したから、次には價值の現象形態の分析に移らなければならぬ。

問題は先づ、價值は如何なる具體的形態において現象界に現れるかといふことだが、一口に言へば、價值はたゞ交換價值として現れ得るにすぎない。吾々がすでに見たやうに、商品なるものは、それが同一の社會的單位なる人間労働をあらはすものである限りでのみ價值物たる性質を持つ。従つて、商品の價值物たる性質は、純社會的なものであり、價值そのものは、物の外被の下に隠されたとなす。

この、人間と人間との關係、または社會的關係である。さうだとすれば、この價值の現象形態即ち具體的表現もまた、一定の關係、特に物と物との關係、即ち商品對商品の社會的關係であるより外はなす。

商品生産は、生産と交換との統一である。商品生産社會においては、労働の生産物は交換のために生産されるから、生産の段階において、すでにそれは商品であり、價值であり、かの「社會的實體」の結晶であるのだが、しかしその社會的實體は生産の段階においてはまだ具體的な形態に表現されてはゐない。けれども、商品としての労働生産物は、その生産の段階が終るや否や交換の段階に移るのであつて、それは今や他の同様なもの——即ち他商品——との一定の關係に入り込み、そこで商品の社會的性質(即ち價值性質)は他の商品との關係において表現されることになる。これを言ひ換へれば、諸商品は今や實際に相互の間に價值關係をとり結び、それを通じて價值表現が行はれるのだが、この「價值表現の發展をば、最も簡単な、最も目立たない姿から、貨幣形態にまで追跡する」といふ、『ブルジョア經濟學によつてはいまだ曾て試みられたことのない一事』を成し遂げた者はマルクスである。

第一節及び第二節においては、吾々の出發點は商品であり、發達した商品流通における商品を取り上げて吾々はこれを分析した。そして交換價值は、その際、與へられた事實としてこれを受取り、そ

の交換価値の基礎を、内容を探究して価値を発見し、価値法則を見出したのであつた。そこで吾々は本節においては、この価値法則に照して、価値の表現もしくは形態としての交換価値を研究し、しかもそれを發生的に且つ發展において研究するのである。だから、こゝでの吾々の出發點は、發達した商品流通ではなく、極めて端緒的な、單獨的・偶發的な生産物交換である。吾々はさうした交換關係に含まれるところの極く單純な萌芽的な価値形態の分析から始めることにする。

この分析を仕遂げることによつて、吾々は先づ第一に価値の研究を全うすることになる。けれど、価値の實體と大きさと形態とは、現實においては統一的な全體をなしてゐるのであつて、価値の形態の究明は、価値の研究の不可缺の一面であるからである。だが、吾々は、第二にはまた、価値の貨幣形態の發生を跡づけ、貨幣の本質を見究めることにもならう。けれど、価値形態の發展はおのづから貨幣形態を生み出すのであつて、従つて価値の理論は謂はば貨幣の理論にまで成長することになるからである。事實、価値理論と貨幣理論とは、二つの別個の理論であるのではなく、單純な商品經濟として考察されたブルジョアの生産様式に關する一理論の二つの面にすぎないのだ。

(一) 單純な価値形態

最も單純な交換關係または価値關係は、單一の商品が他の單一の商品ととり結ぶところの交換關係

または価値關係である。この關係においては、一の商品が他の商品と比較される。かやうに二個の商品が比較されるといふ關係のうちには、一個の商品の価値表現、または価値形態が含まれてゐる。即ち、

X商品A = Y商品B、X量の商品AはY量の商品Bに値する。

2打の靴下 = 1足の靴、二打の靴下は一足の靴に値する。

これは一商品の価値表現または価値形態の最も單純なものであつて、マルクスはそれを『單純な、單一な、または偶發的な価値形態』と呼んでゐる。が、『すべての価値形態の秘密は、この單純な価値形態の中に隠れてゐる。従つて、この分析には本來的な困難がある』。けれども、それだけにまたこの單純な価値形態の研究は、一切の価値形態を理解する鍵を與へる。だから、マルクスは価値形態一般の本質を開披すべく、この單純な価値形態の研究に最大の注意を拂つてゐる。

先づ、二打の靴下は一足の靴に値するといはれるとき、靴下は自己の価値を靴で表現することになり、靴はかゝる価値表現の材料として役立つことになる。そしてこの場合、靴下と靴とは明かに二つの異なつた役割を演じてゐる。即ち、第一の商品(靴下)は、価値を表現するといふ能動的な役割を演じ、第二の商品(靴)は、価値表現の材料にされるといふ受動的な役割を演じてゐる。

かゝる關係の下において、第一の商品(靴下)の価値は、他の商品(靴)で表示され、相對的価値

として表示されてゐる。これを別な言葉で言へば、第一の商品（靴下）は、相対的價値の形態にある。しかるに、第二の商品（靴）の方は、第一の商品（靴下）の等價物として機能する。言ひ換へれば、この方は、等價物の形態即ち等價形態にある。

で、價値表現をあらはすところの等式 $X_{商品A} = Y_{商品B}$ は、まことに單純なものにもせよ、それ自體が一つのまとまつた價値表現をあらはしてゐる。等式のいづれの一方を缺いても、價値表現は成立しない。恰度、一人では喧嘩にならないやうに——。即ち、靴下の相対的價値の形態は、何等かの他の商品——例へば靴——が、靴下に對して等價形態にあることを前提するし、他方ではまた等價物の形態にあるのは、やはり他の商品（吾々の例では靴下）がその價値を靴で表示して相対的價値の形態にあることを前提する。

かくて、『相対的價値形態と等價形態とは、——とマルクスは言ふ——、同じ一つの價値表現の、相互に從屬し合ふ、双方から制約し合ふ、不可分離的な、二契機である……』が、しかし、この二つの形態は同時にまた、『互に排斥し合ふ、乃至はたがひに對立する二極端、即ち對極である』（河上譯、「資本論」第一卷、九一頁—長谷部譯、二〇二頁）。

といふのは、この二つの形態は、相異なる二つの商品に、それ／＼分屬しなければならぬ。第一に、人々は靴下の價値を靴下で表現することは出来ぬ。2打の靴下 = 2打の靴下と云ふのでは、價値

表現でも何でもなくて、一の同義反復にすぎなくなる。自己の價値を表現する方の一商品、即ち相対的價値の形態にある商品が、同時にまた、價値表現の材料とされる商品、即ち等價物の形態にある商品であることは不可能だ。第二に、他方では、等價物としての役割を演じ、等價形態にある方の商品は、同時に相対的價値の形態にあることは出来かねる。それは、自分自身の價値を表現するものではなく、たゞ他の商品の價値表現に材料を供給するだけである。要するに一商品の價値は、たゞ相対的にのみ、即ち他の商品によつてのみ、表現せられ得る。

右においては、靴下が自己の價値を靴で表現するといふ場合をとつたが、今度は、その反對に、靴が自己の價値を靴下で表現するといふことは出来ぬか？ もちろんそれも出来るのだ。だが、さうなつたところで、たゞ靴下と靴といふ言葉を置換へさへすれば、右に述べたすべてのことが妥當する。どの商品が自己の價値を表現するか、靴下がするか、靴がするか、それはどうでもよいことである。肝要なことは、いつでも二つの商品のうち的一方だけが價値を表現し、他方はたゞその價値表現の材料として役立つにすぎないといふことだ。言ひ換へれば、同じ一つの商品が、同時に相対的價値形態にもあり等價形態にもあることは出来ぬといふことだ。

A 相対的價値形態

以上のところで、吾々は、一商品の單純な價値形態なるものを、主としてその形式の方面から分析

し、それが二つの對立的な契機の統一であることを明かにしたが、その分析に際しては吾々は、二つの商品のうちの一つだけが自己の價值を他の商品で表現するといふことを、先づ、與へられた事柄としてそのまま受取つてゐた。では、その事柄の内容はどうなのか？ これに答へるために、吾々は進んで、相對的價值の形態そのもの、内容を分析しなければならぬ。

言ふまでもなく、二つの商品が交換關係に置かれ、比較されるといふことは、使用價值としての兩者が相異なるにも拘らず、價值としての兩者が同一性質の物であるからである。即ち、比較の基礎は、價值としての同一性であり、禁才=禁である。だが、價值としての靴下と靴との同一性は、二つのものが異なる役割を演ずるやうな形態において表現されることになる。即ち、靴下が靴に値ひすと言はれるとき、質的に同じものとしての此の二つの商品は、同じ役割を演ずるのでなくて異なつた役割を演じ、靴は自己の價值を表現しないで、たゞ靴下だけが自己の價值を表現し、靴下の價值だけが表現される。それは、どういふ風にして表現されてゐるか？

靴下の價值は、靴下が自己の等價物としての靴に關係することによつて表現されてゐる。靴が靴下の等價物であることは、靴が靴下と直接に交換され得るものだといふことであり、さうである限り靴が靴下と同じものだといふことである。そして靴が靴下と同じものであるのは、たゞ、價值としての靴である限りにおいてのことである。だから、靴下が、自己の等價物としての靴に關係するといふその

關係のなかでは、靴は専ら價值としての靴である。ヨリ適切に言へば、それは専ら價值物としての、價值の體現としての資格を持つものである。靴は、この場合、自分の價值はあらはさない代りには、自分のからだで靴下の價值を現はすものとなる。さうしたものにならなければ、靴下の價值が靴で表現されることは出来ないのだ。

が、他方では、靴がそのからだで現はしてゐるのは、自己の價值ではなく、靴下の價值である。だから、それまではたゞ靴下のうちにあつて外部に現れなかつた靴下の價值は、今や外部に現れてくる、『前面に現れてくる』しかも靴下とは違つた形態——靴の形態——をもつものとして具體的に現れてくる。そしてその意味において、靴下の價值は今や獨立的に表現されることになる。

では、その場合、價值の實體そのものはどうなつてゐるか？

靴が、價值物として、靴下と同じものだとき、それによつて、靴のうちに隠れてゐる勞働が、靴下の中に隠れてゐる勞働と同じものだとき、靴をつくる製靴勞働は、靴下をつくる編物勞働とは異なる種類の具體的勞働だが、製靴勞働を編物勞働と同じ物だとすることは、それをば事實上、双方の勞働に存するところの現實的に相等しきものに還元することになる。即ち、人間勞働といふ、それらの共通な性質に還元することになる。かくして、價值を形成する勞働の特殊の性質が前面に押出されてくる。

ところで、人間労働は、對象化された形態で價值となるのだから、靴下の價值は、對象化された人間労働として表現されねばならぬわけである。それがためには、靴下の價值は、靴下自體とは物的に異なつてゐてしかも他の商品及び靴下自體に共通してゐるところの、一の物的性質のものとして、一つの「對象性」として、表現されねばならぬことになる。

しかるに、靴下の等價物としての靴は、自己の自然形態、自己のからだで價值を表示する物としての資格を持つ。靴といふ商品のからだ、靴そのものは、一の使用價值に外ならないが、その生産には、製靴労働の形態で人間労働力が支出されてゐる。従つて、靴のからだ、靴の使用價值は、その中に人間労働が蓄積されてゐる物としては、『價值の擔ひ手』である。そして、靴下の等價物としての靴は、正にさうした『價值の擔ひ手』としてのみ意義を持ち、従つて、體化された價值、價值體としてのみ意義を持つのだが、しかしそれと同時にまた、その價值がまさしく靴の形態をとつてゐるからこそ、それ故にのみ、靴は身をもつて靴下の價值を現はすことが出来るのだ。靴下では靴下の價值は現はせぬ。

かくして、靴下の價值が靴の自然形態で表現されてゐるといふことは、靴下の價值が、對象化された人間労働として表現されてゐることになる。この場合の靴は、靴下とは物的に異なるものでありながら、人間労働の體化としては、價值としての靴下と共通な物的性質のものである。

さういふわけで、靴が靴下の等價物となつてゐる價值關係の中では、靴の形態が價值の形態としての資格を持つことになる。従つて『一の商品の價值は、他の商品の使用商品で表現される』ことになる。

靴下はかくして自己の自然形態と異なる價值形態を持つことになる。

『要するに、——とマルクスは言ふ——、價值關係の媒介によつて、商品Bの自然的形態は商品Aの價值形態となり、あるひは商品Bのからだだが商品Aの價值の鏡となる。商品Aは、價值體としての人間の労働の體化物としての、商品Bに關係することにより、使用價值Bをばそれ自身の價值表現の材料とする。商品Aの價值は、かく商品Bの使用價值で表現されて、相對的價值の形態をもつ』(同上二〇〇頁—長谷部譯、二二〇頁)。

ところで、價值を表現さるべき各種の商品は、それが靴下であれ靴であれ、またその他のものであれ、それ／＼にみな一定分量の使用對象であり、人間労働の一定分量を含んでゐる。だから、『價值形態は、たゞに價值一般を表現するだけでなく、量的に規定された價值、即ち價值の大きさを表現しなければならぬ』(同上二〇二頁—長谷部譯、二二二頁)。

だが、一商品の價值が、他の商品と關係することによつて、相對的にのみ表現されるといふことを知つたならば、その價值の大きさが如何に表現されるかといふ問題も解決されてゐるわけである。

一の商品の価値の大きさは、その商品を他の商品と関係せしめずにとゞ抽象的に見るならば、その商品の対象化された社会的に必要な労働の量によつて規定されるが、他の商品に表現された一商品の価値の大きさは、その商品に対象化された労働の量にも、他の商品に対象化された労働の量にも依存する。即ち、商品B（靴）で表現された商品A（靴下）の価値は、商品Aの価値の大きさにも依存するし、Bの価値の大きさにも依存する。それは、Aの価値の大きさに正比例し、Bの価値の大きさに逆比例する。

そこで、商品Aの価値が變動しても、また商品Bの価値が變動しても、商品Bで示された商品Aの相対的価値は變動する。更に、兩商品の価値が、同じ方向に同じ比例で變動した場合には、商品Aの相対的価値は不變であり得ることになる。

で、『要するに、価値の大きさの現實の變動は、明確にもまた遺漏なしにも、その相対的表現で、換言すれば相対的価値の大きさで、反映されるものでない。一商品の相対的価値は、その商品の価値が不變に止つてゐても、變動しうる。また一商品の相対的価値は、その価値が變動しても不變にとゞまり得るし、最後に、商品の価値の大きさと、この価値の大きさの相対的表現とが、同時に變動する場合にも、兩者は決して一致すると限らない』（同上二〇四頁—長谷部譯、二一四—五頁）。

B 等 價 形 態

吾々は進んで等價形態を観察しよう。吾々が前に見たやうに、一の商品——例へば靴——が、他の商品——靴下——の等價物として機能して、等價形態にあるといふことは、他の商品靴下がその価値を靴で表現するといふことを前提する。そして、靴下はその場合、靴が、価値としては自分と同じものだとされることにより、従つて靴が自分と直接に交換され得るといふことによつて、事實上自分自身の価値存在を表現する。『さういふわけだから、一商品の等價形態とは、その商品の他の商品との直接的な交換可能性の形態なのである』（一〇六頁—長谷部譯、二一七頁）。

だが、靴なら靴といふ商品が、右の如き価値表現において等價物の地位を占めるといふと、その価値の大きさはもはや価値の大きさとしての表現を持ち得なくなる。そして、等價物としての靴はただ物の一定分量としてのみ機能する。『例へば——とマルクスは言ふ——四〇エルのリンネルは何に「値して」ゐるかと言へば、吾々は二枚の上衣にといふ。この場合には、上衣といふ商品種類は等價物の役割を演じ、上衣といふ使用価値がリンネルに對して價值體たる資格をもつのであるから、一定分量の上衣はまた、一定分量の価値たるリンネルを表現するに足るのである。二枚の上衣は、それゆゑに、四〇エルのリンネルの価値の大きさを表現することができる。しかしそれは、それ自身の価値の大きさを、上衣の価値の大きさを、表現することは出来ぬ。かくの如く價值方程式における等價物は、さつでも一つの物の、一つの使用価値の、單純なる量的形態を有するにすぎない』（一〇七

そこで、等價物の第一の特徴は、等價物の自然體——使用價值そのものが、その對立物たる價値の現象形態となつてゐるといふことである。

しかしながら、かうした事態は、單に等價物たる一商品Bが、他の一商品Aととり結ぶ價値關係の内部においてのみあり得るのだ。その關聯がなくなれば、商品Bは、忽ち等價物たる資格を失ふし、それと同時にまた、使用價値が價値の形態となるといふ事態も消え失せる。

マルクスは、このことを、適切な設例によつて説明してゐる。曰く、——棒砂糖は物體であるから重く、それ故に重量を持つが、しかし吾々は棒砂糖の重量を眼で見たり手で觸れたりすることはせぬ。そこで吾々は、種々なる鐵片を用ひて棒砂糖の重量を表現する。もちろん鐵の物體的形態は、ただそれだけを見るならば、棒砂糖の物體的形態と同様、重さの現象形態などではないのだが、しかし棒砂糖を重さとして表現するために、吾々がそれを鐵との重量關係に置くといふと、この關係の中では鐵はたゞ重さだけを表示する物體としての資格を持つことになる。そこで、鐵の種々なる分量は、砂糖の重量の尺度として役立つてそして砂糖體に對しては單なる重さの姿を、重さの現象形態を代表する。かうした役割を鐵が演じるのは、重量をはかるべき砂糖その他の物體が鐵と結ぶところの此の關係の内部においてのみである。また、双方の物にもし重さがないとしたならば、それらはいかゝる關

係を結び得ないであらうこと、従つて一方が他方の重さの表現として役立ち得ないであらうことも明かだが、吾々が、その兩者を天秤皿に投げ入れるとき、吾々は實際においてそれらが重さとしては同じ質のものであることを知り、従つて一定の比率においては同一重量であることを知ることになる。そして恰度、重量の尺度としての鐵のからだは、棒砂糖に對してたゞ重さだけを代表するのと同じやうに、吾々の價値表現の中では、靴のからだは靴下に對してたゞ價値だけを代表する。尤も、類似はたゞそれだけである。鐵は、棒砂糖の重量表現において双方の物體に共通な自然的性質である重さを代表してゐるのであるが、靴の方は靴下の價値表現において双方の物の超自然的屬性であるところの價値——即ち純社會的なもの——を代表してゐるのだ、と。

右のことと關聯して、等價形態なるもの、一見不可解な性質——謂ゆる謎的性質——が生じてくる。靴下なら靴下の相對的價値形態においては、靴下は自己の價値存在を、自己の物體とは全く異なつた他の物體——例へば靴——と相等的なものとして表現するのだから、この一物と他物との關係の背後には一の社會關係が隠されてゐることを暗示するけれども、等價形態の場合はその反對で、靴なら靴といふ商品體が、自分自身の自然の姿のまゝで價値の形態である。そこで、——それがさうであるのももちろんたゞ靴下の如き他の一商品が靴ととり結ぶ價値關係の内部に限られることであるにも拘らず、そのことは忘れられ、——靴は恰もその等價物の形態までも、乃至は靴下等々と直接に交換

され得るといふ屬性までも、重さ・硬さ・保温性・防水性等の如き屬性と同様に、自己の自然的性質として持つかのやうに見えてくる。『等價形態の謎的性質はこゝから生じるのだが、それは、等價形態が完成して貨幣となつて對立し來たるとき、初めて經濟學者達のブルジョアの、淺薄な眼光に映ずるに至るのだ』(同上 一一〇頁||長谷部譯、二二二頁)。彼等は商品對商品の最も簡單な價値表現が、すでに等價形態の『謎』を呈示してゐることに氣付かない。だから、彼等は貨幣の謎を解き得ない。

更に、等價物として機能する商品のからだは、抽象的な人間労働の體化物としての資格を得る。しかもそのからだたるや、本來一定の具體的な有用労働の産物である。だから、これにあつては、具體的な労働が、抽象的な人間労働の表現となる。『かくて、具體的労働がその反對物の抽象的な人間労働の現象形態となるといふことが、等價形態の第二の特徴である』(一一二頁||長谷部譯、二二三頁)。

更にまた、この第二の特徴から第三の特徴が引出される。『私的労働が、その反對物の形態即ち直接に社會的な形態の労働になるといふことが、等價形態の第三の特徴である』(一一三頁||長谷部譯、二二三―二四頁)。

だが、等價形態におけるこれらすべての矛盾は掩ひ隠されてゐる。マルクスは、相對的價値形態の研究においては、價値がいかにして謂はゞ内體的な形態をとるかを示すことによつて、一商品の他商品での價値表現に含まれる諸矛盾を開披する。が、等價形態の研究においては、彼は、いかにしてこ

れらの矛盾が掩はれて、そして等價形態の謎的性質が生じ、様々の幻想が生ずるかを示してゐる。

C 總括

マルクスは、最後に、價値表現の兩極をなす二つの商品の統一としての價値形態の總括を考察し、これに簡潔な規定を與へてゐる。

一商品の單純な價値形態は、他の一商品に對するその商品の交換關係のうちに含まれてゐる。『商品Aの價値は、質的には、商品Bが商品Aと直接に交換され得るといふことによつて、表現される。また量的には、商品Bの一定分量が商品Aの與へられた分量と交換され得るといふことによつて表現される。換言すれば、一商品の價値は、「交換價値」としてのその表示により、獨立的に表現されてゐる……』(一一六頁||長谷部譯、二二六―二七頁)。

が、第二には、『吾々の分析は、商品の價値形態すなはち價値表現は商品價値の本性から生じるものであつて、その反對に、價値および價値の大きさが交換價値としてのその表現の仕方から生じるものではないことを證明した』(一一七頁||長谷部譯、二二七頁)。

價値の形態は、獨立の表現を得た價値である。靴下といふ一商品の價値は、たゞ他の商品との交換關係に入込むことによつてのみ、獨立の表現を得る。それが、いかなる商品との交換關係に入込むか、その價値がいかなる他商品で表現されるかは、むしろ偶然的な事柄である。しかし、その價

値が、獨立の表現を得るのは、そして價值として表現され得るのは、ひとへにたゞ自己と異なる他商品の姿においてである。此のことは決して偶然的な事柄ではない。價值の形態は、外部から價值に何かを貼りつけたといった風な、いゝ加減なものではない。價值の形態は、専ら價值そのもの、性質に由來する。價值は、その本質において人間の物的關係であり、かゝるものとしてはたゞ物と物との關係においてのみ、従つて、一物の價值は他の一物の姿においてのみ表現せられるのだ。

そこで、第三、——價值表現を含む價值關係の内部においては、商品Aの自然形態はたゞ使用價值の姿としてのみ資格を持ち、商品Bの自然形態はたゞ價值の形態又は價值の姿としてのみ資格を持つ。商品のうちに包藏されてゐる使用價值と價值との内的對立は、かくして一の外的對立によつて……表現される。かくて、一商品の單純な價值形態は、その商品に含まれてゐる使用價值と價值との對立の、單純な現象形態である』（二一八頁—長谷部譯、二二九—三〇頁）。

労働の生産物は、如何なる社會形態の下においても常に使用對象であつた。が、歴史的に特定な社會形態が發展し、そのために、使用對象たる物の生産に支出された労働が、その物の對象的な屬性として、即ちその物の價值として、表現されるやうになると、そのことによつてのみ労働の生産物は商品に轉化されるのだ。吾々は、單純な價值形態を研究し、靴下なら靴下といふ使用對象の生産に支出された労働が、いかに價值として表現されるかを學んだが、その單純な價值形態こそは同時に労働生

産物の單純な商品形態に外ならぬ。されば、『商品形態の發展は價值形態の發展と一致する』（二一九頁

—長谷部譯、二三〇頁）。

商品形態又は價值形態の發展から貨幣が生じてくる。吾々が本節で究明したところの、單純價值形態の諸矛盾及び諸規定は、やがて貨幣の諸矛盾及び諸規定にまで發展する。従つて前者は後者の萌芽形態としての意義を持つ。それは、吾々が、商品形態又は價值形態の發展を跡づけることによつて明かになるだらう。

(二) 擴大された價值形態

單純な價值形態においては、一商品の價值は、たゞ一つの他種の商品で、表現された。しかしそのたゞ一つの他種の商品は、如何なる商品であらうと少しも差支へない。だから、價值を表現される方の商品——吾々の例で言へば靴下——は、ひとり靴のみでなく、机や帽子や上衣によつても、その單純な相對的價值表現を持つことが出来る。可能性といふ點から言へば、市場に存在するすべての商品——尤も自分自身だけを除いて——によつて、その價值を表現せしめ得るわけである。かくて、吾は、擴大された、總體的な價值表現を得る。

2打の靴下 = 1足の靴

2打の靴下 = 2脚の椅子

2打の靴下 = 3枚のシャツ

2打の靴下 = 2個の帽子

.....

また、單純な相對的價值諸表現の總和であるところのこの擴大された相對的價值表現は、その性質上、新たな商品が市場に登場する毎に、——それは新たな價值表現の材料となるのだから——いくらでも擴大せられ得る。

擴大された相對的價值表現が單純な價值表現に對して進歩を呈してゐるのは、次の諸點にある。

第一、靴下——相對的價值形態にある商品——の價值そのものが、こゝにはじめて、眞に無差別な人間的労働の膠結體として姿を現はしてくる。なぜならば、靴下の價值を形成する労働は、今や靴、椅子、シャツ、帽子、その他あらゆる他種の商品體に對象化された人間労働と相等しき資格をもつ労働として表現されてゐる。

第二、かくて靴下は、もはや單一の商品に對してだけでなく、全商品に對して、商品世界に對し

て、社會的關係に立ち、自分自身はかゝる商品世界の一員となる。と同時に、價值表現の系列は今や實際もないものになつてゐるから、靴下の價值は、どんな使用價值でも表現され得ること、その使用價值の特殊の形態の如何は全くどうでもよいのだといふことが、積極的に明かになる。

第三、2打の靴下 = 1個の帽子といふ單純な價值形態にあつては、これら二つの商品が一定の量的比率で交換されるのが單なる偶然だといふこともあり得る。然るに、この擴大された價值形態にあつては、さうした偶然的な現象とは本質的に異つてゐてしかもさうした現象を規定するところの『背景』が、即ち、發展せる商品生産が、そこにありくと見えてゐる。靴下の價值は、靴、椅子、シャツ、帽子、等々の何れで表示されやうと、すなはち種々なる所有者に屬する無數の異なる商品の何れで表示されやうと、その大きさに變りはない。即ち、二人の個人的商品所有者の間の偶然的な關係はもはや無くなつてゐる。『交換が商品の價值の大きさを規定するのではなく、むしろ逆に、商品の價值の大きさがその交換比率を規定するといふことが、明白となつてゐる』(同上二三四頁—長谷部譯、二三四頁)。ところで、擴大された價值形態は、かうした進歩を示してはゐるが、しかし同時にまた若干の缺點を持つてゐる。

第一、一商品の相對的價值は、すべての他種の商品で表現されるのだから、新たな商品種類が出現する毎に、ヨリ多くの商品種類で表現されることになるが、新たな商品種類は絶えず出現してくるか

ら、商品の相対的價值表現は常に不完全の状態にある。(そしてこれは、商品生産が未だ十分に發展してゐないことを意味してゐる)。

第二、一商品の價值は、種々様々の他商品の種々様々な使用價值で表現され、且つそのおの／＼の相対的價值表現は全くばら／＼で、お互に無關係である。

第三、どの商品の相対的價值もみなこの擴大された形態で表現される。その結果、どの商品もみなお互に相異つた相対的價值形態を持つことになり、全體としては限りなく錯綜したものとして現れる。

ところで、擴大された價值形態における等價形態の方はどうかといふと、靴下の價值表現にあつては、靴、椅子、シャツ、帽子、等々の各商品はすべて等價物としての資格を持ち、従つて價值體としての資格を持つ。これらの各商品の自然形態は、今や、おの／＼の特殊な等價形態である。そしてそれと共にまた、そのさまざまの各種の商品體に含まれてゐる具體的な有用労働は、それ／＼にいづれも人間労働の特殊な現象形態としての資格を持つ。

そこで、相対的價值形態について述べた缺點は、等價形態の上にも反映されてくる。そこには無數の特殊の等價物があり、そのおの／＼の機能は、それ／＼單一の商品の價值だけを表現することに局限され、従つて互に排斥し合つてゐる。そしてそれと同時にまた、おの／＼の特殊な商品等價物に含

まれてゐる具體的な有用労働の各種類は、人間労働の特殊な現象形態に過ぎないから、それだけ不分な現象形態であるに過ぎない。これを言ひ換へれば、擴大された價值形態の下においては、人間労働はまだ一個統一的な現象形態を持つに至つてゐない。

(三) 一般的な價值形態

だが、吾々がすでに見たやうに、

2打の靴下 = 1足の靴

といふ等式の中には、その逆の關係即ち、

1足の靴 = 2打の靴下

といふ關係も、内容的にふくまれてゐる。そのいづれもが價值を持つものである限り、靴下がその價值を靴で表現し得るやうに、靴もまたその價值を靴下で表現し得る。

擴大された相対的價值形態は、單純な價值形態の總和にすぎない。だから、そのおの／＼の等式に ついても、この逆の關係が生じ得る。

1足の靴下 = 2打の靴下

1脚の椅子 = 2打の靴下

3枚のシャツ = 2打の靴下

2個の帽子 = 2打の靴下

..... 貨幣

また、事實において、一人の商品所有者が自己の商品たる靴下を他の多くの諸商品と交換し、従つて靴下の價值を他の諸商品の一系列で表現するといふことになれば、彼れの交換相手となる人々は、必然的にまた彼等の諸商品を靴下と交換し、従つて彼等の諸商品の價值は、同一の商品靴下によつて表現されねばならないわけである。

さて、この第三の價值形態においては、(一)各商品はもはや、價值表現の長々しい系列を持つことなく、たゞ一つの商品でのみその價值を表現する。従つて價值表現の仕方が非常に簡單になる。(二)すべての商品が、今や、すべて同一の商品で、その價值を表現する。従つて、諸商品の價值は統一的に表現されることになる。かくて、『これらの諸商品の價值形態は簡單であり、共同的であり、それ故に一般的である』(一二七頁—長谷部譯、二三八頁)。マルクスは、かゝる價值形態を一般的價值形態と呼んでゐる。

吾々は今や價值形態及び商品形態をその發展において考察することが出来る。

單純な價值形態においては、靴下の價值が靴に等しいものとして、或はまた椅子の價值がシャツに等しいものとして、表現されるが、しかしそれらの等式には何等の連關もない。それらは個々獨立した價值表現であつて、使用價值と對立する商品價值は、未だ明瞭には、自己を表示せず、價值の現象形態たる交換價值も、何ほどか偶然的なものに見えるのだ。實際、實踐の上から言つても、かゝる價值形態は、使用價值として生産せられた労働生産物の剩餘部分だけが、偶然的に臨時的に交換され、商品に轉形されたところの、商品交換のそもぐの端初においてのみ生ずる。そして、歴史の示すところによれば、かゝる交換は先づ最初、共同體との境界において行はれた(註四)。

擴大された相對的價值形態にあつては、すでに前に述べた通り、一商品の價值は、ヨリ一層完全に使用價值に對立するものとして區別づけられるが、他方、諸商品の統一的な價值表現は不可能ならしめられてゐる。そしてこの擴大された相對的價值形態は、實踐の上においては、或種の——一種乃至數種の——労働生産物例へば家畜の如きものが、『もはや例外的でなく、すでに慣習的に、種々なる他の諸商品と交換され』始め、しかもこれらの種々なる諸商品のおのおのは尙ほ多かれ少なかれ臨時的に偶然的にしか交換されないといふ場合に事實上生じる(註五)。

然るに、商品形態の發展のヨリ高度の段階では、多くの労働生産物が『もはや例外的にでなく慣習

的に『相互に交換されるやうになる。そしてその中でも最も多く交換せられるものが取り除かれ、そのものによつて諸商品の價值が表現されるやうになる。一般的な價值形態は即ちかゝる發展段階に相應した形態として現れる(註六)』。

この形態は、『商品世界の共同事業の成果』である。といふのは、單純なる相對的價值形態及び擴大されたる相對的價值形態は、『一つづゝの商品の價值を、それと種類を異にする一つの商品でか、多くの諸商品の系列でか、表現する』が、何れにせよ『一つづゝの商品が自身に或る價值形態を賦與するのは、いはゞその商品の私事であつて、それは他の諸商品の協力なくしてこれを成しとげる』といふのに、一般的な價值形態にあつては、『一の商品は、すべての他の諸商品がそれらの價值を同時に同一の等價物で表現し、且つ新たに出現するあらゆる商品種類が必ずそれを模倣しなければならなくなつてゐるがためにのみ、一般的な價值表現を得るのだからである』(一三〇頁||長谷部譯、二四〇頁)。

さて、この一般的な價值形態にあつては、商品世界の諸々の商品價值は、商品世界からひき出された唯だ一個の、單一の商品種類で表現されることになつてゐる。従つて、――

第一、Aの商品も、Bの商品も、Cの商品も、その價值を、同じ商品――例へば靴下で表現するとすれば、そのことによつて、Aの商品の價值も、Bの商品の價值も、Cの商品の價值も、おのゝその使用價值とは異つた存在であるのみならず、その何れもが、同等性をもつた、量的に比較出来るも

のであるといふことが明かになる。

第二、と同時に、靴下は靴下でまたそれ自身價值體として諸商品に關係するのだから、價值は今や靴下とすべての諸商品とに共通のものとして表現されることになる。『従つてこの形態が、現實的に、諸商品を互に價值として關係せしめ、或は諸商品を互に交換價值として表象せしめるのである』(一二九頁||長谷部譯、二四〇頁)。

(註四、註五、註六) 『交換過程の自然發生的形態たる直接的物々交換は、諸商品が貨幣に轉形しはじめたといふことよりも寧ろ使用價值が商品に轉形しはじめたといふことを表示する。交換價值は獨立な姿を受けとらないで、まだ直接的に使用價值に結びつけられてゐる。このことは二重に現はれる。生産そのものは、その全構成において、使用價值を目的とし交換價值を目的としない。だからこの場合には、生産が消費のために必要な程度を超えることによつてのみ、使用價值は使用價值たることをやめ、交換の手段たる商品となる。他方において、諸々の使用價值は、たとひ兩極的に配置されてゐても、それらは直接的な使用價值の限界内でのみ商品となるのであり、従つて商品所有者たちによつて交換される諸商品は、双方の者にとつて――各商品がその非所有者に對して――使用價值でなければならぬ。實際において、諸商品の交換過程は、最初には、自然發生的共同社會の母胎内に現はれるものではなく、かゝる共同社會の盡るところにおいて、その境界において、それが他の諸共同社會と接觸する二三の場所において、現はれるものである。かゝる場所

において、現はれるものである。かゝる場所において、物々交換は始まり、そして此處から逆にそれは共同社会の内部に侵入してゆき、これに共同社会間の物々交換において商品となる特殊な諸使用価値、例へば奴隸、家畜、金属等々は、多くの場合、共同社会そのもの、内部における最初の貨幣となるのである。すでに述べたやうに、一商品の交換価値は、その諸等價物の系列が長ければ長いほど、すなはちその商品に對する交換範囲が大なれば大なるほど、ヨリ高き程度に交換価値として自らを表示する。だから物々交換の漸次的な擴張、交換回数の増加、および物々交換の範囲内に入り來たる商品の増加は、商品交換価値として發せしめ、貨幣形成にまで進ましめ、かくして直接的な物々交換に破壊的な作用を及ぼす（河上譯、「經濟學批判」一一八—九頁—猪俣譯、三七—八頁）。

そこで、今度は等價形態について言へば——

商品世界の一般的價值形態は、必然的に、諸商品に對して對立的な極となつてゐる一商品即ち等價商品たる商品に、一般的等價物たるの性質を賦與することになる。

一般的等價物は、第一、そのもの、『自然的形態が商品世界の共同的な價值の姿』であり、それ故に『すべての他の諸商品と直接に交換』せらるるものである。第二、と同時にまた、一般的等價物の自然體は、『すべての人間労働の眼に見える化身、その一般的な社會融化物』、要するに價值の權化としての資格を持つ。第三、一商品が、價值の權化となるや、その商品を生産するための具體的な労働、

例へば編物労働は、今や、人間労働一般の一般的現象形態たらしめられる（一三一頁—長谷部譯、二四二頁）。

かくて、『一商品の單純な、乃至は個別的な、相對的價值の形態は、他の一商品を單一な等價物たらしめる。相對的價值の擴大された形態、すべての他の諸商品による一商品の價值のかゝる表現は、それらの諸商品に、相異なる種類の特殊な等價物の形態を押し印する。最後に、特殊な一商品種類は、すべての他の諸商品がその商品を自分たちの統一的な、一般的な、價值形態の材料たらしめるが故に、一般的な等價形態を受けとる……』（一三二頁—長谷部譯、二四三頁）で、要するに、等價形態の發展は、相對的價值形態の發展の表現であり、結果であるにすぎなかつた。

だが、かゝる發展と同時に、兩極すなはち相對的價值形態と等價形態との對立が、發展して行く。單純なる相對的價值形態にあつては、同一の等式を右から讀み、或は左から讀むに従つて、二つの商品は、或時は相對的價值形態にあつたかと思へば次の瞬間には等價形態にあるといふ風に、兩者の區別、兩極的對立は、未だ確然たるものとはなつてゐなかつた。それは分析によつてのみ、區別せられ得た。

擴大された相對的價值形態にあつては、この對立、即ち（一）或る商品が一方の形態にあり得るためには、他の商品がそれと對立せる形態にあらねばならず、また（二）或る商品が一方の形態にある

ときは、同一價值表現の内部においてその商品は同時には他方の形態にあることはできぬ』(長谷部譯「資本論初版鈔」、一七七頁)といふ關係が、一層確然たるものになつて来る。蓋し、この形態において、一つづゝの商品が又は或る一商品のみが、その相對的價值を總體的に擴大することが出来、擴大された相對的價值形態を持つことが出来るのは、爾餘の諸商品が『等價形態にあるからであり、またその限りにおいてであるが』、今や諸商品をして相對的價值形態を持たしめ、相對的價值形態にある一商品等を等價形態にをらしめることは、對立の兩極を總體的に顛倒せしめることなくしては、即ちこの長き系列の相對的價值形態を一般的價值形態に轉化せしめることなくしては、不可能だから。

最後に、一般的價值形態にあつては、一商品を除くほかすべての商品が一般的等價形態から除かれてゐる。他方、一般的等價物として機能する商品は、『商品世界の統一的な、従つてまた一般的な、相對的價值形態から除外されてゐる』(一三四頁||長谷部譯、二四六頁)。ここでは、兩極の對立は、平民たる諸商品と、君主たる一般的等價物との對立となつて、判然手にとる如く現はれる。

(四) 貨幣形態

一般的等價物として機能することが、或る特定の商品種類の役割として限定され、固定されるとき、かかる商品は貨幣商品となり、貨幣として機能する。一般的等價物としての機能は、今やその商品の

特殊なる社會的機能となり、その商品の獨占物となる。かくして、『商品世界の統一的な相對的價值形態は、はじめて客觀的な固定性と、一般的な社會的な妥當性とを獲得する』ことになる。

かくて、貨幣の本質は、貨幣の社會的本性は、明かにされた。貨幣は、價值形態の特殊な規定性であり、價值の存在様式である。従つてそれは、物ではなくて、商品生産者の社會的關係の物的表現である。『經濟學批判』における次の如き貨幣の特徴づけは、特にそれらの點を明瞭ならしめる、——『このやうに、一切の商品の等價存在、又は一切の商品の交換價值を、特別な抽出された商品として表示する特殊な商品、これが貨幣だ。これは諸商品が交換過程そのものにおいて形成するところの、諸商品の交換價值の結晶である』(一一六頁||猪俣譯、三五頁)。

歴史的に、かかる選ばれたる地位を終局的に占めたのは、商品金であつた。金を一般的等價物とすれば、諸商品の價值表現は今や次の如き形をとる。

1 足の靴
2 打の靴下
2 脚の椅子 = 1 匁の金
.....
.....

單純な相對的價值形態から擴大された相對的價值形態へ、擴大された相對的價值形態から一般的價值形態へ、これらの推移にあつては、それぞれ本質的な變化が伴つた。然るに、一般的價值形態から貨幣形態への推移にあつては、かゝる變化は生じない。『進歩はたゞ、直接的な一般的交換可能の形態すなはち一般的等價形態が、今や社會的慣習によつて、終局的に商品金の特殊な自然的形態と癒着してゐる』といふ點にある、従つてたゞ貨幣商品なるものゝ出現にある（一三八頁―長谷部譯、二四八頁）。

『貨幣形態の理解における困難は、一般的等價形態を、それゆゑ總じて一般的價值形態を理解することのうちに横たはる』（一三九頁―長谷部譯、二四九頁）。然るに一般的價值形態は、復歸的に、擴大された相對的價值形態に分解するし、擴大された相對的價值形態の『構成要素』は、單純なる相對的價值形態である。されば、

$$X \text{ 商品 } A = Y \text{ 商品 } B$$

なる簡單なる商品形態こそは、貨幣形態の萌芽である。

第四節 商品經濟の一般的特徴づけ

商品は一見何でもないものゝやうだが、その本質を理解しようとする、異常な困難に遭遇する。

マルクスは、『商品の物神崇拜的性質とその秘密』なる一節において、商品のかうした商品の『神秘性』が如何にして生ずるかを示しつゝ、商品經濟そのものゝ一般的な特徴づけを與へてゐる。

吾々は、以上に展開した商品價値の理論から、次のことを知る。労働の生産物が商品の形態となり、價値物として現れるところにおいては、(一) 人間の諸々の労働の相等性は、労働生産物の相等しき價値對象性といふ物的形態をとる、(二) 人間労働力の支出の測定——その支出の時間的繼續による測定は、労働の諸生産物の價値の大きさといふ形態をとる、(三) そして、生産者達の諸労働の社會的諸規定は生産者達の諸關係によつて確立されるのだが、その生産者達の諸關係は、労働の諸生産物の社會的關係といふ形態をとる。

かくして、労働生産物の商品形態なるものは、(一) 人間自身の労働の社會的性質を、労働諸生産物そのものゝ對象的性質として、——即ち社會的な自然的屬性として——人々に意識せしめ、(二) それ故にまた、商品形態は、總労働に對する生産者達の社會的關係を、彼等の外部に存在する對象物の社會的關係として、人々に意識せしめることになる。そして、さういふ風に意識せしめるところから、労働生産物は『感覺的でありながら、同時に超感覺的または社會的であるところの物——商品——となる』（一四三頁―長谷部譯、二五三頁）。マルクスによれば、『商品形態の神秘性は……單にこの點に存

する』のだ。

宗教世界の夢幻境においては、人間の頭の産物に過ぎない神だの佛だのといふものが、それ自身の生命を與へられてゐて、そしてお互の間にも、また人間との間にも關係を結んでゐるといつた風な自存的な姿に見える。商品の世界においてもまたそれに似たことが起り、人間の手の生産物にすぎない物が、やはりさうしたやうな自存的な物の姿に見えるのだ。マルクスはこれを商品世界の物神崇拜的性質と呼んでゐる。この物神崇拜的性質は、『商品を生産する労働の特有な社會的性質から發生する』(一四四頁—長谷部譯、二五四頁)。

では、商品を生産する労働の社會的性質の特有な點はどこにあるか？ 總體としての社會的労働が、個々の互に獨立した私的労働として營まれ、『かゝる私的諸労働の複合體が社會的總労働を形成する』(一四四頁—長谷部譯、二五四頁)といふ點にある。

商品經濟社會における労働は、他のどんな形態の社會における労働とも同じやうに、社會的労働である。即ち、商品生産者は、他の人々のために生産し、社會的需要を充たし、社會的欲望を充たす。そしておの／＼の商品生産者の労働は、生産上及び消費上、他の人々の労働に依存してゐる。即ち、各自の生産資料及び消費資料は他の人々によつて供給される、等。これを一口に言へば、彼等の労働は、『社會的分業』を形成する。然るに彼等個々人の労働は、互に獨立に營まれる私的労働である。

そしてそこに基本的な特殊性がある。おの／＼の商品生産者は、形式的には全然自由に、自己が有利と見なす労働に着手し、自己の考へ通りにこれを組織し遂行する。かくて、商品生産者の労働は社會的であると同時にまた私的である。

この矛盾あるが故にのみ、労働の生産物は、人々の使用對象は、商品となる。本來は社會的労働であるところのものを、互に獨立に私的労働として營む人には、彼等の労働自體において人と人との直接に社會的な關係を結ぶことは出来ない。彼等の労働の生産物を——商品として——交換することによつて、はじめて社會的關係を結ぶことになる。それゆゑに、『彼等の私的諸労働の特殊な社會的性質もまた、商品交換そのものにおいてははじめて現れる』(一四四頁—長谷部譯、二五四頁)。即ち労働の諸生産物が交換されることになり、それによつて生産物相互の間の關係がとり結ばれ、この物と物との關係を媒介として生産者相互の人と人との關係がとり結ばれるとき、正にそのことによつてはじめて彼等の私的諸労働は、社會的總労働の構成部分たるの實を示すことになる。それだからこそ、彼等の個々人の労働の社會的關係は、彼等の労働自體における人と人との直接に社會的な關係としては現れず、『人と人との物的關係並びに物と物との社會的關係として現れる』。即ち、諸々の人々の社會的關係であるものが、種々なる諸物の間の關係といふ假象的形態をとつて人々の意識にのぼらざるを得ないのだ。

かうした現象をヨリ具體的に考察しよう。

労働生産物の交換が發展し、有用物がはじめから交換のために生産されるやうになり、従つて物の生産に當つてその價值性質が最初から考慮に入るやうになると、労働の生産物は、有用物であると同時に價值物であるといふ二重の性質を持つことになるが、それと共にまた生産者達の私的労働は事實上二重の社會的性質を得る。『それは、一方においては一定の有用労働として或る一定の社會的欲望を満足せしめ、かくてそれ自身が、總労働の——社會的分業の自然發生的な體系の——肢體たることの實を擧げねばならぬ』(同上二四五頁||長谷部譯、二五五頁)。即ち、それは社會的に有用な性質を持たねばならぬ。が、他方ではまた、一種類の私的労働は他のすべての種類の私的労働と等しいといふ社會的性質を持たねばならぬ。けだし『他方において、おの／＼の特殊な有用な私的労働は、『その生産物の交換を媒介として』、他のあらゆる有用な私的労働と交換されることができ、従つてそれらと相等しき資格を持つ限りにおいてのみ、それはそれ自身の生産者の多様な欲望を満足せしめる』のだからである(一四六頁||長谷部譯、二五五—六頁)。ところで、私的生産者達の私的労働のかゝる二重の社會的性質は、それが實踐上の諸生産交換の内部で現れるところの、物的な諸形態のみ、彼等の意識にのぼらざるを得ぬ。彼等の私的な諸労働の社會的に有用な性質は、労働の生産物は他人に對して有用でなければならぬといふ假象的形態において意識されるし、異なる性質の諸労働の相等性とい

ふ社會的性質は、これらの物質的に異なる労働諸生産物の共同な價值性質といふ假象的形態において意識される。蓋し『労働の諸生産物は、それらの物の交換の内部において、それらの物の感覺的に相異なる使用對象性とは別な、社會的に相等しき價值對象性を、はじめて受取る』のだからである(註七)(一四五頁||長谷部譯、二五五頁)。

(註七) 『要するに人間は、彼等の労働諸生産物が相等しい種類の人間の労働の單なる物的外皮としての資格を持つが故に、それらの物を價值として相互に關聯せしめるのではない。逆である。彼等は彼等の異なる種類の諸生産物を交換のなかで相互に價值として等置することにより、彼等の種々なる労働を相互に人間の労働として等置するのである。彼等はそのことを意識してはゐない、しかし彼等はかく行ふ』(一四六—七頁||長谷部譯、二五六頁)。

更に、生産物の交換者達が何よりも先づ實踐上の利害を感じることは何かといふと、それは彼が自分の生産物に對して他人の生産物をどれだけ受取るか、生産物はいかなる比率で交換されるか、といふ問題であるが、かゝる『比率がひとたび一定の慣習的な固定性を得るまでに成熟してくると、それは労働諸生産物の自然的性質から生ずるものであるかの如く見えてくる』(註八)(一四八頁||長谷部譯、二五八頁)。鐵の一片と金の一片とが、共に一匁の重量で、重さにおいて相等しいとすれば、そのことはもちろん鐵と金との自然的性質から生じてゐるのだが、それと同じやうに、一反の銘仙がいつでも

およそ一匁の金と交換され、二つの物が價值において相等しいといふこともまた、銘仙や金の自然的性質に基づくかの如く思はれてくる。即ち、價值といふ社會的な性質のものが、物自體の自然的性質といふ假象的形態をとらずにはゐなくなる。

(註八) 『事實において、勞働生産物の價值性質がはじめて確立するのは、それらの物が價值の大きさとしての確立によつてである』(一四八頁—長谷部譯、二五八頁、傍點、筆者)。

ところで、物自體の自然的性質であるかの如きこの價值の大きさそのものがまた、恰度自然的に變化するかのやうに變動し、絶えず『交換當事者達の意志、豫見、及び行爲とは獨立に』變動する。商品生産者達は、各自の勞働を私的勞働として相互に獨立に營みはするが、これらの私的勞働は、社會的分業の自然發生的な肢體として全面的に依存し合つてゐるのだから、その限りにおいて、生産者達の運動は社會的な運動である。事實、各商品の生産量や各種の勞働の生産力は、彼等のこの社會的運動によつて變動する。だが、商品生産者達は、彼等自身の社會的運動をみづから規制し、支配しはしない。それは、總體としての社會的勞働が、個々の互に獨立した私的勞働として營まれるといふ特殊性から生ずる事態であつて、おの／＼の生産者が、形式上は全く自由に勝手に生産において行動するといふそのことのために、全體としての商品生産の無政府性と盲目性が生ずるからに外なら

ぬ。かくして彼等の社會的運動は、意識的計畫的な性質によつてではなく、盲目的無政府的な性質によつて特徴づけられる。従つておの／＼の商品の生産される數量は、それに對する社會的需要と絶えず喰ひ違ひ、それ故に各商品の交換比率または交換價值は、價值自體から分離して絶えず變動する。けれどもおの／＼の商品を生産するために社會的に必要な勞働時間が、乃至は價值の大きさが、交換價值または交換比率を規制するといふ法則は、交換價值または交換比率の變動そのもの／＼なかで、否應なしに自己を貫徹する。價值の法則は、商品經濟の規制者として現れる。一商品の交換價值が價值よりも大きくなれば、その商品の生産者達は生産を擴大するし、反對に小さくなれば生産の縮小を餘儀なくされる、等々。かくて交換價值からの分離は、また絶えずそれへの一致に導いてゆく。そしてその際、商品生産者達は、謂はば市場の指圖に従つて、即ち商品の運動に導かれて行動する。さういふわけで、商品生産者自身達の社會的な運動は、諸商品そのもの／＼運動として、即ち物の形態をとれる運動として彼等の意識に移るばかりでなく、それは彼等自身が規制し支配する運動ではないに、逆に彼等の方がその規制と支配の下に立つ運動として、意識されざるを得ないのだ。商品は、心あるもの／＼如く運動しつゝ、商品生産者個々人の榮枯盛衰を支配する。商品生産者達の社會的關係は、今や、人間を支配する物としての假象的形態をとる。

さて、吾々は、商品價值は交換價值または價值形態においてはじめて物の姿で表現されることを前

節で學んだが、商品の神秘性は正にさうした形態から來るのである。吾々は更に、商品の等價形態は發展してやがて貨幣にまで結晶し、それと共に等價物たる商品が等價の形態までも自己の自然的性質として持つかの如き假象を呈することは、貨幣において最も著しいことを見た。『商品世界のかゝる既成の形態——貨幣形態——こそは、まさに私的諸労働の社會的性質を、従つて私的労働者達の社會的諸關係を、打ち開ける代りに、これを物的に蔽ひ隠すものである』(同上二五〇頁—長谷部譯、二六〇頁) されば、商品形態が貨幣形態に發展するや、商品物神崇拜はこの貨幣において最も完全な發展に到達し、貨幣物神崇拜となる。貨幣物神崇拜は、貨幣の演ずる社會的諸機能の特殊の性質によつて條件づけられ、且つ強化される。そして更に、労働者對資本家の關係といふ新たな社會的關係の出現につれ、貨幣は資本に轉化されるのだが、この新たな社會關係は資本において物神化され、資本物神崇拜が現れる。

が、それにしても、かうした物神崇拜の對象たるところの諸々の物的な假象的形態は、科學的分析がその正體を暴露すると共に消滅するのではないか、といふ疑問が起る。しかし、それはさうではない。例へば、労働生産物は、それが價値である限りではその生産に支出された人間労働の單なる物的表現である、といふことが科學的に確かめられたとしても、労働の社會的性質の物的假象は依然として残る。商品生産の諸關係の中に捉へられてゐるものたちにとつては、物の外皮に蔽ひ隠されてゐる

人間の社會的關係は見えないで、たゞ價値物としての外的形態だけが依然として最終決定的なものに見えるのだ。それは『恰かも空氣がその諸要素に科學的に分析されてしまつても、物理的な物體形態としての空氣形態は、依然として存続するのと同じやうなものである』(同上二四七頁—長谷部譯、二五七頁)。

で、問題の物的假象形態と物神崇拜とは、主觀的な現象ではない、混迷した頭の産物ではない。それは、商品經濟の特殊性によつて條件づけられた客觀的な現象である。だがこの客觀的事象としての物神崇拜は、またそれに相應した主觀的な形態を、即ち物神崇拜的な思惟形態——イデオロギー——を生み出すにはあらず。

『この種の(物的假象の)諸形態は正にブルジョア經濟學の諸範疇を形成する。それは、この歴史的に規定された社會的な生産の仕方——商品生産——の生産諸關係に對する、社會的に妥當な、従つて客觀的な思惟諸形態である。商品生産の基礎の上で労働諸生産物を包むところの、商品世界のすべての神秘、すべての魔法妖術は、それゆゑに、吾々が他の生産諸形態に逃避するや否や、直ちに消滅するのである』(同上二五二頁—長谷部譯、二六〇—二頁)。

で、要するに、商品經濟の社會は、他の様々な社會形態と鋭く區別されるところの歴史的な特殊の社會形態であり、その基本的特殊性は、労働の社會的性質と私的性質との矛盾にある。この矛盾の

ないところには、商品、貨幣、及び資本の物神崇拜も生じやうはない。マルクスは、種々なる社會形態を、商品生産社會と比較して、そのことを明白ならしめてゐる。將來について言へば『社會的生活過程の姿、即ち物質的生產過程の姿は、それが自由意志をもつて社會を組織せる人々の産物として、その人々の意識的計畫的な管理の下に立つに至つたときのみ、はじめてその神秘的な霞の衣を脱ぎ捨てる』(同上 一五八頁 || 長谷部譯、二六八頁)。そしてその時にのみ、商品物神崇拜は消滅する。

第二章 交換過程、その發展及び貨幣の必然性

貨幣は、『諸商品が交換過程そのものうちに形成するところの、諸商品の交換價値の結晶である』(『經濟學批判』一一六頁 || 猪俣譯、三五頁)。然らば、何故にそれは『形成』されざるを得ないのか？ そこに如何なる必然性があるのであるか？ これに對するマルクスの解答は、主として、『交換過程』と題する「資本論」第二章に與へられてゐる。彼は、こゝで、交換を分析し、交換の矛盾と困難とを曝露して、それがいかに貨幣の出現を促すかを明かにする。

交換には、交換される諸物と共に、交換する人々が參加する。即ち、商品と、商品所有者とが參加する。だから、商品の分析は、商品所有者の分析によつて補はれねばならぬ。

商品生産者の社會的關係は、一方では商品において對象化され、他方では商品所有者において人格化される。前章の研究では、對象化または物的表現の方面から、本章の研究では、人格化の方面から、商品生産者の社會的關係が取扱はれる。

自然發生的分業を基礎とし、しかも人間の種々なる勞働が全く獨立に個々別々に行はれてゐる社會では、勞働の諸生産物は、必然的に、先づ交換されねばならぬ。商品にならねばならぬ。なぜなら、

さういふ社會では、さうすることなしには、如何なる消費も不可能であるし、凡そ人類社會の再生産は不可能なのだから。

直接的な物々交換は、一方では吾々が前の章で説いたやうに單純なる價值表現を持つとも言へるが、他方では未だそれを持つてゐないとも言へる。何故なら、それは未だ生成の途上にある。それは、恰度胎兒は一方では人間であるが、他方ではまだ人間ではないのと同様だ。

單純なる價值表現の形態はX量の商品A=X量の商品Bとして示された。然るに、直接的物々交換の形態は、X量の使用對象A=Y量の使用對象Bである。『AおよびBなる物は、この場合、交換以前には商品でなく、交換により始めて商品となる』。ところで『一の使用對象がその可能性からみて交換價值である最初の様式は、非使用價值としての、その所有者の直接の欲望を超過せる分量の使用價值としての、そのものゝ定在である』。言ひ換へるならば、直接使用價值として生産されながら、餘剩物となつて非使用價值になつたもの、そのみが交換において商品となり、また直接の交換手段となる。この商品はまた、交換の相手の方から見れば、等價物の形態をとるのであるが、しかもそれはたゞ、その商品が、彼（商品の非所有者）にとつて使用價值である限りにおいてのみである。だから物々交換においては、商品の二重性の對極への分裂は、萌芽の状態にこそあれ、完成されてはゐない。

量的規定においてもさうである。『それらのものゝ量的な交換比率は、最初は全く偶然的である。それらのものは、これを相互に讓渡せんとする、その所有者の意志行爲によつて交換される』。

交換は前章の註で述べておいた通り、最初には先づ、共同體と共同體との相互の間に行はれた。蓋し、物は、それ自體としては、人間に對し外部的なものであり、従つて讓渡され得るものであるが、然し人間が、相互的に物を讓渡するについては、彼等は相互に讓渡される物の私的所有權者として認め合はねばならず、従つてまた獨立せる人格者として互に對立しなければならぬ。ところで、原始的な共同體の内部にあつては、このやうな『相互に他人たる關係』は、未だ存在しない。

だが『物が一度對外的な共同生活において商品となるや否や、それは反應的に内部の共同生活においてもまた商品となる。……交換の絶えざる反覆は、それを一の規則正しき社會過程となす。だから、時の経過につれ、勞働生産物の少くとも一部分は、交換の目的に供することを豫定して生産されねばならなくなる。この瞬間から、一方においては、直接の欲望に應ずるための物の有用性と、交換のためのその物の有用性との間の分離が、確立する。その使用價值はその交換價值から分離する』。

交換を目的として生産された生産物、即ち生れつきの商品にとつては、あらゆる他の商品體は、自分自身の價値の現象形態たるにすぎず、商品は、いつ何時でも、どの商品とでも『たゞに魂ばかりでなく、からだまで交換しよう」と常に待ち構へてゐる』。

だが不幸にして商品は足を持たない。商品を市場に運ぶのは商品所有者である。商品は商品だけで相互に關係することは出来ない。商品を相互に對置させるのは、商品所有者である。……商品には『保護者』がいる。商品保護者とは、いはゞ人格化せる經濟諸關係である。

商品經濟の基本的矛盾は、交換においては次のやうな形で現れてくる。

すべての商品は、その所有者にとつては非使用價值であり、その非所有者にとつては使用價值である。従つてそれらは全面的に所有者を轉換しなければならぬが、それは即ち諸商品の交換であり、そして諸商品の交換なるものは、それらの物を價值として互に關聯せしめ、且つ價值として實現するものに外ならぬ。『だから諸商品は、使用價值として實現され得る前に、價值として實現されねばならぬ』(『資本論』一七三頁―長谷部譯、二八二頁)。然るにまた『他方において諸商品は、それらの物が價值として實現され得る前に、使用價值だといふことが立證されねばならぬ』。なぜならば、諸商品に支出された人間の勞働は、他人にとつて有用な形態で支出された限りにおいてのみ勘定に入るのだ。だが、それが果して他人にとつて有用であるかどうかはたゞ諸商品の交換のみがこれを證明し得る。

この動きのとれぬ矛盾は、特に商品所有者達に即して言へば、次のやうな形をとる。

どの商品所有者もたゞ彼自身の欲望を充たすやうな使用價值を持つ他の商品に對してのみ自己の商品を讓渡しようとする。さうである限り、交換は、彼にとつて『個人的な過程』であるに過ぎない

が、他方において彼は、彼の商品を價值として實現しようとする。『即ち彼は、彼自身の商品が他の商品所有者に對して實際に使用價值を持たうが持つまいが、それをば同じ價值のあらゆる他の任意の商品で實現しようとする』(同上―一七四頁―長谷部譯、二八三頁)。そしてさうである限り、交換は彼にとつて『一般的な、すなはち社會的な過程』である。しかし、同じ一つの過程が同時にすべての商品所有者に對して、ひとへに一般的、社會的な過程であることは不可能だ。

更に、この同じ矛盾を價值形態の觀點から言ひ現せば、今や『おの／＼の商品所有者は、他人の商品はどれもこれも、自己の商品の特殊的な等價物たらしめようとし、自己の商品はすべての他の諸商品の一般的等價物たらしめようとしてゐるのであつて、誰も彼れもがさうしようとする以上、一人の意志は必然的に他人の意志と衝突し、結局誰の商品も一般的等價物とはなり得ないことになる。ところで、どの商品も一般的等價物となり得ないとすれば、諸々の商品は一般的な相對的價值形態を持たないことになり、一般的な相對的價值形態を持たないとすれば、諸商品は價值として自分達を等置することも、價值の大きさとして自分達を比較し合ふことも出来ないことになる。そしてさうである限り、それらの物は『總じて商品として對立するにあらずして、たゞ生産物または使用價值としてのみ對立する』ことになる。

かうした動きのとれない矛盾は、動きのとれる形態を、即ち「運動し得る形態」を與へられずには

ゐない。矛盾が「運動し得る形態」を得てそしてそれによつて更に擴大されること、それがこの種の矛盾の「解決」される仕方の唯一のものである。

この矛盾は、一般的等價物の形成によつてのみ「解決」されねばならぬ。

商品所有者達は、考へる前に行なつてゐる。即ち「商品性の法則」は、彼等の單に人間としての自然的本能ではなく、商品所有者としての、自然的本能によつて、作用する。彼等は、一般的等價物としての何等かの他の商品に對して、彼等の諸商品を對立的に關聯させることによつてのみ、彼等の商品を價値として、それ故に商品として、相互に關聯させることが出来るのだ。そこで彼等の盲目的な社會的行動が、いつの間にか彼等の商品の價値を全面的に表示すべき一定の商品を拾ひ出してゐる。そして、そのことによつて、このとり除けられた商品の自然的形態が社會的に妥當する等價形態となり、一般的等價物たることがこの商品の獨特な社會的機能となるや、この商品は貨幣となる。かくして、『貨幣結晶は、……交換過程の必然的な一產物である』（一七六頁—長谷部譯、二八五頁）。

前に指摘した矛盾、及びその現れとしての交換の困難は、交換過程に入込む商品の種類及び數量が増大すればするほど、即ち交換が發展すればするほど、甚だしくなることは明かだ。従つて一般的等價物の必要も大となる。だが、交換の發展は、商品所有者達に當惑と「問題」とを持ち來たすと同時にまた、その解決の手段をも——乃至は解決のために必要な條件をも——與へることになる。諸商品

の交換が頻繁になればなるほど、その中でも特に多くの商品と交換される若干の商品があるやうになる。『商品所有者達が彼等自身の品物を種々なる他の品物と交換したり（價値として）比較したりするやうな交易は種々なる商品所有者たちの種々なる商品が、その交易の内部において、一個同一なる特定の商品と交換され且つ價値としてそれと比較されることなくしては、決して行はれるに至らない。かゝる特定の商品は、種々なる他の諸商品に對して等價物となることにより、直接に——たとひ狭い限界内にしろ——一般的な、または社會的な等價形態をもつことになる』（同上—一七九—一八〇頁—長谷部譯、二八八頁）。

かくして、一般的等價物又は貨幣が成立すると、事情は一變する。おの／＼の商品所有者は、自己の商品を、先づ貨幣と交換し、この貨幣を更に他の任意の商品と交換する。この廻り道をした交換の過程にあつては、おの／＼の商品所有者の商品は、貨幣即ち價値の體化たる一物の媒介により、價値として實現されると共にまた使用價値としても實現される。そして、その過程はまた、彼等にとつて社會的な過程であると共にまた個人的な過程でもあるやうになる。即ち、矛盾は運動し得る形態を與へられる。

が、それと共にまた矛盾は今や擴大されてゐる。——『歴史上における交換の擴大および深化は、商品性のなかに眠つてゐる、使用價値と價値との對立を展開する。かゝる對立を交易のため外部的に

表示しようとする欲求は、商品價値の一個獨立な形態を必要ならしめ、且つそれは商品と貨幣との商品の二重化によりかゝる形態が終局的に確立されるまでは、決して静止し休息しない』(同上二七六頁||長谷部譯、二八五頁)。即ち、商品の内部的な矛盾、對立であつたところのものは、遂に外部的な矛盾、對立に轉化され、全商品世界は商品の陣營と貨幣の陣營とに分裂する。

ところで、如何なる種類の商品が、貨幣形態に結晶するかは、最初は偶然的であるが、大體において二つの事情がこれを決定する。即ち、(一)自己の共同體において生じたところの讓渡し得る生産物中の主要なもの——例へば家畜の如き——が貨幣に結晶するに至るか、(二)もしくは、自己の共同體に生じた生産物の價値の、謂はゞ原生的な現象形態となつたもの、言ひかへれば、交換によつて他から得て來た物品のなかで最も重要な物が貨幣に結晶する。

然しながら、商品交換の發展と共に、この社會的機能は、本來の性質上一般的等價物たるに適當した商品、即ち貴金屬に、移つて行く。

蓋し『適當なる價値の現象形態たり得るもの、言ひ換へれば、抽象的な、そして、それゆゑに平等な、人間的勞働の適當なる體化物たりうるものは、その全見本が何れも同一な均等な質を持つてゐるやうな材料でなければならぬ。他方において、價値の大きさの區別は純粹に量的なものであるから、貨幣商品は純粹に量的な區別に耐へうるもの、すなはち勝手に分割することが出來且つ分割した諸部

分は復び合成することができらるものでなければならぬ』。そして金銀こそ、かゝる諸屬性を自然的に具備してゐる。

今や貨幣商品の使用價値は二重になる。第一は、その自然的素材にもとづく使用價値、第二は、その獨特の社會的機能から生ずる純粹に社會的な、形式的な使用價値。

それにしても、金自體の價値は、その生産に要した勞働時間によつて規定されてゐる。そして金自體がすでに價値を持つが故にこそ、その相對的價値表現は可能である。『金の相對的な價値の大きさがかく確立されるのは、その産源地における直接的な物々交換によつてである。それが貨幣として流通に入り込む瞬間から、この價値はちゃんと與へられてゐる』(同上二八七頁||長谷部譯、二九五頁)。

吾々が前に學んだやうに、最も簡單な價値形態 X 量の A 商品 = Y 量の B 商品 においてもすでに、 B 商品は、その等價形態を、恰も自分自身の社會的な自然的屬性として持つてゐるかのやうに見えるのであつた。が、今や、一般的等價形態が貨幣形態に結晶するや、かうした『反射規定』は完成されたものになつてしまふ。貨幣形態は、一個の商品に固着する、他のすべての商品の諸關聯の、反射にすぎないのにもかゝらず、金は今や自然的に、生得に貨幣形態をもつてゐるかのやうに見え、現實とは反對に、金が貨幣であるが故に、他の商品は一般に金でその價値を表示するかのやうに見えて來る。『媒介した運動はそれ自體の結果のうちに消失し、あとに何等の痕跡をも残さない。かくて諸商

品は、それら自身の價値の姿が、それらの外部にそれらと並んで存在する商品體として、それらの働きかけをまたずして完成されてゐることを見出す。金とか銀とかいふ物は土地の底から出てきたまゝで、同時に一切の人間の労働の直接なる化身であることになる。かくて貨幣の魔術が起る。社會的生産過程における人々の單なる原子的な振舞と、従つてまた彼等の管理および彼等の意識的な個人的行為から獨立してゐる彼等自身の生産諸關係の物的な姿とは、彼等の労働諸生産物が一般的に商品形態をとるといふことのうちに、先づ現はれる。貨幣偶像の謎は、それゆゑに、眼に見えるやうになつた商品偶像の謎に外ならぬ』(同上一九〇頁—長谷部譯、二九七—八頁)。

第三章 貨幣とその諸機能

第一節 價値の尺度

吾々は、商品世界が商品と貨幣とに分裂することを見た。諸商品中の特定の—商品が獨占的に貨幣の役割を分擔することによつてはじめて、労働生産物の商品への轉化も完全なものとなる。かくて、商品と貨幣とは相寄つてはじめて商品生産者の統一的な生産關係を對象化する。

だが、商品及び貨幣はまた、運動であり、循環過程である。これらのものは、靜止した事物としてではなく、運動としてのみ理解することが出来る。吾々は今や、商品及び貨幣の運動または循環過程そのものを直接の研究對象としなければならぬ。

一の循環過程としての商品及び貨幣の運動は、流通である。商品經濟における生産は、價値の生産であるが、流通は價値の形態の轉換である。

流通の過程を、直接の生産物交換(物々交換)の過程から形式の點で區別するものは、貨幣の活動であり、貨幣の社會的な機能である。だから吾々が、商品及び貨幣の運動または循環過程を研究する

とき、吾々は必然的に、貨幣の側面から流通を研究することになる。そしてかゝる研究はまたおのづから、流通における貨幣の諸機能を明瞭ならしめる。されば、マルクスは、かゝる研究に充てた「資本論」第三章を『貨幣または商品流通』と題してゐる。

前にも述べたやうに、諸商品は、その生産の段階を終るや否や流通の段階に入り込み、互に価値として比較されることになる。そこで、金が貨幣商品であると假定するならば、金は先づ第一に、すべての商品に価値表現の材料を提供する。即ち、一般的等價物としての金の機能によつて、諸商品の価値は、質的に等しい、量的に比較され得る、同じ稱呼の大きさとしての物的表現を得る。かくて、金は、諸商品の一般的価値尺度として、たゞかゝる機能によつて先づ貨幣となる。

価値の尺度たる機能は、貨幣の直接的な機能である。言ひ換へれば、この機能は、貨幣が価値の形態であるといふ、貨幣の本質そのものによつて與へられてゐる。従つて、貨幣の他の諸機能はすべて、貨幣のこの最も一般的な機能を前提し、それによつて條件づけられてゐる。

ところで、或る商品が金でその価値を表現すれば、それはその商品の貨幣形態即ち価格である。そこで、等價商品たる金はすでに貨幣であるのだから、即ちその商品のみが一般的等價物たるべきことを社会的に約束された商品なのであるから、爾余の商品は、自己の価値を社会的に妥當する様に表現するために、もはや擴大されたる相對的価値表現即ち長たらしい系列の方程式を必要とすること

なく、單に一個の方程式 $2\text{斤の銀} = 1\text{両の金}$ で事足りる。他方、社会的に取りのけられた商品即ち貨幣たる金は、擴大された相對的価値表現によつて、自己の価値を表示するのだが、その表現は、今や、諸商品の價格において社会的に與へられてゐる。蓋し、諸商品の價格即ち『物價の相場を逆に讀めば、吾々はそこに、ありとあらゆる諸商品で表示された貨幣の価値の大きさを見出す』（註一）わけである。

（註一）河上譯「資本論」第一卷、一九四頁＝長谷部譯、三〇一頁。

さて吾々は、もう一度價值形態に歸つてみよう。

X 量A商品 = Y 量B商品

右の價值表現において、A商品は相對的價值形態にあり、B商品は等價形態にあるのだが、この場合、A商品の相對的價值形態とは、B商品によつて相對的に表現せられたA商品の價值に外ならず、従つてそれはA商品の現物體と異なるは勿論、價值表現の材料として役立つてゐる等價形態にある。B商品の現物體とも異るところの、觀念的な、または觀念化された一形態に外ならない（註二）。だが、B商品の現物體とも異ると言つたところで、B商品の現物體なしには、又B商品との價值における相等性なしには、かゝる觀念化された形態の得らるべくもないことは勿論である。

(註二) ついでに注意しておくが、若干の論者達は、A商品の等價形態といふことによつて、B商品を指稱してゐるが、これは全然間違つてゐる。一商品の等價形態とは、それが等價物として機能してゐる形態の謂であつて、『A商品の等價形態』といひ得るためには、方程式を逆轉しなければならぬだらう。

このことは、價値形態のより發展せる形態すなはち貨幣形態、または價格においては、一目瞭然となる。價格は、商品體そのものとも異なるし、又貨幣とも異るところの、觀念的な存在である。

商品價値の金による表現が觀念的なものであるとすれば、この表現のためには、單に、觀念された、觀念的な金を用ひることが出来る。といふよりも、かゝる觀念的な金のみが用ひ得られることになる。『要するに價値の尺度たるその機能においては、貨幣は單に觀念された、または單に觀念的な、貨幣として役立つにすぎない』(註三)。

しかし、『價値尺度の機能のためには單に觀念されたにすぎぬ貨幣で事足るとしても、價格は全く實在的な貨幣材料に依存してゐる』(註四)。そこで、今吾々は、金が、金のみが貨幣であるといふ前提に立つてゐるのだが、しかし、銀または銅が、貨幣として、價値尺度として用ひられるとすれば、金、銀、銅それぞれに含まれる價値量に従ひ、或は多く或は少くの全く異なる分量によつて、商品の價値は表現されることになる。

(註三) 同上、一九五—六頁||長谷部譯、三〇二頁。

(註四) 同上、一九六頁||長谷部譯、三〇二頁。

『それゆゑに二つの異なる商品、例へば金と銀とが同時に價値の尺度として役立つならば、すべての商品は二様の異なる價格表現、金價格と銀價格とをもち、且つそれらは、銀の金に對する比價が不變であつて、例へば1:15であるかぎり、無事に相並んで行はれる。しかしこの比價に何等かの變動が起れば、それは必ず諸商品の金價格と銀價格との比を攪亂し、かくて價値尺度の二重化はその機能と矛盾することを事實において證明する』(註五)。

(註五) 同上、一九八頁||長谷部譯、三〇四頁。

さて、諸商品の價値が、一定量の金を以て示された場合、これらの諸商品の價値は、一定量の觀念的な金に轉化されるのだが、それによつて諸商品は、その現物體の種々雜多なるにも拘らず、價値において相互に比較され、秤量され得るものとなる。が、かく比較秤量するためには、これらの觀念的な金量を、尺度單位としての一定量の金に關聯せしめるといふ技術的な必要が生じて来る。が、更に、諸商品價値の轉化された形態としての觀念的金量は、必ずしもこの尺度單位で割り切れるものではなく、従つてこの尺度單位を更に可除部分に分割しなければならなくなる。かくて、尺度單位は、

進んで基本的な単位となり、価値の基本的単位、即ち價格本位又は價格標準となる。そしてそれは又、同時に貨幣本位となる。

ところで、金、銀、銅等は、すべてそれが貨幣となるまへに、すでに自分自身の重量を秤量するための基本単位を持つてゐた。『それ故すべての金屬通貨においては、秤量本位に關する傳來の名稱がまた、貨幣の基本単位または價格の基本単位の最初の名稱となつた』(註六)。

(註六) 同上二〇一頁||長谷部譯、三〇六頁。

價值尺度としての金の機能と、價格標準としての金の機能とは次の諸點で區別せられる。

(一)貨幣が、價值尺度としての機能をつくすのは「人間労働の社會的權化」としてのその性質によつてであるが、それが、價格標準としての機能をつくすのは『或る確定された金屬重量』としてである。

(二)貨幣は、價值尺度としては、諸商品の價值を、觀念されたる自分自身の或る量に、即ち價格に轉化するのであるが、價格標準としては、それは、かく觀念される自分自身の或る量を、自分自身の確定量で測度する。

(三)金が價值尺度となるのは、それが人間労働の生産物であるからにほかならず、従つてまた一の價值——労働の生産力によつてその大きさの變動するところの價值であるからにほかならぬ。然るに價格

標準としては、それは、自分自身を測定する尺度であり、従つて、時と場所を問はず確定せる、變動なき一確定量であるところが、望ましい。

だが、金が一の價值物であり、その價值は、すべての商品の價值と同じやうに、可變的であるとはいへ、そのことによつて、價格標準及び價值尺度としての、金の機能は妨げられはしない。

『先づ明かなことは、金の價值變動が、價格の基本単位としての金の機能を、如何なる仕方でも妨げはしないといふことである』(註七)。蓋し金の價值が如何に變動しても、二匁の金は一匁の金の二倍であり、五匁の金は同じく五倍であることに變りはないからである。

(註七) 同上 二〇三頁||長谷部譯、三〇八頁。

價值尺度としての金の機能もまた、金の價值變動によつて妨げられはしない。蓋し、金の價值變動は『すべての諸商品に對し同時的に影響を及ぼす。従つてそれは、他の事情にして同一ならば、それら相互の相對的價值を變動せしめはしない』からである。『尤も、それらは今やすべて、以前より高いか低いかの金價格で表現されはするけれども』(註八)。

(註八) 同上 二〇三—四頁||長谷部譯、三〇九頁。

だが、このことは、もちろん、たゞ他の事情にして同一ならばといふ條件の下にのみ言ひ得られ

る。蓋し、『一商品の價値を何等かの他の一商品の使用價値で表示する場合と同じやうに、諸商品を金で評價する場合にもまた、與へられたる時においては一定量の金の生産に一定量の労働が必要とされるといふことのみが、前提されてゐる』(註九)。

されば、商品價格は、貨幣價値が不變であつても商品價値の増加したときに、または、商品價値は不變でも貨幣價値の減少したときに、一般的に騰貴するし、またその何れでもが逆の關係になれば、一般的に下落し得る。だから、貨幣の價値の減少したゞけ、商品價格が騰貴するといふことは、たゞ價値變動を生じなかつた商品に就いてのみ言へることであつて、貨幣の價値減少と同じ割合で、その價値を減少せしめた商品の價格は、以前と變りはない。そして價値の増加した商品は、貨幣價値の減少した割合より以上の價格騰貴を生ずるであらう。貨幣價値の増加した場合に就いては、その逆の關係になる。

(註九) 同上 二〇四頁—長谷部譯、三〇九頁。

吾々はすでに、金の秤量單位が、價格標準に、貨幣の基本單位になることを述べておいた。ところが、この兩者は、主として次のやうな諸理由から、分離して來る。(一)發展程度の低い民族においては、外國貨幣が輸入されて、それが國內での通用貨幣となること。その場合、外國貨幣名が、國內の重量名と異つてゐることはいふ迄もない。(二)『富の發展につれて、低級な貴金屬は高級な貴金屬に

より……價値尺度たる機能から驅逐される。例へばポンドは嘗ては銀の現實の一ポンドに對する貨幣名であつた。然るに金が銀を價値の尺度たる機能から驅逐するや否や、金銀比價の如何に應じて、この同じ名稱が場合によつては十五分の一ポンド等々の金に附せられるやうになつた』(註一〇)。(三)王侯が——多くは財政上の必要から——恣意的に目方の軽い鑄貨をヨリ重い目方の鑄貨と同じ貨幣名を附して通用せしめるに至つたこと。これは歴史上最も屢々生じてゐる。

(註一〇) 二〇五—六頁—長谷部譯、三一〇—一頁。

右に述べたやうな様々の條件は、貨幣名と重量名との分離を、頻繁ならしめる。だが他方において、貨幣本位は、一面では純粹に慣習的なものであるが、他面では、その商品流通の範圍内で一般的妥當性を持つことが、技術的に必要であるから、それは結局法律によつて制定されざるを得ぬ。かくて、『諸々の價格は——今や貨幣名で、すなはち貨幣の基本單位の法律上有效な計算名で表現される。だからイギリスにおいては、一クォータの小麥は一オンスの金に等しいといふ代りに、それは三ポンド十七シリング十ペンス二分一に等しいと言はれるであらう。かくして諸商品は自己が如何ほどに値するかを彼等の貨幣名で語り、且つ貨幣は、一つの物を價値として、従つてこれを貨幣形態で確定することが問題となるときは、いつでも計算貨幣として役立つことになる』(註一一)。

(註一一) 同上 二〇九頁—長谷部譯、三二二—三頁。

このやうに貨幣名と重量名とが分離してしまふと、貨幣名なるものが貨幣としての一定の金量に附せられた名稱であるといふ事實は忘れられ、名稱こそが本源的なものであつて金の一定量が法律的に又は人爲的にこれと等置せしめられるかの如く見えて来る。そこで例へば、鑄貨の價格又は鑄貨價格といふやうな呼び方さへ現れた(註一二)。

(註一二) 『價格の基本單位としての金は、諸商品の價格と同一の計算名で現れるから、従つて例へば一オンスの金は、一トンの鐵と同じやうに、三ポンド十七シリング十ペンス二分の一で表現されるから、金のこの計算名は金の鑄貨價格と呼ばれてきた。この事情から、金(乃至銀)はそれ自身の材料で評價され、且つ他のすべての諸商品と違つて定つた價格を國家から受けとる、といふ驚くべき觀念が發生した。人々は、一定の金重量の計算名を確定することを、かゝる重量の價值を確定することと、混同したのである』(河上譯「經濟學批判」一六二頁||猪俣譯、七〇頁)。

商品の價格は、商品の價值の貨幣形態として、商品の價值の大きさをあらはすものであると同時にまた、商品と貨幣との交換比率をあらはすものである。ところで、商品の價值の大きさをあらはすものとしての價格は、必ずまた商品と貨幣との交換比率をあらはすけれども、逆に、商品と貨幣との交換比率をあらはすものとしての價格が常に必ずその商品の價值の大きさをあらはすといふわけにはゆきかねる。

例へば、一足の靴と一匁の金(即ち五圓)とに、等しい量の社會的必要勞働量が對象化されてゐるとしよう。五圓(一匁の金)は一足の靴の『價值の大きさの貨幣表現であり、またはその價格である』(註一三)。ところで、人々は、一定の條件の下においては、一足の靴に六圓(一匁二分の金)といふ値をつけることも出来るし、又事情によつては、四圓(八分の金)といふ値をつけなければならぬこともある。そして、それらの價格は、靴の價值の大きさの表現としては、大にすぎ又は小にすぎる。だが、それにも拘らず、その六圓(一匁二分の金)なり四圓(八分の金)なりは、靴の價格たることを失はぬ。何故ならば、六圓なる貨幣にせよ、四圓なる貨幣にせよ、それは靴の價值の大きさは正確に表現しなくても、靴の價值の形態としての貨幣であり、その上にまた靴と貨幣との交換の比率を現はすものである。

(註一三) 「資本論」第一卷、二二二—三頁||長谷部譯、三一六頁。

何故さういふことになり得るか。

價格なるものは、商品の價值の貨幣表現として、價值の大きさを表現する。だが、この價值の大きさは、如何なる商品の所有者の意志にも依存するものでなく、生産における一の必然的な社會的關係の表現にほかならぬ。従つて商品はその價值の大きさを絶對的に示すことは出来ないで、たゞそれと交換され得る何等かの他の商品で相對的に表現し得るのである。従つて、また價值の貨幣表現にあ

つても、一商品の價値の大きさは必然的に、その商品が自己の外部に存在する他商品——即ちこゝでは貨幣商品——と交換され得る割合又は比例として現れるより外はない。そして、かゝる表現こそ價値の價格形態である。そこで必然的に、次の事情が生じるのだ。——(一)價格形態即ち右の如き交換の比例においては、商品の價値の大きさも表現せられ得るけれども、(二)しかしそれと共にまた、與へられた事情の下でその商品が讓渡され得るところの、ヨリ多くの量又はヨリ少い量も表現せられ得ることになる。『だから——とマルクスは言ふ——價格と價値の大きさとの間における量的不一致の、すなはち價値の大きさからの價格の背離の、可能性は、價格形態そのものに内在してゐるのである』(註一四)。

(註一四) 同上 二二一—四頁||長谷部譯、三一七頁。

ところで、この價値と價格の乖離の可能性たるや、價格形態の缺點なのではない。さうではなくて、むしろそれがあるが故にのみ、價格形態は、相互に獨立的な私的生産者達による無計畫・無統制な生産の仕方にとつて適當な形態となる。けだし、かゝる生産の仕方の下においては、『盲目的に作用する無規則性の平均法則としてののみ、法則は自己を貫徹する』のだから(同上二四頁||三一七頁)。

だが、價格形態は、價値と價格の量的不一致を許すばかりでなく、『それはまた或る質的矛盾をも宿らせうる』(註一五)けだし、それ自身何等價値物でないもの、商品でないもの、例へば官位・名譽・

等々の如きものまでさへ、貨幣と交換され、かくすることによつて、價格を與へられ、商品形態を取るからである。

(註一五) 同上 二一五頁||長谷部譯、三一八頁。

價格は、それによつて一方ではその商品がいくばくの貨幣と交換され得るかを示してゐるが、しかし同時にまたその商品が、『その自然のからだから蟬脱して、自らをば單に觀念された金から現實の金に轉身しなければならぬ』(註一六) ことをあらはしてゐる。何故といつて、商品は『その所有者のために一般的等價物たる務めを果すには、商品は金によつて置き換へられねばならぬ』(二一七頁)。されば、商品の現實の貨幣への轉身は、必然性をもつた飛躍、どうにかしてなし遂げねばならぬ冒險である。『價格形態は、貨幣に對する商品の讓渡可能性と、かゝる讓渡の必然性とを、含んでゐる。他方において金は、たゞそれがすでに貨幣商品として交換過程の内をうろつき廻つてゐるが故にこそ、觀念的な價値尺度として機能する。だから觀念的な價値尺度のうちには硬貨が待ち伏せしてゐるのである』(註一七)。

(註一六) 同上 二一六頁||長谷部譯、三一八頁。

(註一七) 同上 二一八頁||長谷部譯、三二〇頁。

第二節 流通手段

(一) 諸商品の形態變化

交換過程は、それぞれの生産者達が、自分にとつては非使用價值であり、單なる交換價值でしかないものを、それが使用價值であるところの人々の手に移し、又、自分は自分で、自分にとつて非使用價值であるものゝ代りに使用價值を手に入れるといふ限りにおいては、社會的な物質代謝である。商品は、それが使用價值として役立つ人々の手に移ると、商品交換の領域から脱落して、消費の領域に入り込むのだが、吾々にとつて問題になるのは、かゝる使用對象物としての商品ではない。吾々は専ら、この交換の過程を、形態の方面から、『従つて社會的な物質代謝を媒介するところの、諸商品の形態變化または變態だけを、觀察すべきである』(註一八)。

(註一八) 同上 二二〇頁—長谷部譯、三二二頁。

吾々が、交換の過程を總括的に鳥瞰するならば、一方の側には金、即ち貨幣を、他方の側に他のすべての有用物を見出す。然し、貨幣にせよ、又その對極たる諸商品にせよ、それが使用價值と價値の

統一物である點に於ては變りない。たゞ、この統一は、『兩極の各々の上へ互ひ違ひに自らを表示し、且つかくすることにより同時にその交互關聯を表示』(註一九)してゐる。と言ふのは、——一方、商品は、實在的には、その自然體としては、使用價值であるが、それが價値物であるといふ事實は、單に價格の中に觀念的に示されてゐるにすぎない。そして、かゝる觀念的な表示によつて、商品は貨幣と、金と、關聯せしめられてゐる。他方、貨幣は、價値の體化物、交換價値そのものゝ實在的な姿であり、その使用價值は、——如何なる種類の使用價值でもあり得るといふその一般的な使用價值は、觀念的に、相對的價値表現の系列の中に示されてゐるにすぎない。そして、この表現の系列によつて、金は、これらすべての商品と關係せしめられてゐる。

(註一九) 同上 二二二頁—長谷部譯、三二二頁。

かうした交互關聯の中には、すでに、商品の形態變化を單に商品と貨幣との間に交換だけで完結されるものとして把握してはならない、といふことが含まれてゐる。蓋し、若し吾々がさうするならば、それは、單に、一商品と他商品金との交換であつて、商品と貨幣商品との交換ではないからであり、従つてまた、商品が價格表示によつて、自らを貨幣商品金に關係せしめてゐるといふ事實も閉却されるからである。諸商品の形態變化は、物質代謝を媒介する全過程に亘つて、分析されなければならぬ。

一製靴業者は、彼の生産した靴を携へて市場に行き、五圓で賣る。彼は靴を賣つて得た五圓で、帽子を買ふ。——この過程を、製靴業者の行爲として規定すれば、第一に販賣が行はれ、第二に購買が行はれてゐる。そして、この兩行爲は、何等の聯絡もない、獨立した行爲ではなくて、起動としての販賣が購買に終結してゐるのである。商品の形態變化としてこの過程を規定するならば、たゞ價値の擔ひ手たるにすぎない商品・靴が、その價値の現實的姿容たる金に置き換へられ、更にこの價値の體化物が、一商品帽子に置きかへられたのであつて、商品の貨幣への轉形と貨幣の商品への轉形との二つの轉形によつて、交換過程は完結する。結果から見れば、彼の勞働生産物たる靴が、他人の勞働生産物たる帽子と交換されたのだ。それは即ち、社會的勞働の物質代謝が行はれたのであつて、貨幣は、この交換乃至代謝の媒介者である。

吾々は更に詳細な吟味に移らう。

商品の第一變態即ち販賣は $M \rightarrow C$ (或 $C \rightarrow M$) である。そして、交換過程のこの段階こそは、商品にとつて最も困難な、飛躍的冒險といふに値する「轉身」なのだ。

何故なら、——

「社會的分業は、(人間の)欲望を多面的ならしめるとともに、彼の勞働を一面的ならしめる。だからこそ彼の生産物は、交換價値としてのみ彼に役立つ。しかるにそれは貨幣でのみ一般的な、社會的に

妥當な、等價形態をとるのであり、しかもその貨幣は他人のポケットの中に存在してゐる」(註二〇)。

(註二〇) 同上 二二四—二五頁 || 長谷部譯、三二五頁。

だから、彼は、貨幣を他人のポケットから引き出さなければならぬのだが、そのためには彼の所有する商品が、貨幣所有者にとつて使用價値でなければならぬ。言ひ換へれば、彼の支出した勞働が、社會的分業の肢體であることが確かであればならぬ。ところで、自然發生的な生産組織であるところの商品生産においては、このことは、決して、確かであり得ない。彼の勞働が、果して社會的に有用な形態で支出されてゐるか、又、たとひ昨日はさうであつたにしても、今日も尙さうであるのかどうか、それは決して彼にとつて明瞭ではない。

が、更に、彼の商品が使用價値を有することは確かであつたにしても、幾何の貨幣とそれが交換されるかといふ問題が残つてゐる。吾々は、商品生産者たる彼が、その商品の價値の大きさを、誤りなく算定し、正しい價格をこれに與へたとしよう。それにしても、わが商品生産者には何等の相談もなしに、生産上の諸條件は變化し得る。この場合には彼は、商品そのものゝ突然の價値下落に見舞はれざるを得ぬ。

更にまた、彼に何等の相談もなしに、多數の同業者が、餘りに多數の同業者が存在して、餘りに多

くの生産物を市場に持ち込むといふこともあり得る。この場合には、彼はその商品を決して價值通りには販賣し得ないだらう。けだし、市場における同一商品は、すべて、『たゞ一個の商品としての資格をもち、その各片はたゞその可除部分としての資格をもつ』(註二二)。だから、結局、個別的生産物は、その生産に社會的に必要とされる労働時間以上の労働が無駄にそれに支出されてゐると、同一状態にある。

(註二二) 同上 二二八頁||長谷部譯、三二八頁。

かくて、われらの『商品所有者達は、彼等を獨立の私的生産者たらしめつゝある分業そのものが、社會的生產過程およびこの過程内における彼等の諸關係を、彼等自身から獨立的なものたらしめてゐるといふこと、相互の間における人々の獨立は、全面的な物的依存の一體系によつて補足されてゐると云ふことを發見する』(同上 二二八頁||長谷部譯、三二八―九頁)。生産の諸條件並びに消費の諸條件に生ずる一切の變化は、彼等の背後に生じ、彼等自身はかゝる諸變化の生じたことをたゞ商品の變態W—Gにおいて知り得るのみである。他方、個々の商品生産者と、彼等の社會全體との連絡は、社會的過程の物的方面としてW—Gの背後に隠され、且つその助けによつてのみ實現されるのだ。で、商品の貨幣への轉形は、商品にとつて是が非でもなし遂げられなければならぬ必然的な運命で

ありながら、しかもかゝる轉形が果して成しとげられ得るかは偶然的なものとなる。だが、吾々は、こゝでは、現象を純粹な形態で觀察しなければならぬ。だから、商品はとも角も、その轉形を成し遂げたものと前提しよう。

商品所有者は商品を讓渡して貨幣を得、貨幣所有者は貨幣を讓渡して商品を得てゐる。此處に行はれたのは、商品と貨幣の交換であり、所有者の轉換である。だが商品は自らを何と交換するのか？ それ自身の一般的な價値の姿と。しからば金は自らを何と交換するのか？ その使用價値の一つの特殊な姿と』(註二二)。

(註二三) 同上 二二九頁||長谷部譯、三二九頁。

ところで、また、何故に、他の商品ではなしに、金が商品としてゝはなしに貨幣として、他の商品即ち吾々の場合には靴と對立するのであるか。けだし、五圓といふ靴の價格が、すでに靴をば、貨幣としての金に關係せしめてゐるからである。商品が本來の商品形態を脱化した瞬間に、一方では、價格における觀念的な金が、現實の金——交換價値の現實の姿——に轉化され、他方では、貨幣の觀念的な使用價値が、具體的なそれ故特殊な使用價値に實現される。されば、販賣W—Gは、一方からは購買即ちG—Wである。

だが、更に、——金が單に價値物として現はれるところの金の生産地における金と他の商品との交

換の場合を度外視するならば、そしてその場合には金は未だ實際G即ち貨幣でもないのであるが——G—Wが行はれるためには、豫めW—Gが行はれておかなければならぬ。吾々はもとより、それが、如何なる商品の轉形であるかを、たゞ貨幣を見たばかりでは知り得ない。けだし、其處では、交換せられた商品を創り出したところの特殊な有用労働の痕跡は全く消滅し去つてゐるからである。だが、それにしても、W—Gは行はれておかなければならぬ。いま、このGが、商品椅子の轉形であるとすれば、商品靴の貨幣への轉形は、同時に、商品椅子の價値の姿の、商品靴への轉形でもある。即ち商品の第一の變態は、同時に、他の商品の第二の變態、即ち貨幣に轉形した商品の商品への復轉形でもある。

商品の第二變態すなはち購買は、G—Wを以つて示される。貨幣は、『一方においては賣られた商品を代表してゐるが、他方においては買ひえられる諸商品を代表してゐる』(註二三)。これを他の關係から言ひ現はせば、貨幣は、他人によつて買はれた商品を代表してゐると共に、賣られる商品を代表してゐる。一人の人が賣り又は買つた場合、他の人が買ひ又は賣つてゐるからである。『購買G—Wは、同時に販賣W—Gであり、従つて或る商品の最後の變態は、同時に他の一商品の最初の變態である』(註二四)。

(註二三) 同上 二二三—二四頁||長谷部譯、三三三頁。

(註二四) 同上 二三四頁||長谷部譯、三三四頁。

さて、吾々は、以上述べた事態を、個々の段階に分析することなく、總括的に、統一された過程として、もう一度吟味して見よう。

一商品の總變態は、W—G及びG—Wの二つの段階から成り立つてゐる。商品所有者は、第一の段階では、販賣者として、他の購買者と對立し、第二の段階では購買者として、更に他の一人たる販賣者と對立してゐる(勿論第一段階における購買者が第二段階における販賣者となつて立現れるといふことも有り得るが、然しそれは例外に屬することであつて、吾々の研究の對象とはなり得ない)。されば、一商品の總變態は、四つの極と三人の登場人物を持つてゐる。そして主役者たる人間は、第一の段階では販賣者として、第二の段階では購買者として出演する。

更にこの二つの運動段階は、商品と貨幣の對立においてこれを見る時は、W—G—Wといふ一箇の循環である。たゞ前に現れた商品は、その所有者にとつて非使用價値であり、後の終點における商品は、その所有者にとつて使用價値であるといふ點のみ、一商品は他の商品から區別される。それに相應して貨幣もまた、第一段階では、『固形的な價値結晶として現れ、後になつて、商品の單なる等價形態として消滅する』(註二五)。

(註二五) 同上 二三七頁||長谷部譯、三三六頁。

吾々のすでに知つてゐる通り、一つの商品の循環を形成する二つの段階は、他の二つの商品の循環のそれと異なる段階を形づくつてゐる。即ち一商品の第一の變態は他の商品の第二の變態であるし、又、同じ商品の第二の變態は、第三の商品の第一の變態である。更にこのことを言ひ換へれば、販賣は同時に購買であり、購買は同時に販賣である。かくして、各々の商品の變態系列が描くところの循環は、他の諸商品の諸々の循環と解けがたくもつれ合つてゐる。その總過程は商品流通として自らを表示する(註二六)。

(註二六) 同上 二三七頁||長谷部譯、三三七頁。

商品流通は、次の諸點によつて、本質的に、物々交換から區別される。

(一) 吾々の例に従へば、製靴業者はその勞働生産物を、商品椅子によつて代置したのであるが、兩人は、決して、その商品を、相互に交換しはしなかつた。商品流通は、直接的物々交換につきまとい『個人的及び地方的限界を破つて、人間の勞働の物質代謝を』(註二七)、廣汎な規模に發展せしめる。

(註二七) 同上 二三八頁||長谷部譯、三三七―八頁。

(二) 他方、それと同時に商品流通は、市場にある人々によつて『制御され得ざる、社會的な、自然發生的な諸連繋の一領域全體』(註二八)を發展せしめる。けだし、製靴業者が靴を賣ることが出来たのは、すでに例へば織物業者が綿布を賣つてゐたからであり、又家具商が椅子を賣ることが出来たのは、製靴業者がすでに靴を賣つてゐたからである、……等々、かうした連繋は、商品流通の發展と共に擴大される。

(註二八) 同上 二三八頁||長谷部譯、三三八頁。

(三) 直接的な生産物交換にあつては、運動は、使用價値の場所或は所有者の轉換で、結末がつく。次々に行はれる諸々の生産物交換は、その間に何等の連繋をも持つてゐない。然るに商品流通においては、前述の如く、個々の生産物代置が貨幣の媒介によつて行はれ、貨幣は一つの商品變態系列を終結せしめても、決して舞臺から飛び退くことなしに、『諸商品が立ち退いた流通内の場所に沈澱する』(註二九)。例へば、靴が貨幣と交換され、貨幣が椅子と交換されるや、靴の變態系列は、それで幕を閉めるのであるが、貨幣は、今や、家具商の手に沈澱して、待機の姿勢をとる。

(註二九) 同上 二三九頁||長谷部譯、三三八頁。

(四) 直接的な労働生産物の交換にあつては、商品の形態變換はたゞの一段階 $W-W$ であり、且つ又或る人にとつての $W-W$ は、これと對立する人にとつても $W-W$ である。されば直接的な労働生産物交換は、流通過程の單一性を、その直接的同一性によつて特徴づけられる。然るに商品流通にあつては商品の形態變換は、 $W-G$ と $G-W$ の二段階に分裂し、且つ、或る人にとつての $W-G$ は、他の人にとつては $G-W$ である。されば、商品流通を特徴づけるものは、一方では、商品變態の過程の販賣と購買との分裂であり、他方では、この兩對立の同一性である。

或る人々は、購買が同時に販賣であり販賣が同時に購買であるといふ事實から、商品流通は購買と販賣との必然的平衡を制約する、といふドグマを作り出した。

成程、販賣の數は購買の數に一致するにはするが、それは然し、販賣が同時に購買であり、又は購買が同時に販賣であることの、同義異語にすぎない。

然るに、論者達の問題は、なされた販賣の數が、なされた購買の數に一致するか否かといふ點にあるのではなく、販賣せんとする者が、常に購買者を見出し得るか、否かといふ點にあつたのであり、論者達の論證は、販賣者は常に、購買者を市場に同道する、という點に向けられてゐるのである。——しかも、論者達は、全く無意味な、的をはずれた前述の如き同義反覆を以つて、問題を片づけようとした。

然るに、實際においては、販賣が同時に購買であり、購買が同時に販賣であるといふこの事實——論者達が依つてもつて反對の事を論證せんとしつゝあるこの事實こそ、まさに、販賣者が必ずしも常に購買者を見出し得るものではない、といふことの可能性を與へるのである。何故なら、——

販賣と購買とは、相對立する二人の人間の即ち商品所有者と貨幣所有者の間の相互關係としてみれば、同一性的な行爲であるが、同一人の行爲としてみれば、對極的に對立しながら、而も商品變態の內的統一を形成するところの二つの契機である。されば彼は、賣らずして買ふことが出来ない。しかもまた他方、販賣は同時に購買であり、購買は同時に販賣であるが故に、一つの運動の內的統一の形成者たるこの兩過程は、獨立した過程である。何人も、賣つたからと言つて買ふ義務を有するものではない。そして、A商品の第二變態が行はれないといふことは、他の例へばB商品の第一變態が行はれないといふことである。そしてこれは更に、間接にはB商品の第二變態とC商品の第一變態とが行はれないといふことである。

そこで、『流通はまさに——とマルクスは言ふ——生産物交換に存在するところの、自己の労働生産物の讓渡と他人の労働生産物の占有との直接的な同一性を、販賣と購買との對立に分裂せしめることにより、生産物交換の時間的、場所的、および個人的限界を打破するのである。獨立的に互に對立してゐる過程が一の內的統一を形成するといふことは、とりも直さず、それらの內的統一が外的對立と

なつて運動するといふことである。互に補充し合ふものであるがため内的には非獨立的なるものであるに拘らず、その外的獨立化が或る一定の點まで進行すると、その統一は一の恐慌によつて強制的に維持される。商品に内在するところの使用價值と價值との對立、私的勞働が同時に自らを直接に社會的な勞働として表示せねばならぬといふことから起る對立、特殊的な、具體的な勞働が同時に抽象的な、一般的な勞働としてのみ資格をもつといふことから起る對立、物の人格化と人格の物化との對立——かゝる内在的矛盾は、商品變態の諸對立においてその展開せる運動諸形態をとる。それゆゑこれらの諸形態は、恐慌の可能性を——しかしたゞその可能性のみを——包含する。かゝる可能性の現實性への發展は、單純な商品流通の立場ではまだ全く存在してゐないところの、諸關係の全範圍を必要とする』(註三〇)。

(註三〇) 同上 二四一頁—長谷部譯、三四〇—一頁。

(二) 貨幣の流通

『商品流通の媒介者として貨幣は流通手段たる機能を持つ』(同上二四二頁—長谷部譯、三四一頁)。
前にも述べた通り、價值としての商品の運動は、一の循環運動である。この循環運動は、商品の脱皮された姿としての貨幣を呼び込み、次いで商品の絶對に讓渡されうる姿として貨幣をしりぞける。

だが、第一の變態における商品の脱皮された姿としての貨幣も、他面から見れば、(購買者の側から見れば)商品の絶對的に讓渡されうる姿に他ならぬ。貨幣の運動は、要するに、出發點を次々に把へつ、しかも絶えず出發點から遠ざかつて行く運動に他ならぬ。製靴業者が靴を賣つて得た貨幣で、椅子を購買したならば、その貨幣は、もはや永久に彼の手に復歸しはしない。勿論彼は再び靴を製造して、これを賣ることによつて貨幣を手に入れることは出来るが、それは貨幣の循環によつてではなく、同一過程の更新、反覆によつてである。で、商品流通の媒介者として貨幣は流通手段たる機能をもつが、流通手段として貨幣は、一つ商品所有者の手から他の商品所有者の手に流れて行く。これ即ち貨幣の流通又は「通用」である。

『貨幣の通用は、同一の過程の間斷なき、單調なる反覆を示す。商品は常に販賣者の側に立つが、貨幣は購買手段として常に購買者の側に立つ。それは商品の價格を實現することにより、購買手段として機能するのである』(註三一)。

(註三一) 同上 二四四頁—長谷部譯、三四三頁。

購買手段としての貨幣は、絶えず、商品を販賣者の手から購買者の手に移すと同時に自分自身は購買者の手から、販賣者の手へと移つて行く。貨幣の一方的なこの運動は、商品の双方向的な運動に起因

するのであるが、外觀上は却つてその逆になつて見える。けだし、商品變態の第一段階は、貨幣の運動としてのみでなく、商品の運動としても、明瞭に吾々に看取されるけれども、その第二段階においては、自然體としての商品はすでに流通過程から脱落し、それは單に價値の姿として、金の外皮を着て、運動する。されば、商品變態の第一段階、第二段階の連続性は、全く貨幣によつてのみ保持されることになり、商品の運動は貨幣の運動に押しかくされ、對立的な二過程を含む商品の變態の運動は、全く、貨幣の位置轉換の運動におほひかくされる。かくて、一商品の他の商品による代位は商品自身の形態變化に基づくものでなく、むしろ流通手段たる貨幣の機能に基づくかの如く、『流通手段としての貨幣は、それ自體としては運動しないところの諸商品を流通せしめるものであり、それらの諸商品をばそれらが非使用價値である人の手から使用價値である人の手に——いつも貨幣自身の歩みとは反對の方向に——移すものであると見えてくる。貨幣は絶えず商品の流通し去つた跡を占め、且つこれにより絶えずその出發點から遠ざかりつゝ、諸商品を絶えず流通界の外に去らしめる。それゆゑに、貨幣の運動は商品流通の表現にすぎざるに拘らず、逆に商品流通が貨幣運動の結果にすぎざるものとして現はれる』(註三二)。

(註三二) 同上 二四五頁—長谷部譯、三四四頁。

商品變態の運動は、絶えず貨幣を排除する。だが、排除された貨幣は、次々に他の商品の變態運動を把へて前進する。かくて、商品は絶えず流通から脱落するにも拘らず、流通手段としての貨幣は、常に、流通界の中を徘徊する。そこで一つの問題が起る、——流通界はどれ程の貨幣を恒常的に吸収するか？

吾々が一定のある瞬間を把へてみるならば、空間的に並存する、同時的な一面的な商品變態が、即ち一方から言へば單なる販賣、他方から言へば單なる購買が行はれてゐるのを見出す。この場合一方の側には商品、他方の側には貨幣があつて對峙し、相互の位置轉換が行はれるのであるから商品總價格と貨幣總額は一致してゐなければならぬ。實際また、『貨幣は諸商品の價格の總額ですでに觀念的に表現されてゐた金量を、實在的に表示するだけである。だからこれら二つの總量の相等しきことは自明である』(註三三)。

(註三三) 同上 二五〇頁—長谷部譯、三四七頁。

で、流通過程のために必要な流通手段の數量は、先づ諸商品の價格の總額によつて規定される。商品の總價格は、貨幣の側からも、又は商品の側からでも、これを増減させる運動が起り得る。貨幣の側から言へば、貨幣商品即ち金の價値の増減によつて商品總價格は反比例的に増減する。商

品の總價格が増大すれば、流通する貨幣量も増大する。逆の場合は逆になるだらう。この場合、『流通手段の數量の變動は、もちろん貨幣そのものから發生するのだが、しかしそれは、流通手段としての貨幣の機能からではなく、價值尺度としてのその機能からである。諸商品の價格が先づ貨幣の價值に反比例して變動し、しかるのち流通手段の數量が諸商品の價格に正比例して變動するのである』。

(註三四)。勿論、金の價值變動は、同時に、齊一的に諸商品價格の變動を起させはしない。それには先づ、この貴金屬の生産地において商品としての、此の貴金屬と直接交換されるところの諸商品の價格に變動を起させ、次いで徐々に、他の商品に及ぼしてゆく。『新たな金産地および銀産地の發見についで起つた諸事實の一面的な觀察は、十七世紀および殊に十八世紀において、商品價格が騰貴したのはより多量の金銀が流通手段として機能するに至つたからだ、といふ妄斷に人々を誘ふた』(註三五)。だが事實においては、貨幣價值下落に基づく價格の騰貴こそが、流通手段の流通量を大ならしめたのであつて、『商品價格は流通手段の數量によつて規定され、後者は更に一國內に存在する貨幣材料の數量によつて規定される』(註三六)といふ彼等の論據は、『商品は價格なしに、貨幣は價值なしに、先づ流通過程に入り、しかる後、そこでどつた混ぜにされた諸商品の堆積の可除部分が山積された金屬の可除部分と交換されるといふ、ばか／＼しき假説に根ざしてゐるのである』(註三七)。

(註三四) 同上 二五〇頁||長谷部譯、三四七頁。

(註三五) 同上 二五二頁||長谷部譯、三四九頁。

(註三六) 同上 二六二頁||長谷部譯、三五八頁。

(註三七) 同上 二六二頁||長谷部譯、三五八頁。

諸商品の總價格の變動はまた、商品の側からも起り得る。第一、商品の數量の増減によつて。これは、特に説明するまでもない自明の事柄である。第二、諸商品の價格の變動によつて。それには、『すべての諸商品の價格が時を同じうして或は騰貴し、或は下落することが必要なものでは決してない。すべての流通商品の實現さるべき價格の總額を或は増加せしめ或は減少せしめ、従つてまた或ひはより多くの或はより僅かの貨幣を流通せしめるためには、一方の場合には或る一定數の主要物品の價格が騰貴するだけで、他方の場合にはそれが下落するだけで、充分である』(註三八)。

(註三八) 同上 二五三頁||長谷部譯、三五〇頁。

吾々は更に進んで、時間的な契機をも考慮に入れねばならぬ。

今こゝに、靴と椅子と辭典とがあり、それらの價格は各々五圓で、同時に並行的に、販賣されると假定しよう。實現さるべき價格總額は十五圓であるから、流通界は十五圓の貨幣を必要とする。然るにこれらの販賣が順次に連續的に行はれるとすれば、五圓の貨幣は、三回通用することによつて、十

五圓の価格を實現することが出来る。

この場合、製靴業者は靴の販賣によつて商品靴の第一變態を遂げしめ、更に靴を販賣して得た貨幣——靴の價值姿——を以て椅子を購買することによつて、商品靴の第二の、最終の變態を遂げしめる。靴の第二變態は同時に椅子にとつては第一變態であり、椅子製作者にとつては販賣である。販賣によつて得た貨幣によつて、家具商は辭典を買ひ、椅子の變態を完成させる。そしてこの同じ過程は、辭典にとつては、その第一變態である。今これを圖示すれば、次のやうになるだらう。

靴—(第一變態)↓貨幣—(第二變態)↓椅子

椅子—(第一變態)↓貨幣—(第二變態)↓辭典

辭典—(第一變態)↓貨幣

かくて、『同一の貨幣片のかゝる反覆されたる位置轉換は、商品の二重の形態變化を、對立的な二個の流通段階を通じての一個の商品の運動および相異なる諸商品の變態の纏れ合ひを表示する』(註三九)。かういふ對立的な、相互に補充し合ふ運動は、もとより、同時に、並行的に、行はれるものではなく、時を置いて繼起しうるだけである。平均幾何の時を置いて行はれるかを見るに就いては、一定期間を取つてみる必要がある。かくて、或る定められたる期間内に、同一貨幣片が、何回通用するかが、その貨幣の通用速度を表示する。——だが、この場合も、『總じて貨幣の通用には、たゞ諸商品の

流通過程が、すなはち對立的な變態による諸商品の循環が、現はれると同じやうに、貨幣の通用速度には、諸商品の形態變化の速度が——諸々の變態系列の引續くもつれ合ひ、物質代謝の迅速さ、流通界からの諸商品の急速な消失および其等のもの、新なる諸商品による、同様に急速な代位が、——現はれるのである。すなはち貨幣通用の速さには、使用物たる姿から價值の姿への轉形と價值の姿から使用物たる姿への復轉形といふ、相對立し且つ補充し合ふ二つの段階の、すなはち販賣と購買といふ二つの過程の、流動的な統一が現はれるのである。それと逆に、緩慢なる貨幣の通用は、これら二つの過程の分離とその相互の獨立化との現はれであり、諸商品の形態變化の、従つてまた物質代謝の停滞の現はれである』(註四〇)。何故かゝる停滞が生ずるかは、流通部面をいくらか檢微鏡的に検査してみたいところで分るものではない。流通は、停滞なる現象を示すだけにすぎない。

(註三九) 同上 二五四頁—長谷部譯、三五二頁。

(註四〇) 同上 二五七—八頁—長谷部譯、三五三—四頁。

要するに、或る一定期間に流通手段として機能する貨幣の數量は、諸商品の價格總額を、その價格と同一稱呼の貨幣片の平均通用回數で割つたものに等しい、といふことになる。

諸商品の價格總額
—貨幣片の通用回數
=流通手段として機能する貨幣の數量

ところで、商品の價格總額なるものは、流通商品の數量及びそれら諸商品の價格變動によつて、變動するものである。されば、商品價格の變動、流通商品の數量の干満、貨幣の通用速度、この三つの要素こそが、流通手段として機能する貨幣の數量を決定するものであり、しかも、これら三つの要素は、『異なる方向に且つ異なる割合で變動しうる』(註四一)。吾々はもちろん、かゝる無數の組合せを一々吟味するわけには行かないが、商品價格を中心として、最も重要なモメントだけを拾へば次のやうになるだらう。

(註四一) 同上 二六〇頁—長谷部譯、三五六頁。

『商品價格が不變な場合には、流通商品の數量が増加するか、貨幣の通用速度が減少するか、または両者が共に作用するかによつて、流通手段は増加しうる。商品の數量の減少または流通速度の増加につれ、流通手段の數量は逆に減少し得る。』

商品價格が一般的に騰貴する場合には、流通商品の數量がその價格の騰貴すると同じ割合で減少するか、あるひは貨幣の通用速度が價格の騰貴と同じ速度で増加し、しかも流通商品の數量は不變であるかすれば、流通手段の數量は不變でありうる。商品の數量が價格の騰貴に比しヨリ急速に減少する

か、あるひは(貨幣の)通用速度が價格の騰貴に比しヨリ急速に増加するかによつて、流通手段の數量は減少しうる。

商品價格が一般的に下落する場合には、商品の數量がその價格の下落と同じ割合で増加するか、または貨幣の通用速度が價格の下落と同じ割合で減少するかすれば、流通手段の數量は不變でありうる。もし商品價格の下落に比して商品の數量が急速に減少するか、またはその流通速度が減少するかすれば、流通手段の數量は増加しうる』(註四二)。

(註四二) 同上 二六〇—一頁—長谷部譯、三五六—七頁。

だが、これらの三つの要素は、異つた割合で、異つた方向に變動しうるが故に、まさにその故に、それらは互に相殺されうるものであり、その結果、絶えず變動しつゝあるにも拘らず、流通手段の數量は、——金融恐慌のやうな特殊な場合を除けば——或る一定の平均水準を上下するにとゞまり、非常に大きな變化を急激に起すやうなことはない。

(三) 鑄貨、價值表章

諸商品の價格を實現するためには、貨幣は、それと同一稱呼を有つた斷片として、商品に對立しな

ければならぬ。かくて、流通手段としての貨幣の機能から鑄貨が発生する。價格の本位を確立するところが、國家の一事務であるやうに、貨幣鑄造の事務も、結局、國家のものとなる。かくて貨幣は、『計算貨幣としてさうであるやうに鑄貨としてもまた、地方的な且つ政治的な性質を受けとり、種々なる國の言葉を語り、種々なる國の制服を着てゐる』(註四三)。それは、國民的貨幣である。そしてその國民的制服の上に、一般的商品流通と區別された國內的商品流通が表現され、世界市場と國內市場の對立した姿が表現される。貨幣は、世界市場においては、この國民的制服を脱ぎすて、金としてのあらはな姿で出現しなければならぬ。

(註四三) 河上譯「經濟學批判」二一八頁、猪俣譯、一一六頁。

だが、造幣局から鑄貨といふ形で金が出て來たその道は、直接埤埒に到る道でもある。けれど、流通過程は、鑄貨の有する金の實在をその公認された、刻印された金屬内容の象徴に轉化させようとする傾向を、自然發生的に持つてゐる。『金貨は通用するうちに、多少の差はあれ次第に磨滅する。金の稱號と金の實體とが、名目上の内容と實在的内容とが、その分離過程を始める。等しい額面の金貨は、その重量が異なるために、等しからざる價值のものとなる。流通手段としての金は、價格の基本單位としての金から背離し、かくてまた、諸商品の價格はそれによつて實現されつゝあるに拘ら

ず、それはもはやそれら諸商品の現實の等價物ではなくなる』(註四四)。そして最後には、この兩者は、現實的な衝突を惹き起す。

(註四四) 河上譯「資本論」第一卷、二六八頁、長谷部譯、三六三—四頁。

と言ふのは——磨滅するといつても、どの鑄貨でもが一樣に磨滅するわけではない。造幣局から出たての新しい鑄貨は、古くから世の荒波に揉まれてゐる鑄貨よりも、ヨリ少くしか磨滅してゐないだらうし、金庫の中にしまひ込まれてゐる時の多かつた鑄貨も、しがたい人々の手から手へと劇しくひきづり廻された鑄貨よりも、ヨリ少くしか磨滅してゐないだらう。そこで、目方十分の鑄貨も、老いさらばへた鑄貨も、機能上の定在としては同一であるとするれば、目方十分の鑄貨の餘計な重量分は、『良心なき所有者の手で外科的手術を受け、流通自體がその輕き同胞達に對して自然的に成し遂げたところのことを、人工的に爲されるのである。それは削られ、その過剰なる金の脂肪は熔鑛爐の中に這入つてゆく』(註四五)。——かくて、多くの鑄貨の金屬としてのその實在が、その名目内容の單なる象徴に轉化されて行くのであるが、然し、如何なるものも自分自身の象徴にはなり得ない。やせた馬が肥えた馬の象徴になり得ないやうに。そこで、鑄貨の實質的内容と名目内容の背離が或る擴がりにまで及ぶと、この二つは正面衝突を起す。

(註四五) 河上・宮川譯「經濟學批判」二二三頁||猪俣譯、一二〇頁。

若し、五圓の金貨五枚をはかりにかけてそれが平均半匁しかないとすれば、二十五圓の鑄貨は、たと二匁半の金と交換されるにすぎないだらう。換言すれば、金の市場価格は、鑄貨價格以上になる。目方十分の金貨は、あぶらみをけづり取られるか、又は全部的に地金形態に還元される。かくて、金の市場價格が絶えずその鑄貨價格以上に騰貴するやうになると、鑄貨の計算名は依然として同一であるが、それは將來は以前よりも少ない金量を指示するに至るであらう(註四六)。かくて、價格の本位貨幣の本位が變更されて、この新しい本位に應じて、再び新しい鑄貨が作られることになる。歴史は、かゝる紛亂の例證を數多提供してゐる。そして、國家は、かゝる紛亂を防止するために、一定程度以上に磨滅した金片の通用を、法律によつて禁止するに至つた。

(註四六) 同上 二二四頁||猪俣譯、一二二頁。

流通過程が、鑄貨の金屬的實在をその機能的定在の象徴に轉化する自然發生的傾向を持つといふことの中には、流通手段としての機能における金屬貨幣が、何等かの象徴によつて代位せられ得ることの可能性をふくんでゐる。磨滅した鑄貨は、單にそれが金屬貨幣と肉體を同じくするが故にのみ、象徴としての、自分自身を確保し得なかつたのである。

だが、何故に、流通手段としての機能は、象徴によつて代位され得るのであるか？ 流通過程は何故かゝる代位の可能性を、提供するのであるか？

商品變態の對立する二段階 $W-G$ と $G-W$ とが、 $W-G-W$ により過程的に統一されてゐて、相互の獨立化が發展しない限り、商品價值が價格に、價格が更に貨幣に發展して行くのは、この形態を直ちに脱却して、商品に、といふよりも使用價值に、轉形せんがためである。それゆゑ、商品の貨幣形態は、全く瞬間的のものにすぎず、『商品の交換價值の獨立的な表示は、こゝではたゞ一時的な契機にすぎない』(註四七)。他方金は、それが流通手段として機能してゐる限り、『諸商品の變態の連鎖とその單なる經過的な貨幣存在とを表示するに過ぎず、他の商品の價格を實現せんがためにのみ或は一商品の價格を實現するにすぎず、交換價值の靜止的定在としては、あるひはそれ自體靜止せる商品としては、それは何處にも現はれない。諸商品の交換價值がこの過程のうちで受取り、金がその流通において表示する實在性は、たゞ電氣火花の實在性にすぎない。金は、たとひ現實の金であつても、たゞ假象的金としてのみ機能』(註四八)する。

(註四七) 河上譯「資本論」第一卷、二七七頁||長谷部譯、三七二頁。

(註四八) 河上・宮川譯「經濟學批判」二三一頁||猪俣譯、一二七頁。

従つて、それは、表章又は章標によつて代理されうる。然し、代理され得るのは、單にその機能においてであるにすぎない。このことは、流通手段の機能を代理するところの價值表章の流通法則を制約すること、後に述べる通りである。

貨幣の象徴として、流通手段機能を代行したのは、先づ、ヨリ低級なる金屬であつた。『金乃至銀の極めて小なる重量分を貨幣に鑄造することの技術的困難と、高級な金屬の代りに低級な金屬が、金の代りに銀が、銀の代りに銅が、もと價值尺度として役立つてをり、従つて高級な金屬が低級な金屬を退位せしめた瞬間に、低級な金屬が貨幣として流通してゐたといふ事情とは、銀および銅から成る名目貨幣が金貨の代用物としての役割を演じること、歴史的に説明するのである』(註四九)。

(註四九) 河上譯「資本論」第一卷、二七〇頁—長谷部譯、三六五頁。

これらの低級金屬は、最も流通のはげしい、従つて磨滅の度の大きい商品流通領域において、金に代位するのであるが、國家は、これらのものが、金の地位を奪ふことを防ぐために、法律によつて、流通において金に代位すべき量的限度を規定してゐる。これらの低級金屬は、一般に、補助貨幣と呼ばれてゐる。

だが、これらの補助貨幣が、金の象徴たり得るのは、勿論、それが價值物であるからではなくて、

先にも述べた通り、金の流通手段としての機能的定在に基づくものである。低級金屬はここでは、價值物としてではなく、むしろ無價值なるものとして、金鑄貨の象徴であるのである。されば、相對的に無價值なる紙券の如きものも、金貨幣の象徴として機能し得る(註五〇)。

(註五〇) こゝに紙券、又は紙幣といふのは、強制通用力を有する國家紙幣のみを意味する。信用貨幣又はその最も發展した形態としての銀行券は、後に見る通り、流通手段としての貨幣の機能から發生するものでなく、支拂手段としての機能に、その根源を持つのである。

鑄貨として機能する價值表章——例へば國家紙幣——は、それが貨幣に對する關係においては、鑄貨名によつて表現されてゐる分量の貨幣の表章、即ち金表章である。従つて、それは、一定量の金が價值を持つ限りでのみ、且つその價值の大きさにおいてのみ、價值を表示する。だが他方、同じ價值表章は、商品に對する關係においては、その商品の價格の實在性を示すところの價格章標である。従つてそれは、商品の價值が價格で表現されてゐる限りにおいてのみ、それらの商品の價值の章標であり得る(註五一)。

(註五一) 『過程W—G—Wにおいては、この過程が二つの變態の單なる過程的統一または直接的な相互轉形としての自己を表示してゐるかぎり——價值章標が機能する流通領域においてはこの過程は實際かゝるものとして自己を表示してゐるのであるが——諸商品の交換價值は、價格においては單なる觀念的存在を、貨

幣においては單に觀念された、象徴的な存在を、受けとる。かくして交換價值は、考へられたものまたは物的に表はされたものとしての現はれるだけで、或る一定量の労働時間が對象化されてゐるかぎりの諸商品そのものにおける以外には、何等の現實性をも有しないのである。それゆゑ價值表章は、金の表章として現はれずに、商品のうちのみ存在し、たゞ價格で表現されてゐるにすぎないところの交換價值の表章として現はれることにより、商品の價值を直接に代理してゐるかの如き外觀を呈する。だが、かかる外觀は誤りである。價值表章は直接にはただ價格表章であり従つて金表章である。そしてたゞ間接にのみ商品の價值表章である』(河上譯「經濟學批判」二三二—三頁||猪俣譯、一二八—九頁)。

相對的に無價值な或る一定のものが、貨幣材料の表章になるのは、初めは慣習による。然し、それは、商品所有者達の一般意志により、然るものとして保證され、認證されなければならないのだから、結局國家が、かかる表章の現實の保證者にならなければならない。かくて、『強制通用力を有する國家紙幣は、價值表章の完成された形態であり、しかも金屬流通または簡單なる商品流通そのものから直接に發生する唯一の紙幣形態である』(註五二)。

(註五二) 河上譯「經濟學批判」二三三頁||猪俣譯、一二九頁。

このやうにして、價格の本位の決定において、金地金の金鑄貨への外面的轉形において、國家はす

でに、商品流通に干渉し、國內流通は一般的商品流通から目に見えて分離したのであるが、鑄貨から更に價值表章への發展によつて、それは、ますます完成されたものになる。——この意味で、一般的商品流通の發展は、他面では、國內市場の分離の發展の過程でもある。

國家により、外部から流過程程に投げ込まれた紙幣は、それが、そこに印刷されてある貨幣稱呼と等しい稱呼の金量の代りに現實に流通してゐるかぎり、その通用運動は、まさしく、貨幣通用の法則を反映してゐる。たゞ、『紙幣流通に關する特殊の法則は、紙幣が金の代理となる割合からのみ發生する。しかもこの法則は簡單にたゞ次の如くである。紙幣の發行は、それによつて象徴的に表示されてゐる金(乃至銀)が——もしか、る象徴によつて代理されないならば——現實に流通せざるをえない量に限らるべきである』(註五三)。吾々のすでに知つてゐる通り、流通界の吸収しうる鑄貨量は、ある一定の平均水準を上下して動搖するものである。だから吾々は、經驗的に、平均水準なるものを見出し得るし、且つ流通必要量の最小限を確かめ得る。この最小限までは、單なる象徴によつて代位されうる譯である。蓋し、この最小限以上の紙幣が流通界に投じられた場合には、流通界の必要とする貨幣量が、その最小限度に落ち込んだ場合に、直ちに、紙幣供給が過剰になり得るからである。金は、價值を有するが故に流通するのであるが、紙幣は、流通するが故にのみ價值を有する。過剰になつた鑄貨は退藏されるか鑄潰されるかし得るが、流通手段としての金の機能を代行するが故にのみ價值を

持つ紙幣は、流通界から決して排除され得ないだらう。それは輸出されることも出来ぬ。その國の境界標がその進路を妨げてゐるから。『國家は任意の鑄貨名を有する紙幣の任意の分量をば流通に投げ込むことはできるが、國家の統制はこの機械的行爲をもつて終る。價值章標または紙幣は、ひとたび流通に把握されると、流通に内在する諸法則によつて支配されるのである。(例へば)……商品流通のために必要な金の總額は千四百萬ポンドであり、國家は一ポンドの稱呼を有する二億一千万の紙幣を流通に投ずるものとすれば、この二億一千万の紙幣は千四百萬ポンドの金の代理物に轉化せしめられるであらう』(註五四)。つまり名稱は同じポンドでありながら、今やポンドは、従前の十五分の一の金額の貨幣名にすぎなくなる。これは、價格の基本單位としての機能における金が、變更されたのに等しい。従つて、すべての商品價格は、十五倍に騰貴しなければならぬ。けだし流通過程は、それによつて、價值章標が代理せんとする金量と價值章標とを強制的に等置するのである。

(註五三) 河上譯「資本論」第一卷、二七三—四頁||長谷部譯、三六八—九頁。

(註五四) 河上・宮川譯「經濟學批判」二四〇頁||猪俣譯、一三四頁。

價值尺度としての金は、たゞ觀念的な、想像的な形態でのみ機能する。而もこの場合かゝる機能は全く、金の自然的實材に依存するのであつた。それ故にこそ銀が價值尺度となつた場合には、商品價格は全く異なつて表示されなければならなかつた。ところで、流通手段としての金は、一の現實的な

物として他の商品と對立せねばならぬ。然るにかゝる機能においての金は、その實材はどうでもよいものになり、相對的に無價值な紙券によつて代位され得る。かゝる事情がすでに、貨幣問題の理解の困難さを持ち來たすのであるが、しかも價值章標の流通においては、現實の貨幣流通の法則は顛倒して現れるが故に、一層このことは困難なものにされた。第一、『金は價值を有するが故に流通するのだが、紙幣は流通するがゆゑに價值を有する』。第二、『諸商品の交換價值が與へられてをれば、流通する金の分量はそれ自身の價值に依存するのだが、紙幣の價值は流通するその分量に依存する。(従つて)流通する金の分量は諸商品の價格の騰落するにつれて増減するのに、諸商品の價格は、流通する紙幣の分量の變動するにつれて騰落するかに見える』。第三、『商品流通はたゞ一定分量の鑄貨を吸収しうるのみであり、従つて通貨の交替的な收縮膨脹は必然的法則として現れるのに、紙幣はいくら膨脹しても流通にはいり込むかに見える』。第四、『國家は、その名目上の内容より僅かに百分の一グレインだけ少ない鑄貨を發行しても、金銀鑄貨を偽造したことになり、従つて流通手段としてのその機能を攪亂することになるのに、鑄貨名以外には何等の金屬をも有しない無價值紙幣を發行しても、全く正しいことを行つたことになる』。第五、『金鑄貨は明かにたゞ、諸商品の價值そのものが金で評價され、または價格として表示されるかぎりでのみ、諸商品の價值を代理するのであるが、價值章標は商品の價值を直接に代理するかに見える』。おまけに、紙幣は、それが法則通りに流通してゐる限りでは、その

もの特有の運動を行ふことなく、法則が破れた時に始めて、そのもの特有の運動を行ふ。言ひ換へれば正しき分量で発行されてゐる限り、紙幣は、價值章標としての紙幣に特有でない運動を行ひ、『紙幣に特有な運動は、直接に諸商品の變態からは生じないで、金に對するその正しき割合の破れたことから生じるのである』(註五五)。

(註五五) 河上・宮川譯「經濟學批判」二四三—四頁||猪俣譯、一三八頁。

第三節 貨幣

流通手段として機能する貨幣は、價格における觀念的な金を現實的な金に轉化せしめることにより、價值の尺度としての貨幣の機能を補足し、完成する。

かくして、金は、觀念的な、または觀念された存在として、價值尺度の機能を營み、それと同時にまた、身をもつて若しくはその代理者をもつて、流通手段の機能を營むことにより、貨幣となる。即ち、價值尺度及び流通手段の統一として、金は貨幣である。

價值尺度及び流通手段としての機能が、特殊商品たる金に賦與せられるのは、一の社會的な仕業であり、いはば商品界の共同事業であつた。金は、諸商品の協同事業の結果として、貨幣商品たるの地位に就かされたのであつた。然るに一度び貨幣たる地位を獲得するや、金は忽ちにして、自己をこの

「王座」に就かしめることに協力した諸商品を蔑視し、「貨幣としての貨幣」となり、またかゝるものとしての獨特の機能を營む。——例へばそれは、一の社會的機能を社會によつて負はしめられた人間が、その特殊なる機能の故に王者となり、王者となるや忽ち、爾餘の一切の人間を見下して、王者としての、特殊の役割を遂行するが如くである。

言ひ換へるならば、單なる使用價值としてのすべての商品に對し、一度び「王座」に就いた貨幣金は、交換價值の唯一の十全適當なる存在としての、價值そのもの、體化物としての機能を、展開しはじめるのである。

(一) 貨幣の蓄藏

前に述べた通り、商品の變態が、販賣と購買に、即ちW—GとG—Wの二段階に分れてゐるといふことのなかには、販賣がそれにつゞく購買によつて補充されないといふことを、商品の變態が中斷されうる、といふことが含まれてゐる。W—G—Wの過程が、W—Gにおいて中斷されるや、貨幣は、流通手段たることを止めて、貨幣となる。蓋し、流通手段—鑄貨とは、機能の定在、可動的なるもの定在にすぎず、従つて、その機能が停止せしめらるゝや、鑄貨は不動のものに、貨幣に、轉形せざるを得ないのだ。

商品流通が發展するに従つて商品とその轉形された姿、何時でも如何なる使用價值にでも轉形され得る姿において、保存しようといふ必要乃至欲望が生じて来る。それと共に購買のための販賣ではなく、販賣そのものが生産の目的になり、商品の貨幣への形態變化は、一商品が他の商品によつて置き代へられるための即ち物質代謝の媒介ではなく、それ自身が一の自己目的になる。と同時に貨幣は、流通手段として機能することを妨げられて、『化石して蓄藏貨幣となり、商品販賣者は貨幣蓄藏者となる』(註五六)。

(註五六) 河上譯「資本論」第一卷、二八一頁—長谷部譯、三七五頁。

貨幣の蓄藏は、商品流通が始まるや否や、殆んどそれと時を同じうして發展してゐる。その最も原始的な形態は、すでに自給自足經濟の時代に現はれる。この時代においては、生産物の餘剰分だけが商品に轉化されるのだが、かゝる餘剰生産物は金銀と交換され、金銀の形態において保存される。かくて、これらの金銀は、自ら餘剰又は富の社會的表現となる。

商品生産が更に發展すれば、吾々の欲望も勢ひ多邊的になり、吾々は、何時でも如何なる使用價值とでも交換され得る貨幣の蓄藏の必要に迫られる。況んや、自分自身の生産する商品の生産並びに販賣には時間を要し、且つその販賣が偶然に依存してゐるにおいては、尙更である。

貨幣を蓄藏するには、買はずして賣らなければならないが、誰も彼もが買はずして賣るだけだとすれば、結局何人も賣ることさへ出来なくなり、従つて貨幣の蓄藏は不可能であらう。とはいへ、先づ第一に、商品生産が或る程度迄發展してゐる以上、何人も絶対に、只賣るだけで買はないといふわけには行かぬ。ヨリ多く賣り、ヨリ少く買ふといふことこそが貨幣の蓄藏者のモットーでなければならぬ。が更に、すべての人間が、ヨリ多く賣り、ヨリ少く買はうとすれば、結局何人も多く賣り、少く買ふといふわけには行かない譯ではないか？ 従つて貨幣の蓄藏は行はれ得ないのではないか？ それは一見、自家撞着のやうに見える。しかしながら、貴金屬はその生産地においては、他の諸商品と直接に交換されてゐる。こゝでは、購買を伴ふことなき販賣のみがある。蓋し、金銀の所有者は、たとひ金銀を他の商品と交換するにしても、交換される金銀は、販賣の結果として商品の轉化したる形態としての金銀ではなくて、彼自身の生産物に他ならないのだから、従つて彼は、決して購買することなく、たゞ商品の所有者の側から見た場合にのみ、一の販賣が成立するのである。今や、金銀生産者と直接の交換を行った商品所有者は、一部の金銀を蓄積し、爾餘の金銀は、更にその他の購買せざる販賣者の手に分配せられ、蓄積せられる。

かくて、到るところに、大小さまざまの貨幣蓄藏が生ずるのであるが、それは更に、商品の使用價值が完全に交換價值から分離し、商品を價值として、または價值を商品金の形態において、保存する

ことが出来るやうになると共に、「唯一の現実的な商品」に對する、「交換價値の十全適當なる存在」に對する、欲望が熾烈になる。そして、商品流通の發展につれて、貨幣の權力が増大して来る。けれど商品だけでなく、あらゆるものが貨幣の前に拜跪し、貨幣のために身を捧げる。名譽、地位、それらのものさへ、賣買されるに至るからである。

だが、それと同時に、貨幣の權力は、私個人の權力でもある。

貨幣を見たゞけでは、吾々は、それが、如何なる商品、若しくはものの轉形であるかを、知り得ない。貨幣においては、一切の商品及び商品化されたものの質的差異が、消え失せてゐる。然し、他方ではまた、貨幣の方でも、極端なる平等主義者として、一切の差別を消失せしめる。何故なら、貨幣の力によつて、「地獄」も「極樂」に、黒も白に、正も不正に、不正も正になるのだから。しかし、この偉大なる權力者たる貨幣は、それ自身一個の商品に他ならず、従つて何人の私有物にでもなり得る外界の一物である。かくて、貨幣の社會的權力は、私個人の私的權力となる。

そして、この社會的權力に對する人間の欲求は無際限である。何故といふに、貨幣は、如何なる商品にでも轉形され得るものであるが故に質的に無制限であり、物材的富の一般的代理物である。然るに他方、貨幣は、量的には制限されてをり、而も諸々の人間の欲求の競争的目的物である。貨幣の量と質とにおけるこの矛盾が、人間を驅つて際限なき蓄積に向はしめる。

だが、蓄積は蓄積でそれ自身の矛盾を持つ。

貨幣は、如何なる商品にでも轉形され得るものなるが故に、蓄積された。然るに、貨幣は、如何なる商品にも轉形されないが故にのみ、蓄積せられ得る。貨幣蓄積者は、プラトニックな逸樂のみを樂んで、現實的な逸樂を回避する殉教者である。彼は、畫かれた餅を娛しむだけで、決してこれを手に取らうとしない。そして、この殉教者は、多く生産し、ヨリ少く消費すればするだけ、蓄積欲——無際限な蓄積欲——を満足させ得るのだから、彼にとつての最高の道徳は、勤勉と節儉と貪慾である。

だが、貨幣の蓄積は、蓄積者の意識するとしなないと拘らず、様々の經濟的役割を果してゐる。例へば、商品流通の範圍や速度は、絶えず變動し、且つ商品價格も變動する。従つてそれにつれて、貨幣の流通量も變動するのであるが、貨幣の蓄積は、かゝる貨幣の干渉に應じて、貨幣を吞吐する貯水池であり、若しくは調節器として役立つのだ。

(二) 支拂手段

吾々が今まで觀察した限りでは、商品を双方共所持した兩人が相對峙するか、若しくは一方には商品の所有者、他方には貨幣の所有者が、直接に相對立した。然るに、商品流通の發展と共に、商品の授受と貨幣の授受の時間的分離を不可避ならしむるが如き諸條件が生じて来る。

第一、例へば、諸商品のそれ／＼の生産に要する期間には長短がある。また或る種の商品はたゞ冬期にだけ、乃至は又夏期にだけしか生産され得ないといふ風に、季節と結びついてゐる。更に或る種の商品は生産地で直ぐに販賣されるといふのに、他の商品は遠隔の地に運んでから販賣されなければならぬ、等、等。何れにせよ、甲の商品所有者が価格を未だ實現せず、従つて購買者として登場し得ないのに、乙の商品所有者はすでに販賣者として登場し得るといふ事態が生ずる。競争が支配し、且つ販賣が偶然に依存してゐる以上、乙の商品所有者は、甲の商品所有者が価格を實現して現實に購買者として登場し得るまで待つといふわけに行きかねる。彼は、何時かは代價が支拂はれるであらうといふ見込みさへつけば、これを掛け賣りすることを拒みはしない。また、甲の商品生産者にしても、生産を規則正しくつゞけて行くために、又は自己の生活を維持するために、自己の商品の価格を實現するに先立つて、乙の商品所有者の商品を必要とする。更に商品の種類によつては、——例へば家屋の使用の如き——使用價値の實現の後でなければ、代價の支拂はれないものもある。

かくて、『一方の商品所有者は現存してゐる商品を賣るのに、他方の商品所有者は、たゞ貨幣の代理人として、または將來における貨幣の代理人として、これを買ふ』(註五七)といふ關係が生ずる。販賣者は——賣る時に猫の如くぢやれついた販賣者は、今や鬼面の債務者となり、「顧客」であつた購買者は、今や追ひ廻される債務者となる。それと同時に、貨幣も亦、新たな機能を獲得して、支拂手

段となる。

(註五七) 河上譯、「資本論」第一卷、二九三頁||長谷部譯、三八六頁。

だが吾々は先づ、賣買の契約が行はれ、商品の讓渡の行はれるその瞬間における貨幣の機能から吟味し始めよう。貨幣はそこでは先づ、『販賣商品の價格決定に關し價値尺度として機能する。契約上確定された販賣商品の價格は、購買者の債務を、すなはち彼が一定の期日に支拂はねばならぬ貨幣額を、測定する。第二に、それは觀念的な購買手段として機能する。それは貨幣を支拂ふといふ購買者の約束として存在してゐるにすぎぬけれども、それは商品の所有者を變更する働きをなす』(註五八)。

(註五八) 河上譯「資本論」第一卷、二九五頁||長谷部譯、三八八頁。

貨幣は、支拂期日が來た時に始めて、支拂手段としての機能をつくすべく、流通界に這入つて行く。——だが、支拂手段が、流通界に身を投ずるのは、それに轉形すべき貨幣がすでに流通界から去つた後のことである。貨幣はもはや過程を媒介するものではない。『それは交換價値の絶對的定在として、普遍的な商品として、獨立的に過程の結末をつけるのである』(註五九)。換言すれば、『貨幣は常に讓渡される形態における商品の定在としての流通手段に對して、すべての諸商品の讓渡されたる定在として、發展したのである』(註六〇)。

(註五九) 河上譯「資本論」第一卷、二九六頁||長谷部譯、三八八頁。

(註六〇) 河上譯「經濟學批判」二七一頁||猪俣譯、一五九頁。

單なる商品販賣者は、貨幣によつて或る種の使用價值を手に入れんがために販賣する。若しも彼が販賣し得なかつたとしても、それは單に、彼自身の欲望が満足させられなかつたといふだけのことで事済むであらう。

蓄藏者にあつては、商品を貨幣形態において保存せんがために販賣する。若し彼が販賣し得なかつたとしても、彼の蓄積慾が満足させられないだけである。

だが債務者は、支拂をなし得んがために販賣する。商品の貨幣への轉形M—のは今や、單なる商品變態の媒介過程でもなく、貨幣蓄藏におけるが如く自己目的でもなく、一の經濟的機能である。それは、今や、商品生産者達の欲望やその個人的嗜好やには關係なしに彼等に押し迫るところの『一の社會的必然』(註六一)である。

(註六一) 河上譯「資本論」第一卷、二九六頁||長谷部譯、三八八頁。

かゝる「社會的必然性」は、前に述べた通り、流通過程そのもの、諸關係から發生する。だが、商

品生産が發展して一定の高度並びに範圍に達するや、支拂手段としての貨幣の機能は、商品流通の領域外にまで及び、貨幣は、一般に、契約の目的物たる商品となる。地代、租税等の如きものが、自然物の引渡しから貨幣の支拂に轉化する。

さて、吾々は、流通過程に歸らう。

一定の期間に支拂はるべき諸債務の總額は、この債務を發生せしめた諸商品の販賣價値の總和に等しい。然しながら、支拂に要する貨幣額は、これらの諸債務の總額に一致するものではない。いくばくの貨幣額が、支拂手段として必要であるかは、先づ支拂手段の通用速度に依存する。Aは彼の債務者Bから支拂を受け、その貨幣を以て、彼のCに對する債務を支拂ふであらう、等、等。支拂手段の流通速度はすべて、『債務者債權者間の關係の連鎖と、種々なる支拂期日の間隔とによつて制約される』(註六二)。債務者債權者間の關係の連鎖が密であり、支拂期日の間隔が短縮されてゐればる程、支拂手段の流通速度の大なることは言ふまでもない。

(註六二) 河上譯「資本論」第一卷、二九六頁||長谷部譯、三九〇頁。

だが、債權者債務者間の關係の連鎖は、吾々が先に觀察した商品の變態系列のからみ合ひとは、本質的に異つてゐる。

後者は、單に販賣者と購買者の間の連絡といふばかりでなく、この連絡そのものが、流通手段の通用そのものと同時に生じ、且つそれによつて生ずるのだ。然るに、前者にあつては、債權者と債務者の間に社會的連繋があるからこそ、かゝる連繋に従つて貨幣は運動するのである。

更に、流通手段においては、同時に相並んで販賣が行はれるといふ事情は、貨幣の流通必要量が流通速度によつて代位せしめられることの限界を形成した。例へば、價格一圓の本五冊が時間的に繼起して、順次に販賣されるならば、一圓の鑄貨でもつて、五冊の本の價格五圓を實現するに十分である。しかし、五冊の本が同時に、相並んで販賣せられるならば、五圓の貨幣を必要とするだらう。

然るに、支拂手段にあつては、販賣が同時に、相並んで行はれるといふことが、支拂手段を節約せしめる槓杆になる。蓋し、諸種の支拂が集中する結果、Aに對するB、Bに對するC、Cに對するA等々の債權は、單にこれを對照させるだけで、貸方及び借方を相殺し、單に債務の殘額だけを支拂へばいいことになるからである。

かくて、流通に必要な支拂手段の量は、第一に支拂手段の流通速度によつて、第二に、債務の相殺によつて、節約せられる。

そこで吾々は、支拂手段としての貨幣の必要量及び流通手段としての貨幣の必要量、總じて、流通界に必要な貨幣量の大きさを、次の式によつて示すことが出来る。

$$\frac{\text{實現さるべき價格總額}}{\text{流通手段の流通速度}} + \frac{\text{満期の支拂金額 - 相殺金額}}{\text{支拂手段の流通速度}}$$

然し、流通手段と支拂手段とは、全く異つた貨幣片ではない。同一の貨幣片が或る時は流通手段として、或る時は支拂手段として交互に機能するのである。されば、右の式は更に次の如く改められなければならないだらう。

$$\frac{\text{實現さるべき價格總額}}{\text{流通手段の流通速度}} + \frac{\text{満期の支拂總額} - \text{相殺總額}}{\text{支拂手段の流通速度}} - \left(\frac{\text{交々流通手段になり支拂手段になる個貨の總額}}{\text{流通手段の流通速度}} \right)$$

『それゆゑに、價格や貨幣の通用速度や支拂の節約やが與へられてゐるとしても、ある時間内に、たとへば一日間に、通用する貨幣量と流通する商品量とは、もはや一致しない。通用する貨幣の中には、久しい以前に流通から引き上げられた商品の代理となつてゐるものがある。また流通する商品の中には、その等價物たる貨幣が將來になつて始めて現はるべきものもある。他方において、日々契約される諸々の支拂と、同じ日に満期になる諸々の支拂とは、決して釣合ひのとれる數量ではない』

(註六三)。

(註六三) 河上譯「資本論」第一卷、三〇四頁—長谷部譯、三九四—五頁。

貨幣は、先づ價值尺度として機能することによつて流通手段ともなり、流通手段と價值尺度の統一

として、「貨幣としての貨幣」に生成し、支拂手段となつたのであるが、貨幣が支拂手段として機能するや、そこには、「中間の媒介を缺ける一の矛盾が含まれ」る。けだし、「種々の支拂が相殺される限り、支拂手段としての貨幣は、たゞ觀念的に計算貨幣または價值尺度として機能するにすぎない。しかるに現實的に支拂を果さんとするかぎり、それは流通手段としてでなく、物質代謝のための、ほんの一次的な且つ媒介的な形態としてでなく、社會的勞働の特殊な體化物として、交換價值の獨立的な存在として、絶對的商品として出現するのである。かゝる矛盾は金融恐慌と呼ばれてゐる生産上及び商業上の恐慌の際に突發する。それは、繼起的な諸支拂の中断されざる連鎖とそれらの決濟のための人為的な組織とが、十分に發達してゐる場合にのみ起る。かゝる機構の全般的な攪亂に伴うて、それは如何なる原因から生じたにしろ、貨幣は突然に且つ中間の媒介を経ずに、計算貨幣といふ單に觀念的な姿から、現金としての貨幣に急變する。それは平凡な商品どもによつて代位されざるものとなる。商品と使用價值は無價值となり、商品の價值はそれ自身の價值形態の前に光を失ふ。好景氣に酔うて生意氣に自負してゐた市民達は、つい今まで貨幣を單なる空なる幻影だと言ひ、商品のみが貨幣だとしてゐた。ところが今や、貨幣のみが商品だといふ呼び聲が、世界市場に響き渡るのである。鹿が新鮮な水を求めて啼き叫ぶやうに、市場の魂は唯一の富たる貨幣を求めて啼き叫ぶ。恐慌においては、商品とその價值の姿たる貨幣との間の對立が、絶對的矛盾にまで高められる。だからこの場合、

貨幣の現象形態は問題とならない。金で支拂はるべきか、銀行券といふが如き信用貨幣で支拂はるべきかは貨幣飢饉に影響せぬのである』(註六四)。

(註六四) 同上 三〇一頁—長谷部譯、三九一—二頁。

そこで、支拂手段としての貨幣の發展と共に、債務支拂のための貨幣蓄積が必要になる。けだし、價值の實現は偶然に依存し、屢々債務の支拂が不能に陥ることがあるからである。

單純なる商品生産から資本主義生産に移るや、一層支拂準備金としての貨幣蓄積は増大する。何故なら——、資本主義生産においては、貨幣は利潤又は利子を生むものとされ、しかも資本家間の競争は、必然的に、出来る限りの大量生産を要請する。従つて、諸資本家は、出来る限り多くの貨幣を資本化し、出来る限り多くの利潤を獲得しようとする。されば、信用による賣買は一層大規模に行はれざるを得ないからである。

他方、資本主義生産においては、商品經濟の矛盾は社會的消費と生産との間の矛盾にまで發展し、恐慌が週期的に襲來する。單純なる商品社會における支拂不能は偶然的であつたのに對し、資本主義社會では、販賣不能、従つて支拂不能が、週期的に、一の社會的必然性をもつて襲來する。——されば支拂準備金としての貨幣蓄積は、資本主義生産においては、一層加重されざるを得ない。

單純なる商品生産社會では、一人の債務者の支拂不能は、たゞその個人の破産に終るか又はごく小範圍においてしか動搖を起させない。然るに、資本主義生産においては、債權債務の間の關係の連鎖が密であると共に、支拂決済のための組織も十分發達してゐるだけに、支拂不能の波は殆んど流通の全部面に波及する。そしてそれは、仮に見る通り更に銀行恐慌に、貨幣本位恐慌にまで發展し得る。

前に述べた通り、金の價值變動は、その價值尺度または計算貨幣としての機能に、影響するものではない。しかし、この變動は、蓄藏貨幣としての貨幣にとつては、決定的に重要となる。けだし、金の價值の増減するにつれて、金銀蓄藏貨幣の價值の大きさが増減するからである。支拂手段としての貨幣にとつては、更に一層重大となる。支拂は商品の販賣よりも後れて始めて行はれる。言ひ換へると、貨幣は、二つの異なる時に二つの異なる機能において、すなはち先づ價值の尺度としての機能において、次にはこの測定に適應する支拂手段としての機能において作用する。もしも、この二つの時期の間に貴金屬の價值、すなはちそれらの生産のために必要な労働時間が變動するならば、同一分量の金または銀は、支拂手段として現はれるときには、價值の尺度として役立つとき、すなはち契約の締結されたときよりも、ヨリ多く或はヨリ少く値するのである。かゝる場合には、金銀の如き特殊的な一商品の、貨幣即ち獨立化せる交換價值としての機能と、その價值の大きさがその生産費の變動に依存してゐる特殊な商品としてのその性質とが衝突するのである。ヨーロッパにおいて、貴金

屬の價值の減少が大社會革命を惹起したことは、周知の事實である……貴金屬の價值變動がブルジョア經濟の體制に及ぼす影響を、更らに進んで考究してみなくても、すでに次のことだけは明らかである。すなはち貴金屬の價值の減少は、債權者を犠牲にして債務者に有利な影響を及ぼし、その價值の増加は、逆に、債務者を犠牲にして債權者に有利な影響を及ぼすものである』(註六五)。

(註六五) 河上譯「經濟學批判」二八八—二八九頁||猪俣譯、一七四—一七五頁。

同じやうな事態は、債權債務の契約が貨幣の名目によつて束縛され、且つ、その期間に貨幣本位の減價が生じた場合にも起り得る。けだし、債務者が債權者に支拂ふ現實的の價值量は、金銀の價值變動なきに拘らず、ヨリ少なくなつてゐるからである。

(三) 世界貨幣

金は、第一に流通から引上げられて蓄藏貨幣となることによつて、第二に非流通手段として、支拂手段として流通に入ることによつて、貨幣として、自らを流通手段から區別した。今や最後に、金は『商品世界における一般的等價物として機能するために、國內流通の限界を突破することによつて』(註六六)、貨幣としての自らを、流通手段から區別する。金は、國民的貨幣と對立して世界貨幣となる。

(註六六) 河上譯「經濟學批判」二八九頁||猪俣譯、一七五頁。

貨幣はもとく商品生産の産物であつた。然るにそれは、國內流通にあつては、價格標準だとか、貨幣本位だとか、鑄貨だとか、諸々の國民的衣裝をつけさせられてゐる。従つて、鑄貨こそが貨幣であり、國家が貨幣をつくり出すかの如き幻想を生ぜしめる。

この幻想は、世界市場に於ては、雲散霧消してしまふ。其處では、貨幣は、一切の地方的な諸形態を脱ぎすて、地金状態に復歸する。『貨幣の諸々の計算名が、それらの適應する重量名に復び轉形される』(註六七)。言ひ換へるならば、『貨幣は世界貨幣としては、その自然發生的な第一形態を取返すのである』(註六八)。

(註六七) 河上譯「經濟學批判」二九〇頁||猪俣譯、一七五頁。

(註六八) 同上 猪俣譯、一七六頁。

金は、すべての商品がそれを價値の姿とし、すべての商品がこれに對して讓渡されるが故に、すべての諸商品の轉形せる姿容となり、従つて全面的に讓渡され得る商品、貨幣になつた。世界市場では、諸商品が、その價値を、世界的に表示するが故に、その價値の姿たる貨幣は世界貨幣となる。されば

世界貨幣として始めて貨幣は、『その自然的形態が同時に捨象的な、人間的な、労働の直接に社會的な實現形態であるところの商品として、充分な包括さで機能する。貨幣の定在の仕方は、こゝにおいては、その觀念に十全適當なものとなる』(註六九)。

(註六九) 河上譯「資本論」第一卷、三一〇頁||長谷部譯、四〇二頁。

世界貨幣は、

(一) 種々なる國民の間における物質代謝の從來の平衡が突然破れた時に、——例へば凶作のために——一國が異常な分量で物を買はなくなるや否や、又は諸國民間の物質代謝が一面的であつた時に、即ち一國は賣るのみで一國は買ふのみである場合に、國際的購買手段として機能する。最後に、金銀を生産する國々の手中においては、それは國際的購買手段となる。

(二) それは、國際貿易の差額決済のために、支拂手段として機能する。

(三) 最後に、一國から他國へ富を移轉する場合に、それが商品の形態で行はれず金銀を以てなされる時は、『富一般の絶對的に社會的な體化物』として機能する。

如何なる國でも、國內流通のために準備金を要するのであるが、同じやうに、世界市場の流通に對しても、準備金を必要とする。ところで、一國內の流通においては、金又は銀の一商品のみが價値尺

度であるのに對し、世界市場では、金及び銀が價值尺度、従つてまた世界貨幣として機能する。されば、各國は、世界市場のために、金及び銀を準備金として蓄藏しなければならぬ。商品生産の發展せる國々では、蓄藏貨幣は、その特殊な諸機能のために必要とされる最小限に制限されるものであるが、今や更にこの蓄藏貨幣に、銀行券に對する兌換準備金としての機能が追加せられるに至つて、これらの準備機能は、危険なる衝突に陥り得る。

『金銀の流れは、一の二重運動である』（註七〇）。

（註七〇） 河上譯「資本論」第一卷 三一六頁—長谷部譯、四〇八頁。

第一は、金銀がその生産地を出て、全世界市場を流轉しつゝ、諸々の國家の流通領域に、種々なる分量を沈澱せしめる運動である。金銀は先づ、その生産地において、『商品として世界流通に入り、國內流通に入る前に、等價物として、そのうちに含まれてゐる労働時間に比例して、諸々の商品等價物に對し、交換される』。かくて、金銀は、與へられた價值の大きさをもつて、國內市場に現れ、彼處において、磨滅した金銀貨を補充し、或は奢侈品の材料を供給し、或は蓄藏貨幣に凝固する。

第二は、かく沈澱せしめられた金銀が、種々なる國民の流通領域の間を絶えず去來する運動である。この不斷の去來は、爲替相場の間斷なき變動に表示され、これに隨伴する。

第四章 貨幣の資本化と資本主義生産

第一節 貨幣の資本への轉化

吾々はこれまで、特に斷らない限り、單純な商品生産社會を前提して來たが、商品流通の最後の産物は、貨幣であることを見た。この商品流通の、最後の産物であるところの貨幣は、資本の最初の現象形態である。

貨幣が、資本の最初の現象形態であつたことを知るためには、吾々は殊更に歴史を回顧する必要はない。今吾々の日常見聞するところの如何なる新しい資本も、先づ貨幣として登場する、即ち一定の過程により資本に轉形さるべき貨幣として登場する。

貨幣と、資本の現象形態としての貨幣との相違は、先づその流通形態によつて區別される。

商品流通の直接的な形態は、 $W-G-W$ であつた。然るに、吾々は、これと異つた $G-W-G$ なる形態を、即ち、貨幣から商品へ、商品から更に貨幣への複轉形、要するに販賣せんがための購買を見出す。この流通における貨幣こそは、資本に生成するものであり、『それはすでに運動の上からは資本

である』(註一)。

(註一) 河上譯「資本論」第一卷、四二七頁—長谷部譯、第二分冊、二頁。

吾々は、 $W-G-W$ と $G-W-G$ の形態差異を更に突込んで研究してみよう。

$W-G-W$ においては、即ち、購置せんがための販賣にあつては、過程の兩極をなすものは商品であり、使用價值を異にした商品である。そしてこの際貨幣は、この異つた商品の置き換へを媒介するや、永久にそこから離れ去る。人々が再び貨幣を手にするためには、新なる商品の流通過程を更新しなければならぬ。換言すれば、貨幣は支出されるのである。復歸するのは商品であり、使用價值を異にした商品である。一言を以てすれば、循環 $W-G-W$ は、物質代謝が、使用價值が、その終局目的である。

これに反し $G-W-G$ にあつては、循環は貨幣の極から出發して、最後に同じく貨幣によつて局を結ぶ。こゝでは貨幣は、支出される代りに、前拂されてゐるにすぎない。永久に循環から脱落したのは、商品であつて貨幣ではない。されば、この循環の起動動機となるものは交換價值そのものである。然るに、貨幣は、質的に區別されるところの使用價值ではない。それは専ら、量的にのみ相違し得

る。

されば、 $W-G-W$ においては、物材轉換こそがこの循環運動の内容であつたのに、言ひ換へるならば、商品の質的差異こそがこの循環運動の條件であつたのに、 $G-W-G$ にあつては、異つた貨幣額こそが、——即ち出發點におけるよりもヨリ多額の貨幣額が終局點に立つといふことこそが、この循環運動の全内容をなさなければならぬ。マルクスはこの増加額を剩餘價值と名付ける。剩餘價值を附加へる運動、自己増殖運動、それこそは、循環 $G-W-G$ の全内容であり、且つ、價值を資本に轉形するものである。

吾々は、この剩餘價值が、如何にして、何處から生ずるかを検討するに先立つて、尙 $G-W-G$ なる形態について、若干の吟味を加へねばならぬ。

$W-G-W$ にあつては、その『反覆又は更新は、この過程そのものと同じやうに、この過程の外に横たはる窮極目的——消費乃至は一定の欲望の満足——により、その限度を定められてゐる』(註二)。然るに、 $G-W-G$ にあつては、端初と終局が質的に異なるところなき同一物、即ち貨幣、交換價值だといふことによつて、一の循環運動そのものが、直ちに次の循環運動を呼起す契機になる。だがそれだけでもない。出發點と終局を區別するところのものは、量的差異にすぎないが、その量に就いてみても、この循環運動は無限のものでなければならぬ。といふのは、——

(註二) 河上譯「資本論」第一卷、四三八頁||長谷部譯、第二分冊、一一一―一二頁。

例へば、いま、出發點が百圓であり、終局が百十圓であつたとすれば、百十圓は成程百圓より十圓大きい。然し、百圓にせよ、百十圓にせよ、同じやうに制限された價值額であるにすぎない。従つて、百圓を増殖しようといふ欲求と同じやうに、百十圓を更にまた増殖しようといふ欲求が生じる。何故ならば、双方共同じやうに交換價值の制限された表現であり、従つて双方共、たゞその大きさを無限に大ならしむることによつてのみ、絶對的富としてのその質を實現せしめることが出来る。貨幣における量と質とのこの矛盾は、飽くなき増殖慾の起動原力である。だから、一循環の終末は、新たな循環の始點となる。W—G—Wにあつては、その過程は、物材代謝のために存在するにすぎなかつたのに、G—W—Gにおつては、まさに更新され反覆されるこの過程の中に目的はふくまれてゐる。資本としての貨幣の流通は、自己目的である。それ故、資本の運動は無際限である。

かゝる運動の意識的な遂行者として、貨幣所有者は資本家になる。彼の目的は使用價值ではない。利得のための休みなき運動が、彼の直接の目的である。限度を知らない致富の衝動は資本家にあつても、貨幣蓄藏者と同様である。たゞ後者は、貨幣を流通界からすくひ上げて、價值を増殖しようとするに反し、前者は、貨幣を絶えず流通界に投じつゝ、同じ目的を達する。更に後者は、貨幣をうます

女にして箱の中に押し込むのに反し、前者は、より賢明に、「解放せられたる女性」として、貨幣を増殖させるのだ。

W—G—Wにあつては、例へば、農夫が小麥を賣り、リンネルを買つたとしよう。リンネルは、農夫の手にあつては、もはや、價值物ではなく、單なる使用價值にすぎない。小麥とリンネルの置き換えを媒介したGは、もはや、そこでは何の痕跡もとゞめない。

然るに、G—W—Gにあつては、商品Wは單なる使用價值ではなく、貨幣に轉形せらるべき商品である。それは言はば、「貨幣の象徴」として存在するところの、價值物である。されば、こゝでは、『商品と貨幣との双方のものが、たゞ價值そのもの、異なる存在の仕方として、即ち貨幣はその一般的な、商品はその特殊的な、言はばたゞ變裝した、存在の仕方として機能するにすぎない』(註三)。若し吾々が、現象形態のみに着眼するならば、資本は貨幣でもあり、また商品でもある。『だが、事實上、價值はこの場合一つの過程の主體に生成するのであり、その過程において、價值は貨幣の形態と商品の形態との絶えざる轉換のもとに自己の大きさそのものを變じ、本源的價值としての自分自身から剩餘價值としての自分を生み出し、自分自身を増殖するのである』(註四)。

(註三) 河上譯「資本論」第一卷、四四五頁||長谷部譯、第二分冊、一七頁。

(註四) 同上||長谷部譯、第二分冊、一七―一八頁。

價值は、目で見ること、手に觸れることも出来ないもので、たゞ何等かの外被をまといつて現れ得るに過ぎないものだが、此の自己増殖を遂げるところの價值は、何よりも先づ、『それ自體との同一性がこれによつて確認されるところの一の獨立の形態を必要とする。しかもかゝる形態を價值はたゞ貨幣においてのみ有する。貨幣はそれ故に、あらゆる價值増殖過程の出發點と終局點とを形成する』(註五)。

(註五) 河上譯「資本論」第一卷、四四六頁、長谷部譯、第二分冊、一八頁。

然し、價值はこの場合、貨幣たるの姿を以て終始するのではない。それは、商品の姿を取ることなくしては、自己増殖を遂げ得ない。されば貨幣は、『貨幣蓄藏の場合のやうに、商品に對して論難的な態度を取り』はせぬ。『すべての商品は、いかにそれが見すばらしく見えやうとも、またいかに惡臭を放たうとも、まがふことなく貨幣であり、内心に割禮を受けたユデア人であり、加ふるに、貨幣からより多くの貨幣を作り出すための奇蹟的手段であることを、資本家は知つてゐる』(註六)。さればこそ資本家達は、商品の貨幣への轉形が、とゞこほりなく行はれる好景氣時代には、商品こそが貨幣であると自負し、自讃し、かの頑迷固陋の貨幣蓄藏者を嘲笑するのである。

(註六) 河上譯「資本論」第一卷、四四七頁、長谷部譯、第二分冊、一九頁。

ところで、簡単な流通の中では、諸商品の價值は、たかゞ貨幣といふ獨立の形態を採るにすぎなかつたが、今や、それは突如として、『一の過程的な、自動的な、實體として自らを表示し、商品と貨幣とはそれにとつて二つの單なる形態となる。なほそれに止らず、價值は商品諸關係を表示する代りに、今や言はば自身自身に對する一の私的關係にはいる』(註七)。即ち、價值は、生みの親たる價值——本源的價值——と生み出された子たる價值——剩餘價值とに自らを區別する。この際、子は親によつて生れ、親は子あるが故にのみ親となるのであるが、しかも、親によつて子が生み出されるや否や、親子の差異は消滅し、兩者は合して一體となり、新なる増殖の過程に入る。

(註七) 河上譯「資本論」第一卷、四四七頁、長谷部譯、第二分冊、一九頁。

『かくして價值は、過程的な價值、過程的な貨幣に生成し、且つかゝるものとして資本に生成する。…貨幣を生む貨幣は、資本の最初の通辯人たるマーカントイリストの口から出た資本の描寫である』(註八)。

(註八) 河上譯「資本論」第一卷、四四八頁、長谷部譯、第二分冊、二〇頁。

第二節 資本主義生産

(一) 剩餘價値の生産

貨幣は單なる貨幣としては、即ちそれ自體としては、全くのうますめであり、びた一文の子をも孕まないことは、貨幣蓄藏者の經驗に徴して明白である。

さればといつて、剩餘價値は、流通そのものから生ずるのでもない。市場に現れる資本家達は、何等か特別の資格で現れるのではなく、單なる購買者及び販賣者として現れる。購買者としての彼等がもし他人の商品を價値以下で購買するとすれば、販賣者としての彼等は自己の商品を價値以下で賣ることにならう。反對に販賣者としての彼等がもし自己の商品を價値以上で賣るとすれば、購買者としての彼等は他人の商品を價値以上で購買することになるだらう。また、たとひ彼等の或る者が、價値以下で購買し、價値以上で販賣し得たとしても、彼等の利得したものは他の資本家達の損失したものに過ぎない。資本家階級全體として流通價値の總額には變化はない。『一國の資本家階級の總體は自分自身を瞞着して利益を得ることは出来ないのだ』(註九)。

(註九) 河上譯「資本論」第一卷、四六六頁||長谷部譯、第二分冊、三七頁。

では、商品はどうか? これも、それ自體としては、何ものをも生産しない。もつとも、問題の價値増殖が、商品の使用價値から、即ち商品の使用から發生するといふ可能性はある。そしてそれが唯一の殘された可能性である。だが、吾々が今まで取扱つた限りでの諸々の商品種類には、さうした玄妙な働きをするものは皆無であつた。

然るに、祝福された資本家達は、『その使用價値がそれ自身に價値の源泉であるといふ獨特の性質を有するところの或る商品、すなはちその現實の使用がそれ自身に労働の對象化であり、従つて價値の創造であるところの或る商品を、流通領域の内部で、市場において、發見』(註一〇)する。それは労働能力、または労働力である。

(註一〇) 河上譯「資本論」第一卷、四七六頁||長谷部譯、第二分冊、四六頁。

労働力とは、人間の肉體のうち存在するところの、そして人間が何等かの使用價値を生産するに就いて必らず發動せしめねばならぬところの、肉體的及び精神的諸能力の總體である。

労働力が市場に賣りに出されるためには、その労働力の所有者たる當人が、自己の労働力を勝手に

處分し得るといふことが前提条件になる。また彼が労働力を市場に賣るに就いては、『労働力の所有者が彼の労働を物に對象化してそれを商品として賣ることが出来ず、却つて彼の生身の内にでなければ存在しえない彼の労働力そのものを商品として賣りに出さねばならぬ』(註一一)といふ條件が充たされてゐなければならぬ。

然し、一方の側には貨幣又は商品の所有者が、他方の側には、自己の労働力をしか持ち合はさない者が、相對立するといふのは、決して、自然史的な關係でなく、歴史的発展の産物である。この様な歴史的発展が如何にして達成されたかは、吾々の當面の問題ではない。吾々は、たゞ與へられた前提を承認するだけに止めよう。

さて、労働力の使用價值は、價值の創造にある。然し労働力が商品となつた以上、使用價值と共に、價值を持たなければならぬ。労働力の價值は如何にして規定されるか？

労働力の價值も亦、あらゆる他の商品と同じやうに、その生産に、従つてまたその再生産に必要な労働時間によつて規定される。『個人の存在が與へられてをれば、労働力の生産は、彼自身の再生産または維持から成り立つ。生ける個人は彼の維持のため一定額の生活資料を要する。だから労働力の生産に必要な労働時間は、かゝる生活資料の生産に必要な労働時間に歸着する。換言すれば、労働力の價值はその所有者の維持のために必要な生活資料の價值である』(註一一)。個人の維持のために幾何

の生活資料が必要であるかは、文化の發展段階、其他諸々の條件により異なりはするが、一定の時所においては、それは歴史的に與へられてゐる。

(註一一) 同上 五〇〇頁||長谷部譯、第二分冊、五三頁。

さて、資本家は、かゝる價值において、労働力を購買し、そしてこれを使用する。だが、労働力の使用とは、労働そのものに外ならぬ。が、人間の労働は、第一に合目的な活動であり、第二に労働が働きかけるところの對象を要し、第三に労働がそれを通して働くところの労働手段を必要とする。労働過程とは、人間が、労働手段を以て、労働對象に、合目的に働きかける過程である。労働對象と労働手段とは、生産手段を形成する。それ故に、資本家達は、労働力を購買すると同時にまた、労働手段、労働對象をも購買する。これらのものなしには、元來無一物の労働者を労働せしめることは出来ず、従つて彼等の購買した商品——労働力——を消費することも出来ないだらう。

彼等は、今や、商品||労働力の使用、又は消費に着手する。即ちその労働力の所持者たる労働者を、その労働により生産手段を消費せしめる。かく消費せしめることが彼の又消費なのだ。

かやうに、労働過程は、今や資本家による労働力の消費過程に轉化するが、そのことによつて、二つの新たな特徴を得る。

第一、労働者は、獨立したものととしてでなく、資本家の管理の下に労働する。

第二、生産物は直接生産者たる労働者の所有に歸せず、労働管理者たる資本家の手に歸する。生産物は、資本家の所有に屬するが、しかし彼は、自らこれを使用するために生産するのではない。商品生産においては、使用價值は總じて、交換價值の擔ひ手である限りにおいてのみ、生産されるのだが、資本家は、自己の出資したところの生産手段を労働力の價值總額よりも、ヨリ大なる價值を有する商品を生産しようとする。

ところで、如何なる商品の價值も、それを生産するために社會的に必要な労働時間によつて規定される。このことは、資本家の手に入つた新なる生産物にも、妥當する。

彼の生産物が米だとすれば、彼は原料たる棉花、労働手段たる紡錘機等々をも買ひ込んでゐる。が、それらのものゝ價格は、その生産に要した労働の貨幣表現にすぎないから、前に彼の手にあつた貨幣形態における價值は、今や、棉花等々の商品形態に轉形してゐるのだ。

これらの商品は、労働過程において 米といふ新たな他の商品形態を獲得する。しかし、單にそのことだけのために、價值が殖えたり、減つたりするわけではない。けだし、この場合、『棉花の生産に必要とされる労働時間は、棉花をその原料とするところの、米の生産に必要とされる労働時間の一部分であり、従つてそれは米の中に含まれ』（註一二）るからである。——紡錘機にあつては、その磨滅分

の價值が、糸の中に、包含されることになる。

（註一二） 河上譯「資本論」第一卷、五二四頁—長谷部譯、第二分冊、八八頁。

が、生産手段の價值が、生産物の價值の構成部分となるについては、二つの條件が充たされねばならぬ。第一、生産手段は、合目的に——或は使用價值の生産のために役立つてゐなければならぬ。第二、與へられた社會的諸條件の下に必要な労働時間だけが——換言すれば生産手段に對象化された労働時間の必要部分だけが使用されてゐなければならぬ。生産手段の浪費は價值構成に與らない。

それでは、資本家が市場で購買した他の一商品——労働力——の問題はどうか？ 労働力は生身の人間に内在するものだから、これを糸に轉形するといふわけには行かぬ。労働力の使用價值は、價值を創造するところにある。そこで資本家は、労働力を、異なる商品形態に轉形させる代りに、労働力の使用によつて、先づ第一に先に前拂した労働力の價格を、補償しなくてはならぬ。

例へば、労働力の價格が、四時間労働—二圓に値したとしよう。労働者を四時間働かせれば、資本家は丁度前拂價值を回収したことになる。然し、それでは資本家は何ものをも得るところはない。何故なら、生産手段に前貸した價值部分は、單に回収されただけだといふのでは、そこに何ものも附加されてゐないことになる。

だが、労働力が幾千に値するかといふことは、労働力が幾千の価値を創造するかといふことは、全く異つた別箇の問題である。しかも労働力は、今や、資本家に購買された商品にすぎない。資本家としての彼は、労働時間を四時間に限らなければならない理由を、何處にも見出せぬ。彼は労働時間を八時間に延長することが出来る。延長された四時間労働は、生産された商品の形態において、當然彼のもうけに屬すだらう。かくて、資本家は、今や、何等「不當の行爲」をなすことなくして、剰餘価値を實現し得ることになる。あとはたゞ、剰餘価値を含む生産物をその価値通りに賣出して、貨幣の形態でそれを實現し回収すればよい。

それ故に、『價值形成過程を、價值増殖過程すなはち剰餘価値の形成過程と、比較してみるならば、價值増殖過程なるものは、一定の點を超えて延長されたる價值形成過程以外の何物でもない』(註一三)。

(註一三) 河上譯「資本論」第一卷、五四二頁||長谷部譯、第二分冊、一〇三頁。

で、更に、この價值形成過程を労働過程と比較するならば、後者が専ら、使用価値を形成するところの具體的・有用的なる労働から成立つており、従つてこゝでは運動が質的にその特殊な仕方、目的、内容について觀察されるのに對し、前者にあつては、同じ労働過程は、量的にのみ表示される。『この場合には、労働がその作業のために費す時間、すなはち労働力の支出される繼續時間が、問題

とされるばかりである。生産手段はこゝでは労働を吸収するための單なる手段として作用し、それ自体それに體化されてゐる労働量を表はしてゐるにすぎぬ』(註一四)。

(註一四) 河上譯「資本論」第一卷、五四二頁||長谷部譯、第二分冊、一〇四頁。

かくて、商品の分析によつて吾々が得た、使用価値を創造する限りでの労働と、価値を創造する限りでの労働の差異は、こゝでは今や、生産過程の異なる方面の區別として現れる。

『労働過程と價值形成過程との統一としては、生産過程は商品の生産過程である。労働過程と價值増殖過程との統一としては、それは資本家的生産過程であり、商品生産の資本家的形態である』(註一五)。

(註一五) 河上譯「資本論」第一卷、五四六頁||長谷部譯、第二分冊、一〇八頁。

だが、生産過程のこの二つの對立する契機——労働過程と價值形成過程——は、商品において、使用価値及び価値の對立として現れるばかりではない。その労働の二重性は、更に、生産物の價值構成要素の上にも表示されてゐる。

吾々はすでに、消耗された生産手段の價值が、生産物のうちに、その構成部分として移轉され、保存されることを知つてゐる。

労働者が労働するとき、一度は棉花の価値を糸に移すために、一度は、新なる價值創造のためにと、

二重に労働するのではない。彼が、棉糸の価値を糸に移すのは、彼の活動の合目的性のお蔭に他ならぬ。換言すれば彼の労働の特殊な有用的な性質のためであり、その特殊な生産的な形態のためである。それに反し、彼が価値を創造した限りでは彼の労働は、單なる労働一般にすぎない。

『だから人間の労働力の支出としての、その抽象的な一般的な性質においては、紡績工の労働は棉花と紡錘の価値に新たな価値を附加し、紡績過程としての、その具體的な、特殊な、有用的な性質においては、それは、かゝる生産手段の価値を生産物の上に移轉せしめ、かくてそれらのものゝ価値を生産物のうちに保存するのである。同一の時点内における労働の結果の二面性はかくして生じる』(註一六)。

(註一六) 河上譯「資本論」第一卷、五五四頁—長谷部譯、第二分冊、一一五頁。

吾々は、生産過程の中で、單に価値が移され、保存されるだけで、何等その価値の大きさを變動せしむることなき商品——即ち生産手段に轉形する資本部分を、不變資本と名づける。

これに反し、労働力に轉形する資本部分は、生産過程の中でその価値を變ずる。それは、それ自身の価値に等しいものと、それ以上の超過分とを、再生産する。だから、吾々は、これを可變資本と名づける。

更に、この可變資本を補填するに足るだけの労働時間若しくはその内容をなす労働——これを吾々は必要労働時間若しくは必要労働と名づける。そして、それ以上に出づる超過労働時間若しくは超過労働を、剩餘労働時間又は剩餘労働と呼ぶ。この二種の労働時間の割合——比率——こそが、資本による労働力の搾取程度の正確な表現であり、剩餘價值率と名づけられるものである。剩餘價值率は、又、剩餘價值の可變資本に對する比としても現はすことが出来る。即ち、

$$\frac{\text{剩餘労働}}{\text{必要労働}} = \frac{\text{剩餘價值}}{\text{可變資本}} = \text{剩餘價值率}$$

けだし、兩者は、一方に對象化された労働の形態で、他方は流動的な労働の形態でと、同一の關係を、異つた形態で表現するにすぎないのだ。

(二) 利潤及び利潤率

資本またはその代辯者たる資本家にとつては、いくばくの資本価値が、いくばくの価値を増殖するかといふことのみが問題であつて、その増殖される価値が、何處から生ずるかは何等問題でない(また問題にしない方が得策だ！)。

更に、「剩餘價值を造り出すのは、資本の可變部分のみであるとはいへ、この可變部分は、資本の他

の部分たる労働上の生産諸条件も亦同様に前貸されるといふ条件の下にのみ剰剰価値を作り出すのである』(註一七)。かやうに、不變資本も可變資本も、價值を創出するためには不可缺の要素であるところから、資本家達にとつてはます／＼價值増殖の源泉と條件とが無差別に混淆されることになる。

(註一七) 高島譯「資本論」第三卷上、一八頁。

更にまた、不變資本も可變資本も、價值増殖のための不可缺の要素である以上、可變資本の産兒たる剰剰価値は、むしろ、前貸總資本の産兒として現れる。

かくて、『剰剰価値は、前貸總資本のかゝる觀念的産兒として見るとき、利潤といふ轉化された形態を受ける』(註一八)。剰剰価値が、前貸總資本の所産として現れるとき、それは利潤である。

(註一八) 高島譯「資本論」第三卷上、一三頁。

そこで、彼等が前貸した資本價值即ち消費せられた生産手段と労働力の價值を代置する商品の價值部分を費用價格と名づけるならば、この費用價格は、資本家にとつての販賣價格の最低限界である。

利潤の前貸總資本に對する比率は利潤率である。だから、利潤率とは、『剰剰価値を一の異つた仕方で計算したところのもの、換言すれば労働力と交換されることによつて直接に剰剰価値を生ぜしむる

資本部分の價值に對してではなく、むしろ總資本の價值に對して剰剰価値を計算したところのものを、言ひ現はすにすぎぬ』(註一九)。

(註一九) 高島譯「資本論」第三卷上、二三頁。

だが、前貸總資本が、可變資本と不變資本の和から成るとすれば、剰剰価値率は同じでも、不變資本の大小によつて、利潤率は、大きくも小さくもなる。

可變資本と不變資本の組合は、各種の生産部門の技術的必要に基づいてる。

第一表 (Cは不變資本、Vは可變資本)

資本	剰剰価値率	剰剰価値	利潤率	消費された生産手段	商品價值	費用價格
I 80. + 20.	100%	20	20%	50	90	70
II 70. + 30.	100	30	30	51	117	81
III 60. + 40.	100	40	40	51	131	91
IV 85. + 15.	100	15	15	40	70	55
V 95. + 5.	100	5	5	10	20	15

各種の資本の剰剰価値率は同じであつても、資本の構成が異なるに従つて、利潤率は右表に見る通り異つて来る。即ち低度構成のものほど、利潤率は高く、高度構成のものほど低く。

資本の要求するところは、利潤であり、出来るだけ多くの利潤である。二萬圓の資本を投じて一萬圓の利益が上る企業であるのに、六萬圓の資本を投じて一萬圓の利益しかあげられないとすれば、資本家達は競つてこの産業部門から資本を引上げて、前者の産業部門に資本を投ずるだらう。かくて、利潤の高い方の産業部門からの商品供給が増大し、低い方からのそれは減少する。それにつれて商品価格は、或は騰貴し、或は低落する。資本の移動と商品価格の變動は、利潤率が等しくなるまでつゞけられるだらう。利潤率は、一般利潤率に平均化して行く。一般利潤率とは、社會的總資本を以て、總剩餘價值を除いたものである。

第二表

資本	剩餘價值	消費せられた生産手段	費用價格	商品價值	平均利潤率	生産價格
I 80c + 20c	20	50	70	90	22%	92
II 70c + 30c	30	51	81	111	"	103
III 60c + 40c	40	51	91	131	"	113
IV 85c + 15c	15	40	55	70	"	77
V 95c + 15c	5	10	15	20	"	27

その結果は、第二表におけるが如く、I、IIの商品は價值以上の價格で賣られ、III、IV等の商品は價值以下の價格で賣られる。かゝる價格を、吾々は生産價格と呼ぶ。生産價格は、費用價格に平均利

潤を加へたものに等しく。

かくして、今や、商品の『價值の一部として費用價格が分離され、他方には、この價值の轉化された一形態として、商品の生産價格なるものが自己を展開』する。生産價格は價值法則の一層具體化された表現に外ならぬ。

商品が今や價值通りでなく、生産價格で賣られるにしても、吾々は、次の事實に注意する必要がある。即ち、個々の商品又は個々の産業部門においては、商品價格の價值からの背離があるにも拘らず、總生産物價值は、生産價格の總和に一致する。そして生産價格は、費用價格プラス平均利潤だし、生産物價值は、費用價格プラス剩餘價值であるから、平均利潤の總和は剩餘價值の總和に一致する。生産價格は、要するに、資本家間の剩餘價值の分配を變更するに過ぎぬ。

(三) 資本主義生産の歴史的傾向

ヨリ多くの利潤を獲得しようとする資本家達の競争が、平均利潤を成立せしめることは、すでに吾々の見たところである。

だが、資本家達は、もちろんたゞ剩餘價值の分配を争ふだけではない。彼等は進んで、剩餘價值率を高め、剩餘價值そのものを多くしようと努力する。分け前の争ひは、資本家相互間の尖鋭な競争に

他ならないし、剰餘價值率を高めんとする資本家の努力は、搾取を強化せんとする労働者との闘争である。

剰餘價值率は、(一)労働力の価格を引下げることによつて、(二)労働時間を延長することによつて、高められる。

だが、労働者も人間である以上、むやみに搾取率を高めるわけに行かぬ。何故なら、それは労働者達の生命に關するから。しかし、さうした願慮は、資本家全體にとつて意義あるだけで、個々の資本家の關するところではない。そこで、資本家階級全體を代表する者として國家はこれに干渉し、労働立法なるものを設けて、労働者の酷使を制限しようとする。

資本家は、更に、搾取率を強めるばかりでなく、生産そのものを擴大して、出来るだけ多くの剰餘價值を手に入れようとする。蓋し剰餘價值率は同じでも、資本の大きさに比例して利潤又は剰餘價值の總量は、大きくなるからである。

だが、生産された商品は賣られねばならぬ。でなければ、利潤は實現されない。そこで、資本家間の市場争奪戦が起らずにはゐない。先に、剰餘價值率の高い産業部内への投資競争をした資本家達が、こゝではまた猛烈な市場獲得闘争を始めることになる。

然し、競争は、單に、彼等の欲望からのみ生ずるのではない。それは吾々がG—M—Dの形態を觀

察した時すでに見た通り、彼等に否應なしに押しつけられる自然法則でもある。言ひ換へれば、それは、自己目的としての資本の價值増殖が強制する。おまけに、若し、彼が競争に参加することなく、獨り行ひすましてゐたならば、彼は直ちに他の資本家に叩きつけられる。この自然法則は、資本家にとつて恐ろしい自然法則である。何故といつて、競争は資本家をのつびきならぬ板挟みにする。市場を取り、生産擴張をするか、それとも敗退して没落するか――。

資本家は、搾取によつて剰餘價值を獲得するが、しかしその全部を個人的に消費するわけに行かぬ。剰餘價值の一部分は、生産擴張のために用ひられなければならない。剰餘價值の一部は、資本に轉化され、追加資本が形成される。――吾々は、これを資本の蓄積と呼ぶ。

資本家は、生産擴張のための、生産擴張をしなければならぬ。それに必要な追加資本は、剰餘價值から生ずる。従つて、擴張熱が高ければ高いほど剰餘價值を大きくしなければならぬ。しかしまた、剰餘價值を大きくするのは、ますます生産擴張をしなければならぬ。――かくて、生産は際限もなく擴張される。――それは、一の無際限の運動であり、資本家に對しての至上命令である。

然し、生産が無際限に擴張され、ばされる程、市場獲得の競争ははげしくなる。

市場獲得で勝利し得る武器は、何よりも安い價格である。安い價格で賣り得るためには、何よりも先づ販賣價格の最低限度をなしてゐる費用價格を引下げねばならぬ。彼は、そのために、(一)先づ

労働力の價格——即ち勞銀——を引下げなければならぬ。(二)そしてまた、生産擴張もしなければならぬ。何故ならば、生産が大規模に行はれること、即ち大量生産は、それによつて商品一箇當りの費用價格引下げの手段となる。(三)が、更にまた労働の生産性を増大させねばならぬ。例へば、新式の機械を採用した資本家が、彼の商品の費用價格を四圓から三圓に切下げ得たとすれば、彼は平均利潤をあげつゝも尙且つ他の資本家より安い價格で彼の商品を販賣し、それによつて市場の分け前を増大し得るだらう。

だが、彼が新しい機械を採用したといふことは、生きた労働力を、死んだ労働力によつて置き換へたといふことを意味する。だから、彼の總資本は増大し、それと共に、可變資本も絶對的には増大したにしても、それは今や不變資本に比しては相對的に減少する。言ひ換へれば、彼の資本の構成は高度化する。

ところで、新式機械の使用は彼のみの特權ではない。他の同業資本家達もやがて新式機械を採用する。さうなれば、彼はもはや超過利潤にはありつけぬ。何故といつて、労働の生産性の増大と共に、その商品の生産にとつて社會的に必要な労働時間も減少し、従つて價格は低落するであらうから。

問題の商品は今や一般に新たなるヨリ低い生産價格で賣られるとすれば、資本の有機的構成が高まつたゞけそれだけ、利潤率は低下する。前よりも多量に生産された商品が、その生産價格で全部市場

に吸収されたとしても、利潤の總額は増大するにせよ、その増大は總資本の増大には及ばない。

だが同じ事情は、他の産業部門にも起る。かくして、一般利潤率乃至は平均利潤は低下する。資本の蓄積が進行し、資本主義が發展すればするほど、労働力に對する需要は相對的に減退し、利潤率は低下する。これは、資本主義社會の自然法則である。

最後に、資本の蓄積——剩餘價値の資本への轉化——は、それが個々の個別的資本の蓄積に表現される限り、その資本の集積である。資本の集積は、労働者階級と資本家階級との間の生産諸關係を、

——前者に對する後者の支配の増大を、直接的に表現する。
資本の集積は、同時に、集中を伴ふ。けだし、利潤率の低下、競争の激化と共に、弱い企業、弱い資本家は没落するからである。集中とは、企業の數が減少し、少數者の手に生産手段が集中されることである。いはゞそれは、資本家同志の尖鋭な競争の表現であり、結果である。

集積は集中のための契機であるし、集中は又集積の強力な槓杆である。そしてこの事情は、信用制度の發展によつてますます強められてくる。信用は『……最初は蓄積の謙遜な助手として忍び込んで來るが、やがて恐るべき武器となり……(中略)……終には資本集中のための尨大な社會的機構に轉化される』(註110)。

(註110) 高島譯「資本論」第一卷、六一六頁、長谷部譯、第四分冊、一三一。頁

集積及び集中が一定の段階に達した時に、資本主義は、獨占資本主義の段階に入る。と同時に、生産の社會的性質と所有の私的性質は、極度に尖鋭化した矛盾を暴露する。

(四) 恐慌と景氣循環

資本主義的生産様式にあつては、生産は社會的であるのに所有は私的であるといふ基本的矛盾に基づいて、次の矛盾が生じてくる。即ち、一方では労働者大衆の消費は最低限度に制限され、他方では無制限な生産擴張のための生産擴張がなされるといふ矛盾。そしてこの矛盾こそ、恐慌の根本原因である。

資本主義生産は諸多の點において社會的である。第一、それは終局的には社會的消費（可變資本プラス剩餘價値の消費基金部分）を目標として大量的に商品を生産する。第二、諸産業部門は相互依存的な關係にある。第三、労働そのものが社會化されてゐる。第四、企業の内部が社會化されてゐる。しかるに、かゝる生産の結果たる労働生産物は、少數資本家の所有に歸する。そして彼等は儲けんがために生産し、價値を實現せんがために賣らなければならぬ。この矛盾は徐々に擴大され、一定の緊張に達するや爆發する。この爆發が一般的恐慌として現はれる。

恐慌のなかにとらへられた資本家達は、もはや、贅澤品を買ふことはおろか、資本の再生産さへ覺束なくなる。といふのは、どの資本家も買ふためには賣らねばならぬといふのに、誰れもが買へないから賣ることが出来ぬ。生産物交換が販賣と購買とに分裂したことによつて與へられた恐慌の可能性は、今やかうした形態で現實化する。

恐慌の襲來は周期的である。これを説明するものは、資本蓄積の特殊性であり、わけでもそれにおける固定資本の更新である。

諸々の資本家企業の固定資本の更新は、種々なる事情によつて一定の時期に集中される。競争の中にとらへられた資本家達は、言ひ合したやうに、商品價格が低廉で利子率の最も低い恐慌後の沈滞期に固定資本を更新せんとする。そこで、先づ、生産手段を生産する部門の營業が活氣を帯び、それが順次に他の生産部門にも波及する。それは發展してやがて好景氣局面を現出する。信用は極度まで擴張され、それによつて生産は、階級對立のために制限された少量の狹隘な基礎をはるかに超えて擴張される。

かくて、相對的な過剰生産はすでにそこにあり、たゞ信用や投機によつて蔽ひかくされてゐる。が、好景氣が頂點に達する頃から金利は次第に高くなり、銀行は怪し氣な手形を警戒しつゝ財布のひもをしめる。取引所にガラがくる。恐慌が現實化する。

過剰なる資本價值の破壊（商品價格の暴落、生産手段の廢棄、大量的破産、等々）が行はれ、諸商品の價格は社會的消費と一致する點にまで、強制的に引下げられる。そこで、恐慌の進行は停止して、沈滞—不景氣時代に入る。そこでまたもや前と同様な循環が開始される。恐慌は、資本主義生産の動きの取れなくなつた矛盾を一時的に解決し、その新たな運動開始を可能ならしめる。

だが、もはや以前と同一のことが以前と同一の規模で同じやうに繰返されるのではない。恐慌期には、弱小資本の大量的な破綻につれて、資本のはげしい集中が行はれる。それと並んで、猛烈な費用價格の引下げが行はれる。原料品が、勞賃が下る。資本の蓄積の進行と共に、資本の集積が、強行される。

新しい循環の段階は、それ／＼、——ヨリ一歩づゝ獨占化された資本主義の段階である。従つて矛盾は、一層尖鋭化し、恐慌は一段階毎にはげしくなる。恐慌期はますます／＼長く、好景氣は、ますます／＼短期間になる。そして、好景氣においてさへ、生産能力の一部は利用され得ない段階に到達する。

第五章 信用制度

第一節 信用制度の發展

(一) 商業信用

單純なる商品流通においてすでに貨幣が支拂手段としての機能をつくすやうになり、債權者・債務者の關係が生ずるやうになる事情については、すでに述べてある。この商品の信用賣り又は商業信用こそは、あらゆる信用の原形的形態であり、且つその基礎である。

商業信用において、AがBに對し信用を與へるについては、Aは、Bの商品が市場で販賣され、價格を實現し得るであらうこと、従つてまたBは得たる貨幣をもつてAに支拂をなし得るであらうことを豫想してゐる。換言すれば、Bの商品が、その社會的性質を實現し得るであらうことを豫想してゐる。そして、それを實現し得るといふことは、ひとへに生産の社會的性質に基づくものである。されば、商品自體の、従つてまた生産の、社會的性質に對する信頼こそは、信用の本質である。

商業信用が、産業資本家同志の間で與へられるとすれば、それは、一の段階から他の段階への資本

の移轉を、即ち相互に依存し接合された生産諸部面の關聯を、媒介するものである。また、商人たちの間でそれが與へられたとすれば、それは一方の人の手から他方の人の手への商品の輸送及び移轉を媒介し、商品をして、終局的に販賣されるかまたは他商品と交換されるに至らしめる。そして、後者の場合と雖も、商品が、再生産過程の一段階たる流通過程の内部にあることは言ふまでもない。

されば、この場合に貸附けられるものは、後に述べるやうな遊休資本ではなく、むしろ所有者の手の中で形態變化しなければならぬ資本、貨幣に轉化されることを要する資本である。そしてこの信用によつて媒介されるものは、商品の轉形である。だが、M—Cの媒介は同時にC—Mの媒介であり、現實的生產過程も、信用によつて媒介されることになる。蓋し、信用賣りされた商品が、生産手段として、生産過程の中に、持ち込まれるからである。かくて、商業信用は、再生産過程の矛盾する契機、生産と流通の對立を、運動し得る形態に移すものに外ならぬ。

この信用の限界は、先づ第一に、回流そのものによつて與へられる。商人達が考慮に入る限り、商品の販賣が時間的に遲滯するといふこともあり、商品價格が低落するといふこともあり、また市場の流通が停滯して商品が一時賣れなくなるといふこともある。更に信用を受けた者が産業資本家であるとすれば、彼自身の商品が同じ様な運動に陥つて資本の回流が遲滯し、彼自身の支拂が不能となり得る。だが、總じてかくの如き事態は、商品や生産社會における日常茶飯事であるが故に、諸商人、産業

經營者達は、それ〴〵支拂準備金を用意してゐる。そこで、第二には、この信用の限界は、信用を受ける人達の、回流が遲滯した場合に利用し得る準備金の大きさによつて與へられる。

ところで、再生産過程が流動的であり、従つて資本の回流が確實性を持つてゐる限り、この信用は維持せられるのみならず、また伸張される。けだし、この信用自體の媒介によつて、再生産過程は緊張せしめられ、この緊張は更に、労働者・資本家達の個人的消費並びに生産的消費を——相對的には減少させるが——絶對的には増大せしめることにより、再生産過程それ自體の我武者羅な擴大を惹起し、そしてそれと同時にまたこの信用の基礎も擴大されるからである。

けれども我武者羅に擴大された再生産過程が、消費の限界そのものと衝突するや、回流は遲滯し、商品は市場にあふれ、價格は急速度に下落する。それと共に、再生産過程それ自體が縮小する。膨脹した消費も、それにつれて、急速度に減退する。

かくて、この信用も、第一、再生産過程それ自體の縮小によつて、第二、商品が轉形を遂げ得ずして再生産の一段階に停滯してゐるといふことによつて、第三、再生産過程の流動性に對する信頼が動搖することによつて、急角度に收縮せざるを得ないのだ。

(二) 資本の貸附

資本の成立及び發展につれ、商業信用とならんで、それと性質を異にする信用の一形態が發展する。

これにあつては、商業信用の場合の如く商品が譲渡されて貨幣の支拂が猶餘されるのではなく、貨幣それ自身が授受せられ、しかも一の資本として授受される。かゝる資本は、貸附資本又は利附資本であり、乃至は單に貨幣資本である。

貨幣自體を貸附けることは、古くから高利貸業者によつてなされてゐた。高利貸附業の特殊の地盤たるものは、支拂手段としての貨幣機能であり、その存在は、小生産者や自營農民や小親方等の支配的存在に照應するものであつた。

貨幣は、資本主義生産の基礎の上においては、資本に轉化され得る。『換言すれば、労働者たちから或る一定の不拂労働を、餘剰生産物及び剩餘價值を引出して占有する能力を資本家に附與する。かくして貨幣は、それが貨幣として持つ使用價值以外に、尙、一の追加使用價值を、即ち資本として機能するといふ使用價值を與へられる。……可能的の資本たり利潤生産上の手段たるかくの如き資格において、貨幣は商品——だが一、特別な商品——となる。又は、畢竟同じことだが、資本は資本として商品となる』(註一)。

(註一) 高島譯「資本論」第三卷上、二九七頁。

自己の貨幣を利附資本として利用せんとする者は、これを資本として商品たらしめる。それは彼自身にとつてのみ資本たるばかりでなく、また他人にとつても資本である。それは譲渡する人にとつて資本たるばかりでなく、利潤を造り出すといふ使用價值をもつたところの價值として、資本として、他人に譲渡されるのだ。

それ故にこの使用價值は、他の商品が使用價值を實現するや否やその實體を消滅させるのと異り、使用價值の消費によつて自己の價值及び使用價值を單に保存するのみでなく、また増殖する。

貸附資本家は、何等の等價を受はることなしに、その資本を、或はむしろ資本商品を手離し、これを産業資本家又は商業資本家に譲渡する。然し、彼が、資本を手離すのは、現實的な循環過程上の行為ではなく、むしろ、循環行程を手引きするだけのものにすぎぬ。そこに對立するのは、いはば、所有資本家と、機能資本家である。だからこの譲渡は、一列の經濟過程の出發點としては現はれず、特殊な法律的契約として、貸附けとして現はれる。

今や機能資本家は、これを現實的に資本として機能せしめることによつて利潤を得る。復歸したところの資本は、現實的な循環過程をそれで完了する。だが、彼は、一の附録的行爲としてこれを貸附資本家に復歸させねばならぬ。この第二の法律的取引は、返濟と呼ばれる。かくして、『貸附資本の起

點と復歸點、貸出と返還とは、資本の現實的運動の前後に行はれてこの運動それ自身とは關係するところのない、法律上の諸取引によつて媒介される專擅的な諸運動として現れる』(註二)。

(註二) 高島譯「資本論」第三卷上、三〇七頁。

従つて、貸附資本が、資本としてなす現實的運動は、即ちこの取引自體を媒介した諸循環は、貸手對借手の間に行はれる諸取引の外部に横たはるものとして、見失はれてしまふ。

だが、資本の貸附といふ形態をとる信用もまた、その本質においては、生産の社會的性質に對する信頼に外ならぬ。何故といふに、――

『資本として前貸された貨幣は、その前貸者たる人の手に、それを資本として支出した人の手に、復歸するといふ特性をもつものであり、 $G-W-G$ は資本運動の内在的形態なのであるが、正にこの理由によつて、貨幣所有者は貨幣を資本として、即ちその起點に復歸するといふ自己のなす運動において己れ自身を價值として保存し増殖するといふ性質を有するものとして、貸附け得る。貨幣は、資本として利用された後その起點に回流するものであるから、即ち或る一定期間の經過後、借主自身の手に戻して來るが故に彼によつて返濟され得るものであるから、それだから所有者はこれを資本として手離すのである』(註二)。即ち、かく貨幣が回流するといふことは、『それが機能資本家の手にお

いて商品資本に轉形せしめられ、その商品資本が商品としての自己の社會的性質を實現して再び貨幣形態に變形し得ることに基づいてゐる。

(註二) 同上 第三卷上、三〇八頁。

ところで、借主が返還に際して添附するところの利子なるものは、資本として機能するといふ貨幣の使用價值に對して支拂はれる代償である。言ひ換へれば、利子とは、可能的な資本を現實的な資本として機能せしめた人が、自分の懐に收むべき利潤の一部を割いて資本の所有者たる人に支拂ふところの利潤部分を示す一の特種名稱、一の特種標號たるに外ならぬ。

利子が利潤の一部である以上、利子率が利潤率によつて規制されることは明かだ。だが、勿論、貨幣資本家と機能資本家とは、商品市場とは別個な市場即ち金融市場と呼ばれる特殊の市場で對立するものだから、利子率は、個々の企業の利潤の大きさによつてではなく、平均利潤率によつて規制されねばならぬ。

従つて、利潤が低下するに従つて、利子率も低下する。

だが、利子率は、利潤率の諸變動とは獨立にも低下する傾向を持つ。何故なら、第一に、富の發達が進むにつれて、祖先の勞働によつて生れながらに資産を有し、その利子のみで生活し得る一階級が

生じ、それがまた／＼大きなものとなる。第二に、信用制度が発達し、それにつれて産業經營者や商人が銀行業者の媒介によつて社會の凡ゆる諸階級の貨幣貯蓄を利用することが不斷に増大し、更にこの貨幣貯蓄がますます／＼集積されて貨幣資本たる機能を盡し得るやうになる。

然し、それにしても、總利潤の幾割が利子になり、幾割が機能資本家の手に残されるかといふ問題が残る。

利附資本は、貸附資本家の手においては貸附資本として、機能資本家の手においては産業資本として、といふ風に二重に資本として現れるのだが、しかもそれが現實に資本として機能し、利潤を産むのはたゞ一度だけである。生産過程の内部では、貸附資本たるの性質は、何等の役割をも持つものではない。それ故、いくばくが貸附資本家の手に歸し、いくばくが機能資本家の手に歸するかといふことは、一の必然性をもつて定められるものではない。それは總じて、需要供給によつて、競争によつて、定められる。商品の場合にあつては、需要供給は、生産價格の法則に規制せられつゝ、生産價格を中心に變動した。けれども利子においては、競争は法則からの逸脱を決定するものではなくて、むしろ、競争によつて決定されたもの以外には、何等分割上の法則は存在しないのだ。従つて、「自然的」利子率なるものは存在し得ない。

利子は、市場において、需要と供給によつて絶えず變動する。需要と供給が一致した場合には、利

子は、傳習的な、無法則的な、專擅的なものになる。吾々が先に述べた利子率の低下とは、傾向としての存在である。

貸附け得る貨幣資本は、資本主義生産それ自體の機構から生じて産業資本家の手に所有されるやうになる。(一) 固定資本を更新する目的をもつて積み立てられた資本、(二) 資本の回轉期間の性質から不可避的に休息状態に置かれる流通資本の一部分、(三) 可變資本の一部分、(四) 實現された剰餘價值にして將來資本に轉化されるまで積立てられたもの、等。そしてこれらのものは、資本主義生産の發展に比例して増大する。他方において、産業資本家達は、生産擴張のための生産擴張の遂行者として、絶えず貨幣資本の借手となつて金融市場に登場する。

(三) 銀行及び銀行信用

商業が發展し、單に流通のみを顧慮して生産を行ふところの資本主義生産が発達するに従ひ、一方では信用制度の原生的基礎はますます／＼擴大され、普遍化され、他方では貸附資本の需要及び特に供給が増大する。が、それらと共にまた、貨幣取引業が銀行業にまで發展し、銀行はますます／＼大きな役割を演ずるやうになる。貨幣取引業なるものは、その最初の形態においては、金銀を商品として取引することから出發する。次いで、それは、貨幣の世界貨幣たる諸機能(兩替等、等)を媒介するの機能

を獲得する。更に、營業に従事する人々の準備金の保管、貨幣の收支、國際的支拂の技術的操作、といふやうな諸業務が、この人々の手に集積される。

が、最後に、『信用制度の他の方面たる、利子附資本または貨幣資本の管理といふことが、貨幣取引業者たちの特殊の機能として發達し、貨幣の質貸借は彼等の特殊營業となつて来る』。かくて、貸附け得べき貨幣資本は大量的に彼等の手に集積される。彼等は、今や、一方ではすべての貨幣貸附者達の代表として借受者達に對し、他方ではすべての借受者達の代表として、貸附者達に對するものとして立現れる。貨幣取引業は、近代的な銀行そのものに發展する。

諸銀行の支配に屬する貸附け得べき資本は様々な源泉から様々な経路を経て銀行に流入して来る。

第一に、銀行は産業資本家達の出納業者であるから、各生産者や商人が準備金として持つてゐる貨幣資本が銀行に集積される。そして産業界の準備金は、共同的のものとして集積される結果、必要な最低限度に制限され、他の場合ならば、準備金として遊休したであらうところの貨幣資本の一部が、貸附られ得る利附資本に轉化される。第二に、諸銀行の貸附資本は、『これが貸附を諸銀行に委ねた貨幣資本家達の預金から成る』(註四)。第三に、消費基金、貯蓄貨幣及び瞬間的に使用されずにある各種の貨幣が銀行に預託され、單獨では貨幣資本たるの機能をつくす力のない個々の微細な金額が、大まともに結合されて一の貨幣力を形成することになる。(この様に微細な金額を諸所から集めること

は、これを銀行制度の特殊機能としてみると、嚴密の意味の貨幣資本家達と借受者達との間の媒介者たる機能からは區別しなければならぬ)。

(註四) 高島譯「資本論」第三卷上、三六一頁。

だが、單に金を預かるだけでは、銀行の營業は成立しない。彼は、これによつて商業手形を買ふか、貸附を行ふか、または單に有價證券を買入れるか等、何れにせよ、預託せられた貨幣の大部分は再び銀行の外に投げ出される。

かくて、例へば、今日Aが預託した一千圓が、明日は銀行を出てBの手に渡り、BからCに渡つて、Cの預金となるといふ工合に、總預金の大部分は、債務請求權や、株式や、國債券の形をとつて、銀行業者の帳簿以外には何等の存在をも持たないことになる。かやうに、同一個貨が反復的に貸附資本となる限り、それは、或る一點においてのみ金屬貨幣として存在し、他のすべての點においては、單に請求權として存在するにすぎないのであつて、そして、この請求權の蓄積こそは、現實的蓄積から、換言すれば商品資本そのものの價値の貨幣化から生じてゐる。

だが、同一個貨が、多くの預金額を成立させるといふことは、反面から言へば、同一個貨が多くの債務を成立せしめるといふこと、従つてまた多くの貸附を行はせるといふことである。

例へば、二十圓の金額が五人の手に渡つて五度貸附けられるとすれば、それによつて合計一百圓の債務が成立する。

だが、かくして合計百圓の貨幣資本の蓄積が行はれるといふことの中には、この二十圓が少くとも四度は購買手段又は支拂手段として機能するといふことが前提されてゐる。けだし、この貨幣が、現實に幾個の資本を代表するかといふことは、それが幾回相異つた商品諸資本の價值形態を取るかといふことによつて決定されるのであつて、二十圓といふ金額が、少くとも四度は、資本の轉化された形態を、商品(勞働力を含む)を代表しなかつたとすれば、合計百圓といふ資本の成立は行はれず、單に同一の資本價值が、五個の處點に姿を現はして請求權を成立せしめたといふだけのことにはすぎないだらう。

されば、相對的に少量の貨幣をもつてして、いかに多くの預金が成立せしめられるかといふことは、主として次の事情によつて決定される。

『(一)同一の個貨を以てされる購買及び支拂の度數。』

(二)この個貨を預金として銀行に復歸せしめ、それが購買手段及び支拂手段として反復する機能を預金化の更新によつて媒介せしめるやうにする復歸運動の度數。例へば、或る小賣商人が毎週一百磅づゝ銀行業者に預託し、銀行業者はこれを以て製造業者の預金の一部を拂出し、製造業者はまたこれ

を以つて勞働者達の賃銀を支拂ひ、更に勞働者たちはこれを以て小賣商人に支拂ひ、而して小賣商人は新たにこれを銀行に預金すると假定してみる。この場合、小賣商人によつて預託された一百磅は、第一には製造業者の預金を拂出すことに、第二には勞働者達の賃銀を支拂ふことに、第三には小賣商人彼自身に對して支拂をなすことに、第四には同じ小賣商人の貨幣資本の更に新たなる一部を預託することに役立つ譯である。若し小賣商人自身が銀行からこの貨幣の拂出を受ける必要がないとすれば、二十週間の終末には、彼は同じ一百磅を以て二千ポンドといふ金額を銀行に預託したことになる』(註五)。

(註五) 高島譯「資本論」第三卷下、四〇一頁。

吾々は、これまで、銀行が貨幣を交付する一切の機能を、一括して『貸附』と呼んで來た。然し、銀行業者の所謂『貸附』——銀行信用——なるものの中には、單に「貨幣への兌換」を意味するにすぎないものと、眞實の意味での「貨幣資本の貸附」とが含まれてゐる。

銀行が、手形割引の形で、前貸を與へる場合には、非流動的な信用貨幣の形態にある貨幣資本を銀行に販賣して、流動的な形態の價值高を銀行から受取るにすぎない。この場合は、たゞ形態を異にした資本價值の相互移轉が行はれるだけであつて、彼は銀行から何等の追加資本をも受取りはしない。

従つて、この場合割引を受けた者は、何ものも返済する必要はない。要するに、彼にとつて必要なのは、支拂手段だったので、彼の受ける利益は、彼がもはや現實的回流に依頼する必要がなくなり、従つて多額の準備資本を要しなくなるといふ點にある。銀行信用は、まさにこの點で、普通の意味の商業信用に更に流動性を與へることになる。

銀行の前貸が、無擔保ではなしに、有價證券たる國債や株券やを擔保として、與へられるとすれば、それは返還を條件として彼に貨幣が支拂はれるといふ意味の前貸であつて、資本の前貸ではない。蓋し、有價證券もまた、資本を、それも前貸より多額の資本を、代表するからである。前貸を受ける人はむしろヨリ少額の資本價值を與へられるのであつて、決して追加資本を受けたことにはならぬ。この場合、前貸を受けた者は、何等かの理由からその有價證券を貨幣に轉化させることを欲せず、銀行との間に一時的な價值の相互移轉を行ひ、必要な貨幣を受けたにすぎない。要するに、こゝでも、貨幣の前貸は行はれたが、資本の前貸は行はれてゐない。

だから、銀行が現實に資本としての貨幣の貸附を行ふのは、それらの場合以外の時である。だが、社會的に見て、或は取引客の立場から見ても、それが貨幣の貸附であるにせよ資本の貸附であるにせよ、銀行自身にとつてのそれは、一の資本——即ち一の剩餘價值をもたらしところの資本——として現れるのは事實であつて、銀行は、他人の貯蓄及び再生産上資本家達が與へ合ふところの信用を以て、彼

自身の私的致富の源泉たらしめる。『資本を以て所有者自身の労働及び貯蓄の果實なりとする、資本制度の最後の幻想は、かくて破碎される。單に利潤の存在が他人の労働の占有に在るといふのみではなく、更らに他人の労働を運轉し搾取せしむるところの資本も亦、他人の所有から成るものであつて、貨幣資本家達はこれを産業資本家達の利用に委ねる』。

が、銀行は、それと同時にまた、單なる仲立人から、産業資本に對する支配權の掌握者にまで發展する。

それだけではない。彼は、彼自身が公衆國家から受ける信用を以て、彼自身の私的致富の主要なる手段たらしめる。銀行券がそれである。彼は他人の貨幣のみでなく、彼が公衆から受ける信用を、彼自身の資本たらしめるのだ。

(四) 信用貨幣、銀行券

商品生産の發展に伴ひ、商品が貨幣に對しては販賣されず、何月何日に支拂ふといふ約束に對して販賣されるやうになるといふことは、すでに幾度も述べてゐる。この場合、約束は、原則として文書の形態を取つて行はれる。いま、これらの文書を概括して商業手形又は爲替手形と呼ぶならば、爲替手形は、その支拂期日に至るまでの間、Aの振出したものが先づBに、Bは更に裏書によつてCにと

いふ風に轉々として、手拂手段としての機能を營み、且つかゝるものとして彼等の間では、流通手段たるの機能をも盡し得る。言ひ換へるならば、爲替手形は、彼等の間で——主として大きな商取引の中で——貨幣の機能をつくす。かく、購買商品それ自身についての債務證書が、債務請求權移轉の目的を以て再流通せしめられるとき、それは信用貨幣なのである。

銀行券も、また、かゝる信用貨幣の一種にすぎない。だが、それは、無記名であり、無期限であり、額面金額に端數なく、しかもそれが細分されてゐる、更に國家の與へる信用がこれを支持してゐる、等々の特徴を持ち、それ故に『單なる商業上の流通から出て來て一般的流通に入り、彼處において貨幣たる機能』(註六)をつくすところから、素人目に特に目立つた、特殊なる本質を持つかの如きものとして現はれる。

(註六) 高島譯「資本論」第三卷上、三六二頁。

かくて、銀行券は、最も發達せる形態における信用貨幣である。

銀行券は、銀行が自分自身に向けて發行する爲替手形であり、それと引換へに一定量の金貨幣を支拂ふといふ債務證書であり、それ故に一の信用證券である。されば、銀行券は、他の一切の信用貨幣と同じやうに、何よりも、先づ信用の表章である。

が、この場合信用を受ける者が銀行であつて、與へるものが公衆であることは明かだ。銀行は、公衆から受けたこの信用を以て、貨幣或は資本の貸附を行ふ。彼が貸附を、かくの如き形態——銀行券の形態をもつて行ひ得るのは、彼が公衆によつて信用を與へられてゐるからにほかならない。しかも彼の受けるかくの如き信用は、彼にとつて、資本の價值増殖上の手段として役立つてゐる。されば銀行が、地窖内の金屬準備によつて保證されない銀行券を發行する限り、銀行は、『單に通用手段を形成するのみでなく、尙又これ等の無保證券の名目額に相當した追加空資本をも形成するところの、一の價值表章を造り出すものであつて、この追加資本は同銀行に一の追加利潤をもたらす』(註七)。

(註七) 高島譯「資本論」第三卷下、八三頁。

だが、それにしても、これによつて硬貨の節約がなされることは事實である。『一の國民的節約が私利利潤として現れる』ことは、ブルジョアジーにとつて、信用制度の一美點をなす。

銀行券は、信用貨幣であり、この信用關係を通じて、一般的な價值表章たらしめられる。それ故、これは、貨幣の流通手段機能から發生した國家紙幣、流通する限りにおいてのみ價值表章たり得るところの紙幣とは、本質的に異なるものである。

それは、本質的に異なるばかりでなく、また本質的に異なるが故に、發行の形式においても、流通

法則においても、運動形態においても、紙幣とは全然異なつてゐる。

『流通の速度と支拂の節約とが與へられてゐると前提すれば、現實的に流通する貨幣の數量が、商品の價格と取引の數量とに依つて決定されることは、單純なる貨幣流通を考察せる際に……論證した通りである。同一の法則は、銀行券流通の場合にも支配してゐる』(註八)。

(註八) 高島譯「資本論」第三卷下、六三頁。

銀行券は、それが信用を保つ限り、即ちそれが信用貨幣である限り、直接一定量の金そのもの、代理物として通用し得るのであり、紙幣が、一定の機能においてのみ、金の表章たるのとは異なるからである。

されば、信用の保たれてゐる範囲内においては、銀行券の流通量は、専ら商品流通に依存してゐるのであつて、それは金準備の運動からも、また發券銀行の意志からも獨立してゐる。不要なる銀行券は退藏せられるか、銀行預金になるか、又は發券銀行に舞ひ戻つて行くであらう。

然しそれにしても、銀行券は、自己の信用を保持し得るためには、——兌換準備金のことは暫く措くとして——國家紙幣におけるが如く專擅的に發行せられてはならぬ。また、「正常的」諸條件の下においては、銀行券は專擅的に發行されるものではない。銀行券は、外國から流入した金にせよ、國

内で生産せられた金にせよ、金と引換へに發行される。さうでなければ、「貸出」の形式で發行される、たゞそれだけである。

ところで、金と引換へに發行された銀行券が、銀行券の信用喪失に導くやうな事情は何處にもない。他方において、「貸出」の形式で發行される場合を見るに、それが貨幣の前貸であるにせよ、資本の前貸であるにせよ、それが商業乃至は流通の必要に基づくものでなければ、何人も利子を支拂つてまで前貸を受けはしないであらう。さうだとすれば、銀行券は、流通の要求を無視して專擅的に發行され得るものではない。

銀行券の發行高と流通高は決して一致するものではない。だが、最小限度の兌換準備金は與へられてゐるものと前提すれば、銀行券の發行がかやうに專擅的には行はれ得ないといふことは、銀行券が信用を保持する上においての、従つてまた銀行券の流通が貨幣自體の流通法則に一致するための主要な必要條件である。

けれども、信用制度がこのやうに弾力性に富むものになるといふことは、他面から言へば、又その缺陷でもある。と言ふのは利子を取つて貸出すといふことは、借り手の側では必要のないものは借りないことになるのだが、貸す方の側から言へば、なるべく多く貸して多く利潤を得たいことになる。従つてそれは、しばしば、手形詐欺人や、泡沫會社の乗するところとなる。即ち、過大なる信用が與